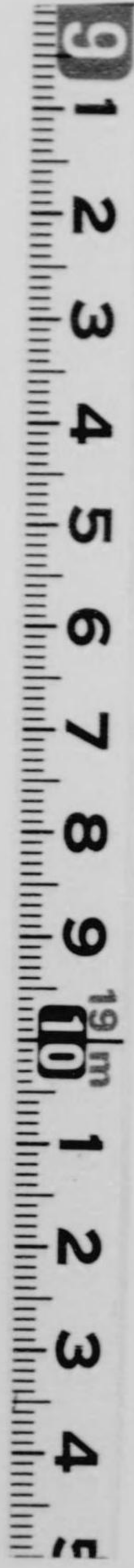
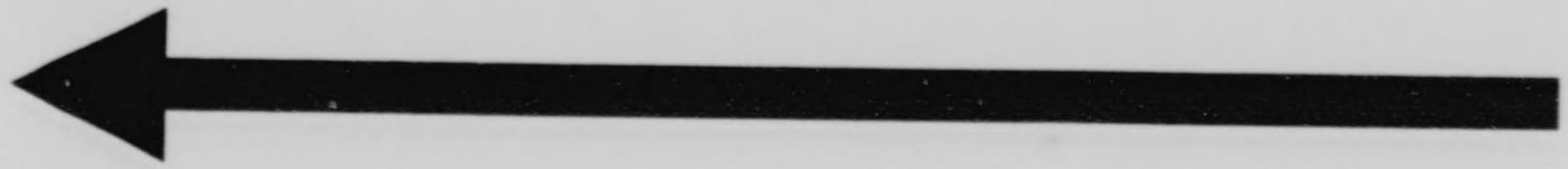


379
12



始



379-12

國譯禪宗叢書

第八卷

大正
9. 8. 17
内交

國譯禪宗叢書第八卷凡例

一、本叢書第八卷に收むる所の書は、洞山大師語錄(一卷)、曹山大師語錄(二卷)、宏智禪師頌古(二卷)、永平道元禪師語錄(一卷)、坐禪用心記(一卷)、法眼禪師十規論(一卷)の六部七卷なり。洞山曹山二大師の語錄は、共に徳川時代我が國に於て編纂せられ、且つ兩種の刊本あり、其の一は即ち曹洞二師語錄なり。今次國譯に際しては、別刊の洞山大師語錄、曹山大師語錄に據り、校正に際しては、曹洞二師語錄を用ひ、稍兩者の異同を詳かにせり。宏智禪師頌古は坊間の流通本に據り、校合につきては、茂林寺梵丁和尚の冠註、萬松老人從容錄筆削を参照せり。永平道元禪師語錄は我が南北朝の頃、既に開版せられたるも、近時之を得るに由なく、寛文年間、版本に據りて國譯せり。坐禪用心記、法眼禪師

十規論も是れ亦共に坊間の流通本に據りたり。

一以上六部の書中洞山曹山二大師語録は支那に於ける曹洞宗始祖の遺篇にして宏智禪師頌古は同じく曹洞下名宿の撰述なり。而して法眼禪師十規論は支那法眼宗の始祖清涼文益禪師の著述にして此の書既に我が國康安元年洛北妙光寺の三光庵に於て開版せられ夙に我が國に流傳せしが徳川時代に入りて寶曆六年曹洞宗の乙堂大圓の二師共に謀りて印行せしより爾來曹洞下の衲僧之を讀まざる者なし故に茲に之を纂輯せり。

一永平道元禪師語録は日本曹洞宗の鼻祖承陽大師の遺録にして坐禪用心記は同じく太祖常濟大師の撰述に係る。兩大師の遺録現に流傳するもの多しと雖も承陽大師の普勸坐禪儀と常濟大師の坐禪用心記とは兩祖が暖皮肉とも觀るべきも

のなれば今次茲に收載せり。

一以上六部七卷の書中法眼禪師宗門十規論を除くの外は曹洞宗専用の書にして宗外の人にして之を讀む者稀なり。今此の國譯によりて普く流傳するを得ば單に編者の幸のみにあらざるなり。

大正九年七月

編者誌す

國譯禪宗叢書 第八卷

目次

國譯洞山悟本大師語錄解題	一
國譯洞山悟本大師語錄	一
洞山悟本大師語錄原文	一
國譯撫州曹山本寂禪師語錄解題	二
國譯撫州曹山本寂禪師語錄	一
撫州曹山本寂禪師語錄原文	一
國譯天童覺和尚頌古解題	二

國譯天童覺和尚頌古	一一一
天童覺和尚頌古原文	一一一
國譯永平道元禪師語錄	一一一
國譯永平道元禪師語錄解題	一一一
國譯永平道元禪師語錄	一一一
永平道元禪師語錄原文	一一一
國譯坐禪用心記	一一一
國譯坐禪用心記解題	一一一
國譯坐禪用心記	一一一
坐禪用心記原文	一一一
國譯淨慧法眼禪師宗門十規論	一一一
國譯淨慧法眼禪師宗門十規論解題	一一一
國譯淨慧法眼禪師宗門十規論	一一一
淨慧法眼禪師宗門十規論原文	一一一

國譯洞山悟本大師語錄

解題

此の書具さには筠州洞山悟本大師語錄と稱す。支那曹洞の高祖たる大師、發心の時より、過水悟道の後、新豐山、或は洞山に於て爲人度生六十三年間の語要及び五位、寶鏡三昧、玄中銘、新豐吟、三種綱要等を收む。初め印月坡なる者、諸書の中より大師の語句を抜き、集めて洞山語録と題して刊行したるも、その編纂臆裁多きを以て、弘く世に行はれざりしが、元文中、紀州瑞龍寺の宜默玄契之を慨し、異同を校讎して重編刊行せり。林泉元趾の序、玄光覺城の書後、并に宜默の自序によつて、其の因由を知るべし。寶曆十一年慧印指月更に校訂して復版したる者盛に行はると雖も、今は宜默に従ふ。按ずるに洞山大師、諱は良价、俗姓は俞、支那會稽の人、唐の憲宗皇帝の元和二年(西曆八〇七)に生る。幼にして出家し、尋で五洩の靈默に師事す。二十歳嵩山に於て具足戒を受け、更に游方し、南泉普願、潯山靈祐等に歴參し、潯山の指示により、雲巖曇晟に謁して、參究甚だ力む。一旦辭して再遊し、水を渡るに際し、豁然として大悟し、乃ち一偈を作る。謂ゆる過水悟道偈なる者は是れなり。遂に雲巖の衣法を嗣ぐ。大中の末、新豐山に住し、晩に筠州の洞山普利院に遷る。門下常に數百人ありし

といふ。唐の懿宗皇帝咸通十年(西曆八六九)三月八日に寂を示す、壽六十三、臘四十二。大師、定慧圓明、正偏回互、妙唱無比、其の資曹山本寂出藍の材あり、門風大いに震ひ、遂に曹洞の一宗を成す。勅して悟本大師と諡す。語録一卷あり、本書は即ち是れなり。

國譯洞山悟本大師語錄 序

從上の 宗乘、物の爲めに言を垂る、一へに 塗毒鼓を搦つが如し。聞く者は皆喪す。絶後に乃ち重ねて甦り、無舌にして解語す。湖南の正脈、青石の濫觴、五傳して 新豊に迫り、一瀉千里、百谷朝宗、法性の波瀾渺として、涯涘無し。矧んや夫の文章、富贍、家法縝密、高く寶鏡を懸け善く來機に赴く。入室の神足に非ざるよりは、阿誰か敢て鞭影を窺はん。門外の遊人、逡巡して退縮、歐峯奔逸、絶塵 荷玉、步趨踵を繼ぎ、以至二八の賢品樽を執つて馳す。駭々乎として其れ壯なる哉。其の片言隻字、崑壁南金、多く陳編に載すと雖も未だ全録有ることを見ず。僉曰く、「祖庭の闕典」と。同心浩歎せずといふこと莫し。宜默禪

①序。叙に同じく、緒に通ず、文體の一種、即ち「はしがき」なり。
②宗乘。宗は宗家と熟字して本家の意、沩磨門下の教法を指す、乘は運載の義にして、衆生を運載して佛地に至らしむるの意なり、今宗乘とは教家の大小乘に對して達磨單傳の宗義をいふなり。

③塗毒鼓。毒藥を塗りたる太鼓のことにして、如來眞實の説法に喩ふ、蓋し毒鼓を打つて聲を發す、聞く者皆死するが如く、如來の説法又之を開けば食膿痲等、悉く滅盡すとの意なり。
④無舌にして解語。無舌は言語文字の相を離れたるをいふ、理盡き言窮りたる佛祖の大道

は、舌頭の能く及ぶ所に非ず、無舌にして始めて語ることを解すといふ意。
⑤湖南の正脈。湖南は慧能を指す、蓋し曹溪山は支那湖南省に在るが故なり、正脈は正しき法脈の意。
⑥青石の濫觴。青石は青原山行思禪師及び石頭山希遷禪師を指す、濫觴は起源の意。

人之れが爲めに慷慨^①、髮指す、纂錄^②惟れ懋^③め、采摭^④殆んど盡き、乃ち釐^⑤めて、壹局^⑥と作す。昔者^⑦、湛然^⑧澄禪師、得山林居士等、叢書^⑨を涉獵^⑩して、玄沙^⑪の語を鈔録^⑫し、際天浴日^⑬の海鹹^⑭を一滴^⑮に味ひ、以て禪者の渴心^⑯を慰す。今や宜默^⑰、其の故事に倣^⑱ふ者か。謂^⑲つべし勤めたりと。若し夫れ一

①新豐山。洞山大師を指す、蓋し新豐山に住せしを以てなり。
②富贍。足り整ふて豊かなること。
③歐峰。雲居山道膺禪師を指す、雲居山は一名歐峰と稱するが故なり。
④荷玉。曹山本寂禪師を指す、蓋し初め荷玉山に住すればなり。
⑤駸々乎。馬の疾く進む貌。
⑥崑巒南金。崑巒は崑崙山の玉のこと、劉子新論に曰く、崑山の下、玉を以て鳥を抵つとあり。南金は最も貴き黄金の意、昔支那の南方に産せしよりいふ。

⑦禪人。禪門に歸したる人の意、法師等に對していふ。
⑧慷慨髮指。慷慨は意氣感激して平かならざる貌、慨は憂悼、心に在る貌、髮指は怒髮衝冠の意。
⑨壹局。寫は卷に同じ、古書多く局の字を用ふ。
⑩湛然澄禪師。諱は圓澄、湛然は其の號なり、支那會稽の人。
⑪得山林居士。支那閩中の人。
⑫涉獵。水を涉り獸を獵る意よりいふ。書言故事に「博覽を涉獵といふ」とあり。
⑬玄沙の語を鈔録。玄沙宗一禪師語錄三卷是れなり、玄沙廣錄に洩れたるを蒐めたるものにして、卷頭に湛然澄の序、

得山の緣起、玄沙の小傳を載せ、上堂、拈香、垂語等を收む。
⑭雲仍。遠孫又は雲孫といふに同じ。釋名に「雲孫は己を去ること遠くして、浮雲の如くなるをいふ」とあり。
⑮瀾漫。水の満ちみなざるをいふ。
⑯沾丐。沾は露に通ず、うるほふこと、丐は乞丐の意。
⑰弁。冠に同じ。
⑱元文の戊午。元文戊午は櫻町帝元文三年に當る、西紀一七三八年なり。
⑲稽首。拜して首の地に至るをいふ、額を地につけて拜をなすことにて、最も丁寧に拜するをいふ。

家の雲仍^①、標^②に因つて月を見、意を得て言を忘じ、個々^③臣君に奉じ、人々^④子父に就くときんば、洞水の逆流^⑤、四海に瀾漫^⑥せん。其の沾丐^⑦を被る者、孰れか敢て隨喜^⑧せざらんや。因つて緒言^⑨を叙し、

其の卷端に「弁らしむ」。

①元文の戊午百鐘吉旦

住林泉沙門元趾 稽首拜題

國譯 重集洞山悟本大師語要自序

吾が 大雄氏の心印に於ける、淵々浩々、戲大なるかな。在昔此の教や、機を 靈山に發して 少林に達り、燈々明を繼ぎ、奕葉纓綬し、以て我に及ぶ。然れども年世寢た遠し、其の勢や同異無きこと能はざるのみ。最も其の昭々たる、靈山に若くは莫し。靈山以て還は少林に若くは莫し。少林以て還は曹溪に若くは莫し。曹溪の一脈流れて 兩派と爲る。涇流の大小 沛然として其の波瀾狂す。此の時の方つて障へて之を東せしむる者は、是れ乃ち 濟上洞上の二家に出づ。二家各々其の存する所の者有り、師々たる幾語相與に 嚶其、誨を千載の下に垂る。然りと雖も其の語 縝密に、其の 機高尚なり。之を 郢中の歌に譬ふ、其の曲彌々高うして其の聲彌々奇なり。所謂國中屬して和するもの數人に過ぎざるのみ。所以に洞山語録の如き、其の傳絶ゆ。其の語存すと雖も春池に浮沈し礫と相混す。其の故は何ぞや。

- ① 重集。集編と殆んど同意、宜默以前已に洞山の語要の集録なきには非ず、但だ傳はらざりしのみ、故に今は重集といふなり、蓋し又自ら謙するの意をも寓するもの歟。
- ② 大雄氏。釋尊をいふ。
- ③ 靈山。靈鷲山のこと、中印度摩揭陀國王舍城の東北に聳ゆ、釋尊說法の處として名あり。
- ④ 少林。少林寺のこと、支那河南省嵩山にあり、達磨面壁の處として名あり。
- ⑤ 奕葉纓綬。奕葉は重りたる葉のことにして、累世の意、纓綬は冠の垂れ紐のことにて、傳來といふ程の意。
- ⑥ 曹溪。支那廣東省韶州府の東南三十里にあり、六祖慧能を

杜撰の輩、妄りに凡情を以て古語を 改易すればなり。最も其の甚だしきものは、**「觀察使」**の語の如き皆改易す。**「渠れ今正に是れ我れ、我れ今是れ渠れにあらす」**の語の如きは、「正に是れ」を更へ、「是れにあらす」と作すもの有り。或は「是れにあらす」を改め、「正に是れ」と作すもの有り。是を以て其の脈斷絶せざることを能はざるものか。又「也た前朝斷舌の才に勝れり」の句の如き、「前」を易へ「知」に作すときんば、其の義了せざるものか。是を以て居士無盡と雖も、未だ嘗て本據を解せざるの間無くんばあらず。大凡そ此れに類す。予以爲らく、「今の世に居て古の道に志す、**孟浪猶は然り、況んや**後昆をや」と。是に於て古本を温尋し、**竊々乎**として同異を 校讎し纂集成んぬ。人或は予に

- ① 以て名高し。
- ② 兩派。青原行思、南嶽懷讓を指す。
- ③ 沛然。大なる貌。
- ④ 濟上洞上。臨濟、曹洞のこと。
- ⑤ 嚶其。其は助語辭、嚶は鳴と同意。
- ⑥ 縝密。つゝしみぶかく綿密なること。
- ⑦ 機用とつゞく。はたらきといふこと。
- ⑧ 郢。楚の都。
- ⑨ 杜撰。妄語にして格に合はざる撰述をいふ、轉じて粗漏の意に用ふ。
- ⑩ 改易。あらためかふること。
- ⑪ 觀察使。本文に「師、密師伯と百顔の哲禪師の處に到る。顔曰く、觀察使姓は甚摩ぞ云云」とあるを指す。
- ⑫ 渠今正是我。我今不是渠、これ洞山過水悟道の偈の句。
- ⑬ 也。勝前朝斷舌才。正偏五位類正中來の句。
- ⑭ 孟浪。とりとめなし、くはしからず、おろそかなどの意。
- ⑮ 後昆。昆も後の意、後世の子孫といふこと。
- ⑯ 竊々乎。明かに見ぬく貌。
- ⑰ 校讎。かんがへしらぶること、誤りを見出すこと、疑を搜すが如くするよりこの語あり。
- ⑱ 本文の註に就いて見るべし。
- ⑲ 唯。應答の語、俗に「はい」といふこと。
- ⑳ 芒乎。まどひくらむ貌。
- ㉑ 不。非の意。
- ㉒ 編修。とよひ修むること。
- ㉓ 風々。小さき貌。
- ㉔ 仲春。陰曆二月。
- ㉕ 精舍。梵語毗阿羅の譯、精練なる佛法の修行者の居る處といふ義にして、寺院のこと。

謂つて曰く、「諸佛の言教生冤家に似て始めて參學の分有り。此れは是れ洞山大師の語にあらずや。」
曰く、「唯、然り之れ有り。」曰く、「奚爲れぞ非なるや。」予曰く、「將に謂へり、祖佛無しと、況んや
言教をや。」或人予が言を聞き、芒乎として答ふる無し。予曰く、「已みなん已みなん。苟くも、不なる
もの有らば、此の語の編修に於ける、今や區々として其れ再びすべけんや」と。

是れ歲戊午 仲春十五日、

日本國沙門玄契、歌浦瑞龍、精舎に涉筆す。

國譯洞山悟本禪師語錄

參學 沙門 玄契 編次

師、^①雲巖の眞を供養する次、僧問ふ、「先
師道く、祇這れ是れと、便ち是なることなしや否
や。」師曰く、「是。」云く、「意旨如何。」師曰く、「當
時は幾ど錯つて先師の意を會す。」云く、「未審し
先師還つて有ることを知るや也た無や。」師曰
く、「若し有ることを知らずんば、爭か、恁麼に
道ふことを解せん。若し有ることを知らば肯て
恁麼に道はん。」^②長慶云く、「既に有ることを
知る、甚麼としてか恁麼に道ふ。」又云く、「子を
養ふて方に父の慈を知る。」

①洞山。支那江西省豫章筠州高安に在り。此の山に普利院あり、雲巖の嗣真价此に住し、大いに化門を振る、曹洞の宗名實に此の山に由つて起る。

②禪師。禪師とは禪門高德の尊稱なり、善住意天子所問經には「一切法に於て不取不生と認知し得る者は、禪師と稱して可なり」と説けり。

③悟本。良价の謚號なり。良价、俗姓は俞氏、支那會稽の人、唐の憲宗皇帝元和二年（西曆八〇七年）に生る、出家、遊方等のことは本録行由編に詳かなり、大中の末、新豐山に住し、後洞山に遷る。門下常に數百人、唐の懿宗皇帝咸通十年示寂す。

④語錄。語は答違論難、録は采なり記なり、即ち語録とは禪林祖師の垂示、普說等を集録せるものを云ふ、但し語録とは必ずしも禪林のみに限るにはあらず、宋以後には儒者にも語録と稱するもの有るを知るべし。

⑤參學。參禪學道の略。

雲巖の諱日、師、齋を營む。僧問ふ、「和尙、雲巖の處に於て何の指示をか得たる。師曰く、「彼の中にありと雖も、指示を蒙らず。云く、「既に指示を蒙らず、又齋を設くることを用ひて甚麼か作ん。師曰く、「争か敢て他に違背せん。云く、「和尙初めて、南泉に見ゆ、甚麼としてか卻つて雲巖の爲に齋を設くるや。師曰く、「我先師の道徳を重んぜず、亦佛法の爲にせず、祇他の我が爲に説破せざることを重んず。僧云く、「和尙、先師の爲に齋を設く、還つて先師を肯ふや也たいなや。師曰く、「半は肯ひ半は肯はず。云く、「甚麼としてか全く肯はざる。師曰く、「若し全く肯はす即ち先師に孤負せん。問ふ、「和尙、本來の師を見んと欲す、如何か見ることを得ん。師曰く、「年牙相似たり、即ち

①沙門。沙門は梵語。勤息、止心、止息、出家人等と譯す、出家して佛道を修するもの、總稱なり。
②玄契。諱は宜默、紀州和歌山林泉寺の僧。
③編次。編次とは「あみついでる」ことにて、編纂、編輯と殆んど同意なり。
④雲巖の眞。雲巖は曇成禪師のこと、師師は百丈惠海に従つて參究すること二十年なりしも因縁契はず、去つて藥山惟儼に至り、之に投じて大事を了得し、嗣法す、洞山大師は此の門下に出づ、眞は御影なり。
⑤先師。雲巖を指す。
⑥恁麼。宋代の俗語にして「斯の如し」の意なり。
⑦長慶。長慶の慧稜、雪峰義存の嗣。
⑧諱。忌なり、諱日とは俗に云

ふ命日のこと、今雲巖の諱日は十月二十七日なり。
⑨齋。佛事の時の供養の食事をいふ。元來は潔齋と熟し、三業をつしむことにして、従つて時にあらざる時に食せざるをいふ。
⑩和尙。梵語に烏波陀耶といひ、親教師、力生等と譯す、もと阿闍梨と共に授戒の師たるもの、名稱なりしが、中古以來單に高僧の尊稱に用ひ、曹洞宗にては轉衣以上の者を呼ぶ尊稱に用ひらる。
⑪南泉。南泉普願、馬祖道一の嗣。
⑫孤負。又は辜負に作る、そむくこと。前漢書李陵傳に曰く、「陵、恩に孤くと雖も漢も亦義に負く」と。
⑬本來の師。本來の面目。
⑭年牙。牙は猶ほ齒の如し、齡なり。

阻なし。僧進語せんと擬す、師曰く、「前蹤を躡まず、別に一間を請ふ。僧無對。雲居代つて云く、「恁麼なるときは則ち和尚本來の師を見ず。僧、長慶に問ふ、「如何なるか是れ年牙相似たる者ぞ。慶云く、「古人は恁麼に道ふ、闍梨又這裏に向つて箇の甚麼をか覓む。上堂に曰く、「還つて四恩三有に報せざる者ありや。衆無對。又曰く、「若し此の意を體せずんば何ぞ始終の患を超えん。直に須らく心々物に觸れず歩々處所なく、常に間斷なくして始めて相應することを得べし。直に須らく努力すべし、間に日を過すことなけれ。僧問ふ、「寒暑到來、如何が回避せん。師曰く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。師曰く、「寒の時は、闍梨を寒殺

①前蹤。古人の足跡。
②躡。ふむと訓す、踐、踏も同じく、ふむなれども、其の間自ら別意あり、就中躡は先へ行く人の「アト」を「フム」と、人の衣の裾をふみ、軍を追撃する時などに用ふる字なり。
③雲居。雲居道膺、洞山の嗣。
④代語。代語に二種あり、第一に師家自ら垂語して大衆の答話を待つに、大衆無對なる時に、自ら大衆に代つて語を下す場合、第二、古則公案を擧して、古人無語の所に至つて自ら代つて語を下す場合、今は後の意なり。
⑤闍梨。梵語、軌範師と譯す、僧の尊稱なり。
⑥四恩。心地觀經には「一に父母の恩、二に國王の恩、三に衆生の恩、四に三寶の恩」と云へり、正法念經には「一に

母、二に父、三に如來大師、四に説法の師」を擧げ、若しこの四種の人に供養すれば無量の福を得て、未來は佛道を得と説けり。
⑦三有。婆娑論に曰く、「一は欲有、二は色有、三は無色有なり。問ふ、「有とは何の義ぞ。謂く、「一切有漏の法是れなり。佛の言く、「若し業、能く後生をして相續せしめば是れ有なり」と。
⑧間。「ひま、或は、しづか」と訓す、閑の意なり。
⑨闍梨。前注を見よ。
⑩寒殺熱殺。寒時は寒になりきり、熱時は熱になりきつて寒熱の念を生ぜざるをいふ。
⑪祖教佛教。祖教とは祖師の教なり、その祖師とは一宗一派の闍梨、又は一宗一派の系統に列し、世代に數へらるゝ人を云ふ、禪門にては達磨を特

し、熱の時は閻梨を熱殺す。」

上堂に曰く、「祖教佛教は、生冤家に似て始めて、參學の分あらん、若し祖佛を透り得ずんば、即ち祖佛に、謾じ去られん。」

上堂に曰く、「主人公を、坐断して、第二見に落ちされ。」北院、衆を出でて云く、「須らく知るべし、一人あつて伴に合せざることを。」師曰く、「猶ほ是れ第二見。」院使ち、禪牀を、掀倒す。師曰く、「老兄、作麼生。」院云く、「某甲舌頭の爛るを待つて即ち和尚に向つて道はん。」

早參、疎山の仁出でて問ふ、「未だ是れあらざるの言、請ふ、師、示誨せよ。」師曰く、「諾せざれば人の肯ふなし。」疎云く、「還つて、切にすべけんや也た無や。」師曰く、「爾、即今還つて切にし得てんや。」疎云く、「切にし得ずんば、即

稱することもあり、佛教とは如来の教のことにして、華嚴より涅槃に至る四十九年の横説縱説これなり。

⑦生冤家。冤は「あだ」と讀む、冤敵の義、生は熱の反對にて新の義、新しき譬敵、例へば父母の譬敵の如きをいふ。

⑧參學。參禪學道の略なること前註の如し。

⑨謾。設は「あざむく」、又は「あなどる」と訓す、今は欺謾の意なり。

⑩坐断。坐破或は断破と云ふも同じ。

⑪第二見。第二義門と云ふも同じ、向上の第一義に非ざる第二第三に下落するをいふ。

⑫北院。益州北院通禪師、洞山の嗣。

⑬禪牀。僧堂内に於ける坐禪する場所、住持人なれば椅子、雲納なれば單位なり。

⑭功勳邊。兒孫邊とも云ひ、本分に對する言葉なり、「てがら」「いさなし」と訓じ、修行の結果の方面を云ふ、此の邊の事を論ずるに有名な洞山の五位あり。一に向、二に奉、三に功、四に共功、五に功功なり。本録卷尾その義を詳かにするが故に今は略す、但し今こゝに功と云ひ、無功と云ふが如きは、必ずしもこの五位に配するに及ばず。

⑮那邊。這邊に對す、那箇に同じく彼方と云ふこと、又何處の義にも用ふることあり。

⑯前註を見よ。

⑰夜參。晚參に同じ、晚間に於ける小參を云ふ、教修清規の晩參に、凡そ衆を集めて開示するを皆參と云ふ。古人の徒を一匡するに、之をして朝夕

⑱掀倒。掀は「あぐ」「かぐ」と訓じ、倒は「たふす」と訓じ、掀倒は掀翻と略同意なり。

⑲作麼生。生は助辭、作麼は「何」と同じ。支那の俗語にして不審、疑問の語、「いかん」、「いかに」等の意に用ひらる。

⑳某甲。自己の稱。

㉑早參。朝參とも云ふ、晚參に對す。粥後に於て住持人、大衆を集めて陞堂說法するを云ふ。

㉒疎山の仁。撫州疎山の光仁、洞山の嗣、身相短陋なりしかば、時に矮師叔と稱すと。

㉓示誨。誨は「をしふ」と訓す。切。切は迫、急、憤、誠等の意あり。

㉔即今。只今の意。

㉕諍。諍は忌なり。

㉖此の事。此の一大事の略。佛祖の大道を云ひ表す換へ言葉。

㉗疎山。疎山の光仁なり。

に否扣せしめ、時として此の道を激揚せざるなし、故に每晚必ず參すること晡時に在り」と。

①侍者。師長の左右に常侍して、給仕輔佐する役の名、之に五種あり、五侍者といふ。

②適來。さき程といふ意。

ち諍む處なし。」
上堂に曰く、「此の事を知らんと欲せば、直に須らく花を生ずるが如くにして、方に他と合すべし。」疎山問ふ、「一切處に乖かざる時如何。」師曰く、「閻梨此れは是れ。功勳邊の事、幸に無功の功あり、子何ぞ問はざる。」云く、「無功の功豈に是れ。那邊の人にあらざらんや。」師曰く、「大いに人有つて子が、恁麼の問を笑はん。」云く、「恁麼ならば則ち、超然にし去らんや。」師曰く、「超然、非超然、非不超然。」云く、「如何なるか是れ超然。」師曰く、「喚んで那邊の人となすことは即ち得ず。」云く、「如何なるか是れ非超然。」師曰く、「辨處なし。」
夜參、燈を點せず、僧あり、出でて問話す。退いて後、師、侍者をして燈を點せしめ、乃

ち召す。①適來問話の僧出で來れ。其の僧近前す、師曰く、「三兩の粉を將取し來り、②這箇の上座に與へよ。其の僧拂袖して退く。此れより省發し、遂に衣資を罄捨し、齋を設け、三年を得て後辭す。師曰く、「善く爲せ。」時に雪峯侍立す、問うて云く、「祇這の僧の辭し去るが如きは、幾時か卻來するや。」師云く、「他は祇一去を知つて再來を解せず。」其の僧、堂に歸り、衣鉢下に就いて坐化す。雪峯上つて師に報す、師曰く、「然も此くの如くなりとも雖も、猶ほ老僧が三生に較ること有り。」

上堂に曰く、「一人有り、千人萬人の中に在つて、一人に背かず、一人に向はず。徧道へ、此の人の面目をか具す。」雲居出でて云く、「某甲參堂し去らん。」

師、衆に示して曰く、「佛向上の事を體得せば、方に些子語話の分あり。僧即ち問ふ、「如何なるか是れ語話。」師曰く、「語話の時、閑梨聞かず。云く、「和尚還つて聞かや否や。」師曰く、「我が語話せざる時を待つて即ち聞かん。」僧問ふ、「如何なるか是れ正問正答。」師曰く、「口裏より道はず。云く、「若し人あつて問はゞ、師還つて答へんや否や。」師曰く、「也た未

だ曾て問はず。問ふ、「如何なるか是れ門より入る者は實にあらざる。」師曰く、「便ち好し、休するに。」問ふ、「和尚出世幾人か肯ふ。」師曰く、「竝に一人の肯ふなし。云く、「甚麼と爲てか竝に一人の肯ふ無きや。」師曰く、「箇々の氣宇、王の如くなるが爲なり。」

① 歸るを云ふ、歸堂に同じ。
② 佛向上の事、佛陀は五十二位の最上なり、されど此れに住著すれば猶ほ病たるを免れず、故に更に向上の境界に至るべきをいふ。
③ 體得、體達、體解、體悉等に同じ。
④ 些子、些子は些少と同意にて「少し」或は「多少」の意。
⑤ 語話分、分は分際、語話すること出来る分際、現今の俗語に、「話をするだけの資格」と云ふに同じ。
⑥ 氣宇、人の度量、きぐらぬ。起經に曰く、「密造氣宇曠」と、又字は性なりとも云ふ、然れば氣質と同じく、「こゝろだて」なり。
⑦ 無心、有心に對す、求むる所なく、得る所なき心の意にて、善惡是非の爲めに動ぜざる心を云ふ。

⑧ 知るべし。
⑨ 省發、省悟、見性等と同意。
⑩ 衣資、衣服の資料の意にて、僧家金銀のことを云ふ。
⑪ 罄捨、残らず捨て、しまふこと。
⑫ 雪峯、福州雪峰山義存禪師のこと、期州德山宣鑑に嗣ぐ、三到投子九至洞山を以て名あり、古來其の名、僧俗の間に高く、千五百人の大善知識と稱せらる。
⑬ 衣鉢下、僧堂内に於ける各自の單位をいふ、各單の上には衣鉢を安置するが故に、斯く云ふなり。
⑭ 坐化、坐定しながら遷化せしをいふ。
⑮ 三生に較る、三度程生れ代り來つて、漸く洞山程の位に至るであらうといふこと。
⑯ 雲居、道膺のこと。
⑰ 參堂、堂は僧堂なり、僧に堂

東、或は西、直に須らく、萬里無寸草の處に向つて去るべし。良久して曰く、「祇萬里無寸草の處の如きは、作麼生か去らん。」左右を顧視して曰く、「此の事を知らんと欲せば、直に須らく枯木、花開くが如くにして方に他と合すべし。」僧あり、石霜に到る。霜問ふ、「和尚何の言句あつてか徒に示す。」僧、前語を擧す、霜云く、「人の下語するありや否や。」云く、「無。」霜云く、「何ぞ門を出づれば便ち是れ草と道はざる。」僧回つて師に舉似す。師曰く、「此れは是れ一千五百人の善知識の語なり。」別して云く、「大唐國內能く幾人か有る。」

① 上堂に曰く、「向の時作麼生。」奉の時作麼生。② 功の時作麼生。③ 共功の時作麼生。④ 功の時作麼生。⑤ 僧問ふ、「如何なるか是れ向。」

次に大衆一同、堂頭に向つて謝辭し、以て式を畢るを例とす。

① 萬里無寸草。萬里の間に草一本もなきこと、相對差別の相を混じたる平等一如の境に喩ふ、故に東西南北にあらず、春夏秋冬にも墮せざるなり。

② 良久。稍々暫くの間無言なるをいふ。

③ 石霜。慶諸禪師、道吾宗智の嗣。

④ 前語。萬里無寸草の語。

⑤ 下語。古則、公案又は頌古、垂示等の法語に對して、自己の見解を呈露するために下す語を云ふ。

⑥ 善知識。智徳衆に優れて能く人を教ふるの力ある人を云ふ。涅槃經に、「善知識とは法の如くに説き、法の如くに行じ、乃至正見を行じ人をして正見を行せしむ。若し能く是

の如くならば則ち名けて眞の善知識となす」と説けり。

⑦ 別語。他の問答商量して答へたるものに對して、又別に自己の見識を以て答を付するをいふ。

⑧ 此の上堂に於て所謂功勳五位の頌を示されたるなりと云ひて、一本には向、奉、功等一の作麼生の下に各其の頌を配記せり、此れ或は是ならん。

⑨ 向。功勳五位の第一位にして、人に本具の主人公あることを信じて、之に歸向する位を云ふ。

⑩ 奉。功勳五位の第二位にして、已に人々本具の主人公あることを知り、純一に其の命令に奉順するを云ふ。

⑪ 功。功勳五位の第三位にして、奉順の功に依りて人々始めて主人公に相見し、一切の妄見を透脱せる位なり。

師曰く、「喫飯の時作麼生。」云く、「如何なるか是れ奉。」師曰く、「背の時作麼生。」云く、「如何なるか是れ功。」師曰く、「鑊頭を放下する時作麼生。」云く、「如何なるか是れ共功。」師曰く、「色を得ず。」云く、「如何なるか是れ功。」師曰く、「不共。」又曰く、「混然として諱む處なし、此の外更に何を求めん。」師、衆に謂つて曰く、「心に擬するは是れ犯戒、味を得るは是れ破齋。」曹山曰く、「如今の人は佛味祖味の如き盡く滯著を爲す。」又曰く、「心に擬するは盡く差ふ、況んや復た言あるをや。」

衆に示して曰く、「佛向上の人、有ることを知らば方に語話の分あり。」時に僧有り、問ふ、「如何なるか是れ佛向上の人。」師曰く、「非佛。」(保福別して云く、「佛非。」雲門云く、「名不得狀不得、所以に非と言ふ。」法眼別して云く、「方便に呼んで佛と爲す。」)又曰く、「塵中不染の丈夫兒。」雲門云く、「拄杖は但だ喚んで拄杖と作し、一切は但だ喚んで一切と作す。」問ふ、「如何なるか是れ。」支中の又支。師曰く、「死人の舌の如し。」問ふ、「如何なるか是れ。」毘盧の師、法身の主。師曰く、「禾莖、粟幹。」問ふ、「三身の中、阿那身か。」衆數に墮せざる。師曰く、「吾れ常に此に於て切な

① 共功。功勳五位の第四位にして、本然の自性を徹見して後正位を守らず、自由の活動をなすと雖も、尙ほ未だ功位に誇るの念を脱する能はざるを云ふ。

② 功勳。功勳五位の第五位にして、功の極所を透脱して功不見す、自ら無功用の境に至るを云ふ。

③ 鑊頭。大獄なり、頭は勳字。

④ 擬。「はかり」と訓す、思量分別するを云ふ。

⑤ 破齋。非時食をいふ。

⑥ 佛向上の人。佛向上の事を會得したる人。

⑦ 保福。從展禪師、雪峰義存の法嗣。

⑧ 雲門。文偃禪師、雲門宗の祖、雪峰義存の嗣。

⑨ 法眼。文益禪師、法眼宗の祖、地藏桂琛に法を嗣ぐ。

⑩ 塵。塵とは六塵の、色聲香

り。「僧、曹山に問ふ、「先師道ふ、吾れ常に此に於て切なりと、意作麼生。」山云く、「頭を要せば便ち斫り去れ。」又雪峯に問ふ、峯、拄杖を以て劈口に打つて云く、「我れも亦曾て洞山に到り來る。」

師、鉢を洗ふ次、兩鳥、蝦蟆を争ふを見る。僧あり、便ち問ふ、「這箇は甚麼に因つてか恚廢地に到る。」師曰く、「祇園黎が爲なり。」

會下に老宿有り、雲巖に去つて回る。師、問ふ、「汝雲巖に去つて作麼生。」宿云く、「不會。」師代つて曰く、「堆堆地。」又、老宿、袈裟角を拈じて問うて云く、「父母未生の時還つて這箇有りや。」師曰く、「只だ今豈に是れ有らんや。」宿、手を搖す。

師、因に稻田を看る次、朗上座牛を牽く。師

曰く、「這箇の牛、須らく好く看るべし、恐らくは稻を喫し去らん。」朗云く、「若し是れ好牛ならば稻を喫せざるべし。」

師、維摩經を講する僧に問うて曰く、「智を以ても知るべからず、識を以ても識るべからず、喚んで甚麼の語と作す。」云く、「法身を讚するの語。」師曰く、「喚んで法身と作す、早く是れ讚せるなり。」

衆に示して云く、「一大藏教は只だ是れ箇の字。」

垂語して曰く、「直に本來無一物と道ふも、猶未だ他の鉢袋子を消得せず。僧即ち問ふ、「時時に勤めて拂拭せよといふ、甚麼と爲てか他の衣鉢を得ざる。未審し甚麼人か得べき。」師曰く、「門に入らざる者。」云く、「只だ門に入ら

味觸法の六境は、吾人の心を染汚するを以て塵といふ。拄杖。僧の携ふる杖のこと、禪僧之を携ふるは行脚の時危に乗じ、險を渉るに力を扶くるが爲めなり。

玄中の又玄。これ臨濟義玄創する所の三玄の一玄中玄を指すか。蓋し玄中玄とは四句百非を離れたる妙支無盡なるを云ふ。

毘盧師、法身主。毗盧は毗盧遮那の略、法身佛の意なり。法身とは眞如の理體にして如來自證の妙理なり、今毘盧の師、法身主とは最極至上の地位にして大尊貴生なるをいふ。

禾葉粟幹。事々物々皆法身なりとの意にて、明々たる百草頭、明々たる祖師意と同意なり。

三身。三種の佛身の意にて法身、報身、應身のこと、法身は前註の如し、報身は眞如の理を證悟する所の相好圓滿の色身、應身とは衆生の根機に應じて種々の身を現じて教化を施す化身をいふ。

阿那身。阿は助字、那は何と同意。

不墮衆數。淨名經弟子品阿難章、「佛身無爲諸數に墮せず」とあり、衆數の二字は須菩提章に見えたり。

先師。洞山眞价禪師を指す。

劈口。口を開くや開かざるやにといふほどの意、口を開くと同時にといふに同じ。

洗鉢。行鉢の後、其の鉢盂を洗ふをいふ。

蝦蟆。無尾類中、尖指類に屬する兩棲動物、又大なる蛙の異名。

會下。同一なる說法衆會の下に走りて、其の教を受くるも

- のをいふ、門下といふも同じ。
- 老宿。老年宿徳の略にて、長上の人を尊崇する語。
- 不會。會は會得なり、不會は俗に「わかりませぬ」と云ふ程の意。
- 堆々地。土の積みて動かざる貌。
- 袈裟角。袈裟の一角なり。角は隅なり。
- 拈す。拈は「つまむ」と訓す、持ち出すことなり。
- 維摩經。具には維摩詰所說經といふ、三卷なり、同阿闍佛國品に曰く、「智を以て知るべからず、識を以て知るべからず云々」。
- 智。智慧の略、事理の正邪を辨別する心の働きをいふ、六度の中の智慧波羅密のこと。
- 識。了別の義にして根に依りて境を認識する主觀の心ない

- ふ。心、意、識等と區別すれども、實は一心の異名と知るべし。
- 一大藏教。佛の説かれた一切の經文及び祖師の祖述せられたる凡ての論等を總稱す。
- 垂語。垂示、垂誡など殆んど同じ、師家、學人の爲めに教示の語を垂るをいふ。
- 神秀上座。「身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、莫使惹塵埃」の一偈を作る、慧能次頌して、「菩提元非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃」の一絶を作る。
- 五祖弘忍之を見て、慧能に衣鉢を授けて第六祖となす。
- 鉢袋子。子は助字、鉢盂に同じ、應量具等を收むる袋。
- 衣鉢。三衣と鉢をいふ、此は佛弟子常用の法具なり、禪門に於て付法の信標として之を師資相承せしが故に、遂に

ざる者の如きは、還つて得てんや也た無や。師曰く、「然も此の如くなりと雖も、他に與へざることを得ず。」

垂語して曰く、「直に 本來無一物と道ふも、猶ほ未だ他の衣鉢を消得せず、這裏合に 一轉語を下し得べし。且く道へ、什麼の語をか下し得ん。」上座有り、下語すること九十六轉すれども師の意に愜はず、最後の一轉始めて師の意に愜ふ。師曰く、「闇黎何を早く愜麼に道はざる。」別に一僧あり、密かに聴く。祇最後の一轉を聞かず、遂に上座に 請益す。上座肯つて説かず。是の如くにして三年 巾餅に執侍す、終に擧することを得さず。上座因に疾有り、其の僧曰く、「某甲三年、前話を擧せんことを請ふ。慈悲を蒙らず、善く取ることを得ずんば悪しく取り去らん」と。遂に刀を持し之に向つて曰く、「若し某甲が爲に擧せずんば、即便ち上座を殺さん。」上座、悚然として曰く、「闇黎且く待て、我れ汝が爲に擧せん。」乃ち曰く、「直鏡ひ將ち來るも亦著くるに處なし。」其の僧禮謝す。師因に 普請する次、巡察し去る、一僧の普請に赴かざるを見て、師問ふ、「爾何ぞ去らざる。」僧云く、「某甲 不安。」師曰く、「爾尋常健なる時何ぞ曾て 去來せん。」

法の名に代表せられ、法を得ふるといふことを衣鉢を傳ふと稱するに至れり。
①未審。未だ審かにせずと訓み疑ひ且つ問ふの語なり。
②本來無一物。末法の眞相は吾人の妄想分別を以て見るが如きものにあらざして、執着すべき物もなきをいふ。
③這裏。道は「此」に同じ。這裏は「このうち」、又は「こゝ」といふ程の意なり。
④一轉語。進退谷まりたる處に至つて、自由に身を轉廻するの一語、又は一語にして他を轉迷開悟せしむることを得るの語句をいふ。
⑤末後。最後なり。
⑥請益。學人が師家に就いて垂誨を請ふて自己を益するの意。
⑦巾餅、手巾、淨瓶の略、左右に常侍すること。

ぞ曾て 去來せん。」

師、僧に問ふ、「甚處よりか來る。」僧云く、「遊山し來る。」師曰く、「還つて頂に到るや。」云く、「到る。」師曰く、「頂上に人有りや。」云く、「人無し。」師曰く、「愆麼ならば則ち頂に到らざるや。」云く、「若し頂に到らずんば、争か人無きことを知らん。」師曰く、「我れ從來 這の漢を 疑著す。」

冬節 泰首座と果子を喫する次、乃ち問ふ、「一物あり、上、天を柱へ、下、地を柱へ、黒うして漆に似たり、常に動用中にあつて動用中收不得。且く道へ、過ぎて甚麼の處にか在る」と。泰云く、「過ぎて動用中にあり。」(一) 同安の顯、別して云く、「知らず。」師、侍者を喚んで果卓を擧退せしむ。

僧問ふ、「即今往來底、喚んで甚麼としてか則ち得ん。」師曰く、「不得不得。」一僧あり、延壽堂に在つて不安、師に見えんと要す、師遂に往く。僧云く、「和尚何ぞ人家の男女を救ひ取らざる。」師曰く、「爾は是れ甚麼の人家の男女ぞ。」云く、「某甲は 大闍提人家の男女。」師良久す。僧云く、「四山相逼る時如何。」師曰く、「老僧目前に也た人家の 屋簷下に向つて過り來る。」云く、「回互か不回互か。」師曰く、「不回互。」云く、「某甲をして甚

①悚然、おそる、貌。
②普請。大衆を普く請じて作務に従事すること。
③巡察。住持、衆僧を點檢するために衆寮を巡廻するをいふ。
④不安。病氣のこと。
⑤去來。自己の運作轉動をいふ、去就、去住等と同じく此處を去り、彼處に來るの意なり。
⑥這裏。道は「此」と同じく、漢は「者」と同じ、人を罵る時に用ふ、蓋し胡人中國を罵つて漢と云ひしに始まる歟。
⑦疑著。著は意味を強むるの語なり、疑の意。
⑧冬節。冬節は冬至の節ならん、冬至は二十四氣の一、陽曆十二月二十二日頃、又節は時期といふ意もあれば、冬節は只だ冬といふ意か、一本に冬夜とあるを見れば或は然ら

の處に向つてか去らしむ。師曰く、「粟衾裏に去れ。僧、嘘一聲し、「珍重」と云つて便ち坐脱す。師拄杖を以て頭を敲くこと三下して曰く、「祇與麼に去ることを解して、與麼に來ることを解せず。」

師、病僧を看す、僧云く、「火風雜散の時如何。師曰く、「來時一物なし、去も亦伊れに任從す。」云く、「羸瘵を爭奈せん。」師曰く、「須らく知るべし、病まざるものあることを。」云く、「如何なるか是れ病まざる者。」師曰く、「悟る時は則ち分寸もなし、悟らざる時は則ち山坡を隔つ。」云く、「前程還つて卜度を許さんや也た無や。」師曰く、「然も黒きこと漆に似たりと雖も、成立して今時に在り。」京兆の七師、僧をして師に問はしめて云く、「那箇、究竟して作麼生。」師曰く、「卻つて須らく他に問うて始めて得べし。」

蟾首座、師に問ふ、「佛の眞法身は猶ほ虚空の如く、物に應じて形を現すること水中の月の如しと、作麼生か箇の應底の道理を説かん。」師曰く、「驢の井を覘るが如し。」座云く、「是なることは則ち是なるも、只だ八成を道ひ得たり。」師曰く、「首座作麼生。」座云く、「井の驢を覘るが如し。」庵主あり、不安、凡そ僧を見れば便ち云ふ、「相救へ相救へ」と。多く下

語するも契はず、師乃ち去つて之を訪ふ、亦云く、「相救へ」と。師曰く、「甚麼をか相救はん。」主云く、「是れ藥山の孫、雲巖の嫡子なること莫しや。」師曰く、「不敢。」主、合掌して云く、「大家相送れ」といひて便ち遷化する。僧、師に問うて云く、「亡僧、遷化する、甚麼の處に向つてか去る。」師曰く、「火後の一莖茆。」

師、衆に示して曰く、「我れに三路ありて人を接す、鳥道、玄路、展手。僧問ふ、「師、尋常學人をして鳥道を行かしむ、未審し如何なるか是れ鳥道。」師曰く、「一人に逢はず。」云く、「如何が行かん。」師曰く、「直に須らく足下無私にし去るべし。」云く、「祇鳥道を行くが如きは、便ち是れ本來の面目なること莫しや否や。」師曰く、「閑黎甚に因つてか顛倒す。」云く、「甚麼の處

① 泰首座、南岳の玄泰首座、潭州石霜山慶諸禪師の法嗣。首座は首衆又は第一座とも稱す、叢林に於て大衆の首位にあるが故に此の名あり、多年徧參の功成りて大事了畢の者を以て任するの職なり。
② 同安の顯、洪州風棲山同安院紹顯禪師、法眼文益の嗣なり。
③ 延壽堂、病室のこと。
④ 大闡提、闡提は梵語、信不具、又は斷善根と譯す、本來解脫の因を缺きて永久に成佛出來ざる者のこと。
⑤ 四山、生、老、病、死の四を山に喻へたるなり、別譯雜阿含經、涅槃經等に出づ。
⑥ 屋簷下、簷は軒なり、屋簷下のこと。
⑦ 回互、不回互、石頭の參同契に、「回互と不回互」とあり。甲乙彼此相互に交參涉入するこ

とを回互といふ、不回互は此の反對なり。
⑧ 粟衾裏、衾は新に開拓して三年を経たる田なり、故に粟衾は田の中といふことにて、一切分別を離れた處の義なり。
⑨ 嘘、口を虚にして氣を出すをいふ、嘆息の聲。
⑩ 與麼、恁麼に同じ、斯の如くの意にて、支那の俗語。
⑪ 火風、地水火風の四大にして、吾等の身體は勿論萬有は此の四大に依つて成立す。
⑫ 羸瘵、病氣にて身體の衰弱せること。
⑬ 山坡、堤なり、猶ほ山河を隔つと云ふがごとし。
⑭ 卜度、「うらなひはかる」といふ、凡夫の情識を以て是非善惡等を分別思慮するをいふ。
⑮ 七師、會元第九に曰く、「京兆府米和尚、亦米七師と曰ふ、俗會第七なるを謂ふ、又米胡と曰ふ、美髯なるが故なり」と。洞山靈祐の嗣、京兆は今の安西府。
⑯ 佛眞法身、この四句は金光明經四天王品の中にあり、四天王が佛を讚する偈なり、この問答は一本に曹山本寂と德向座との問答となせり。
⑰ 八成、猶ほ十分に對して八分といふがごとし。
⑱ 嫡子、嫡嗣といふに同じ、世嗣ざること、佛祖の大道を單傳相續する人をいふ。
⑲ 不敢、俗に「いえ、どう致しまして」といふ程の意にて、自己の能ふことを謙遜して能はずといふが如き時に用ふ。
⑳ 遷化、化を他界に遷す義にして、僧侶の死をいふ。
㉑ 亡僧、死亡せる僧のこと、遷化は名刺に住せる尊宿の死を

か是れ學人の顛倒。師曰く、「若し顛倒せずんば甚麼に因つてか卻つて、奴ぞ認めて郎と作す。」云く、「如何なるか是れ本來の面目。」師曰く、「鳥道を行かす。」

師、僧に問ふ、「什麼の處にか去り來る。」僧云く、「鞋を製し來る。」師曰く、「自ら解するか他に依るか。」云く、「他に依る。」師曰く、「他還つて汝を指教するや也た無や。」僧云く、「允さば即ち違せず。」

師、幽上座の來るを見て、遽に起つて禪牀の後に向つて立つ。幽云く、「和尚甚麼としてか學人を回避す。」師曰く、「將に謂へり、闍黎老僧を見すと。」

僧、茱萸に問ふ、「如何なるか是れ沙門の行。」萸云く、「行するとは則ち無きにはあらず、

いふに對し、これは一般雲水僧に用ふるなり。
① 火後の一草茹。火葬をしたる所に生じたる一本の茹といふことにて、法身の生滅去來に離せざる妙用をいひ、又は新陳代謝して而も新たなるなもいふ。
② 鳥道。鳥の過ぎた跡には何等のあとかたもなき故、後蹤跡の意なり。
③ 玄路。玄々微妙の路にして、有無迷悟等一切の見を空じて、空寂の處を往來するをいふ。
④ 展手。手を垂るるの意にして、百尺竿頭より一步を下つて爲人度生すること。
⑤ 學人。佛道を參學修行するものをいふ。
⑥ 足下無私去。一本に私を糸に作る、これは是なり、蓋し足に糸が着いては自由に歩まれぬ、

その糸無ければ束縛なくして行履自由なり、その意を足下無糸とはいふなり、即ち一切煩惱の繫縛を脱して去來自由なるをいふなり。
⑦ 本來の面目。天然のまゝにて少しも人爲を加へざる姿の意にて、人に自己本來具有の心性をいふ。本分の田地、本地の風光、本分の事等と云ふに同じ。
⑧ 奴を認めて郎と作す。「驢を認めて馬と作す」といはんが如し、郎は郎君、奴は奴僕の義、從僕を認めて主人と作すといふことにて、識神を認めて佛性となし、煩惱を認めて菩提となすをいふ。
⑨ 鞋。「ざうり」、「わらぢ」等の履物をいふ、但し支那と日本とは同じからざるが如し。禪苑清規に「鞋は須らく白色なるべし、紫色を得され」と

① 覺あれば即ち乖く。別に僧ありて師に舉示す、師曰く、「他何ぞ道はざる、未審し是れ甚麼の行ぞ。」僧遂に此の語を進む、萸云く、「佛行佛行。」僧、回つて師に舉示す。師曰く、「幽州猶ほ可なるに似たり、最も苦しきは是れ新羅。」(東禪齊、拈じて云く、「此れ還つて疑訛有りや也た無や。若し有らば、且く道へ甚麼の處にか得ざる、若し無くんば他又道ふ、最も苦しきは是れ新羅と。還つて點檢し出さんや。他道ふ、行は則ち無きにはあらず、覺あれば即ち乖くと。卻つて再び問はしむ、是れ甚麼の行ぞ。又道ふ、佛行と。那の僧は是れ會し了つて問ふか、會し了らずして問ふか、請ふ斷じ看よ。)

僧、卻つて問ふ、「如何なるか是れ沙門の行。」師曰く、「頭長三尺、頸短二寸。」乃ち侍者をして此の語を持して、三聖の然和尚に問はしむ。聖、侍者の手上に於て、招一招す。者、回つて師に舉似す、師之を肯ふ。

師、僧に問ふ、「甚の處よりか來る。」云く、「三祖の塔頭より來る。」師曰く、「既に祖師の處より來る。又老僧を見んと要して甚麼にか作ん。」云く、「祖師は即ち別、學人と和尚と不別。」師曰く、「老僧、闍黎が本來の師

あり。
⑦ 茱萸。鄂州茱萸山和尚は、池州南泉山普願禪師の法嗣。
⑧ 覺。「さとり」と訓み、覺醒、覺悟の意なり。
⑨ 進語。躊躇せずして發言すること。
⑩ 幽州。支那の地名。
⑪ 新羅。古代朝鮮の一部。
⑫ 疑訛。訛は「あやまり」と訓む。
⑬ 點檢。檢査、吟味すること、他人の道力、知見を檢校すること。
⑭ 斷。判斷すること。
⑮ 三聖の然和尚。三聖院の慧然禪師、臨濟義玄の嗣。
⑯ 招は「ひれる」又は「つむむ」と訓す。爪にてひれる也。
⑰ 三祖。僧肇禪師にして、支那の初祖達磨より三代目に當る故に三祖といふ。
⑱ 塔頭。寺中、寺内と云ふに同

を見んと欲す、還つて得るや否や。云く、「亦須らく和尚の自ら出頭し來るを待つて始めて得ん。師曰く、「老僧、適來暫時在らず。問ふ、「如何なるか是れ。空劫已前の自己。師曰く、「白馬蘆花に入る。官人問ふ、「人有り修行せんや否や。師曰く、「公の男子を作らんことを待つて即ち修行せん。」僧問ふ、「承る、古に言へること有り、相逢ふて撃げ出さず、意を擧げて便ち有ることを知ると、時如何。師乃ち合掌、頂戴。」

師、僧に問ふ、「世間何物か最も苦なる。僧云く、「地獄最も苦なり。」師曰く、「然らず。云く、「師の意如何。師曰く、「此の衣線下に在つて大事を明めざる、是れを最も苦と名づく。」

師、僧に問ふ、「名は何ぞ。僧曰く、「某甲。師曰く、「阿那箇か是れ閑黎が主人公。僧云く、「見、祇對する。次師曰く、「苦なる哉、苦なる哉、今時の人、例して皆此の如し。只だ是れ驢前馬後底を認得して將て自己となす。佛法平沈、此れ是れなり。賓中の主、尙ほ未だ分たず、如何ぞ主中の主を辨得せん。僧便ち問ふ、「如何なるか是れ主中の主。師曰く、「閑黎自ら道取せよ。云く、「某甲道得せば即ち是れ賓中の主。」(雲居代つて云く、

じく、一山内にある小院をいふ、又祖師の塔のある所をいふ、三祖の塔は潯山縣西北二十里に在りといふ。

②祖師。祖は初なり、始なり、一宗一派の開山又は一宗一派の系統に列し、世代に數へらるゝ人を云ふ、今は後者の意なり。

③適來。「さきほど」といふ意。

④空劫。以前の自己、空劫とは成、住、壞、空の四劫の一、空劫以前の自己とは世界の未だ成立せざる前の自己なり。

⑤白馬蘆花に入る。白いものと白いもので見分けが付かぬこと。

⑥時如何。時は「是」の意なり。

⑦地獄。六趣の一、八寒八熱等の苦處なり、地下にあれば地獄といふ。

⑧衣線下。袈裟下といふに同じ、袈裟を着けた沙門の身に

「某甲道取せば、是れ賓中の主にあらず。」

「如何なるか是れ主中の主。師曰く、「恁麼に道ふことは即ち易く、相續することは大いに難し。師遂に頰を示して曰く、「嗟き見る今時の學道流、千千萬萬門頭を認む。恰も似たり。京に入り、聖主に朝せんとして、祇潼關に到つて便即ち休するに。」

師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ青山は白雲の父。師曰く、「森森ならざる者は。云く、「如何なるか是れ白雲は青山の兒。師曰く、「東西を辨せざる者は。云く、「如何なるか是れ白雲終日倚る。師曰く、「去離することを得ず。云く、「如何なるか是れ青山總に知らず。師曰く、「顧視せざる者は。」

乃ち頰に曰く、「青山は白雲の父。白雲は青山の兒。白雲終日倚る。青山總に知らず。問ふ、「清河の彼岸、是れ甚麼の草ぞ。師曰く、「是れ不萌の草。」問ふ、「如何なるか是れ西來意。師曰く、「大いに駭鷄犀に似たり。問ふ、「蛇、蝦蟇を呑む、救ふが則ち是か、救はざるが則ち是か。師曰く、「救ふ時は則ち雙目暗す、救はざる時は則ち形影彰れず。」

僧あり、大慈を辭す。慈曰く、「什麼の處にか去る。僧云く、「暫く江

いふ意。

⑨祇對。應對、答話のこと。

⑩次。一本に「者」に作る。

⑪驢前馬後。隨處に主となること能はず、常に人の後に從つて居ること、今は妄想分別を指す。

⑫頰。梵語、偈陀の譯、支那に於て聖王明主の盛得を頰揚する韻文を頰といふ。印度の偈陀は韻語にして、經論文にあるものなれば、偈陀を譯して頰とし、或は梵漢兼舉して偈頰ともいふ。

⑬京。「みやこ」王城の地をいふ。

⑭朝。朝に種々の義あれど今は君に謁するをいふ。

⑮潼關。陝西省同州府華陰縣の東山西、河南兩省の境に位し、渭水の黄河に朝する附近にある重險。

西に去る。慈曰く、「我れ汝を勞す。一段の事あり、得てんや否や。」僧云く、「和尚、什麼の事か有る。」慈曰く、「老僧を將ち取り去れ。」僧云く、「更に和尚に過ぎたるものあり、亦將ち得去ること能はず。」慈便ち休す。其の僧、後師に舉似す。師曰く、「閣黎爭か恁麼に道ふ合き。」僧云く、「和尚作廢生。」師曰く、「得。」法眼別して云く、「和尚若し去らば某甲、笠子を提げん。師、又其の僧に問ふ、「大慈、別に什麼の言句か有る。」僧云く、「有る時、衆に示して云く、「一丈を説得するは一尺を行取するに如かず、一尺を説得するは一尺を行取するに如かず。」師曰く、「我れは恁麼に道はず。」僧云く、「作廢生。」師曰く、「行不得底を説取し、説不得底を行取す。」(雲居云く、「行の時は説路なく、説の時は行路無し、不説不行の時什麼の路を于行すべき。」樂普云く、「行説俱に到らず、即ち本事在り。）」

舉す、藥山、僧に問ふ、「甚の處より來る。」僧云く、「湖南より來る。」山曰く、「洞庭湖、水滿つるや也た未だしや。」云く、「未だし。」山曰く、「許多時の雨水、甚麼としてか滿たざる。」僧無語。師代つて曰く、「甚麼の劫中にか會て増減し來る。」道吾代つて云く、「滿てり。」雲嚴云く、「湛湛地。」

二〇

① 森森。木の高く聳ゆる貌。
 ② 駭難。難の見て驚き却く卑といふこと、一覽に案山子の如きものなりと。
 ③ 大慈。杭州大慈山寰中禪師、百丈懷海の嗣。
 ④ 江西。江は揚子江。
 ⑤ 一段の事。「一つの事柄」といふ程の意なり、一事件一問題といふほどの意。こゝては悟道をさす。
 ⑥ 法眼。清涼寺文登禪師、羅漢桂琛の法嗣。
 ⑦ 笠子。子に助字、笠に同じ。
 ⑧ 樂普。洛浦に同じ、洛浦元安禪師、夾山善會の嗣。
 ⑨ 湖南。洞庭湖の南一帯の地をいふ。
 ⑩ 洞庭湖。支那湖南省に在り、支那第一の太湖にして、風景殊に絶佳なり。
 ⑪ 劫。梵語大時と譯す、通常の年月日時を以て算し能ざる遠

師舉し、衆に示して曰く、「藥山と雲嚴先師と遊山す。腰間の刀響く。嚴問ふ、「甚麼物か聲を作す。」山、刀を抜き、幕口に研る勢を作す。」師曰く、「看よ、他の藥山、身を横へて這箇の事を爲す、今時の人、向上の事を明めんと欲せば、須らく此の意を體して始めて得べし。」

舉す、五洩の默禪師、石頭の處に到つて云く、「一言に相契はゞ即ち住せん、契はずんば即ち去らん」と。頭據坐す。洩便ち行く、頭、後に隨つて召して曰く、「閣黎、閣黎。」洩、首を回す。頭曰く、「生より死に到るまで祇是れ這箇、首を回し腦を轉じて作麼かせん。」洩、忽然として、契悟し、乃ち拄杖を、拗折して棲止す。師曰く、「當時是れ五洩先師にあらずんば大いに承當し難し、然も是の如くなりとも雖も、猶ほ途に涉ることあり。」

舉す、無着和尚因に日晩る、遂に文殊に問うて云く、「一宿を投せんと擬す、得てんや否や。」殊云く、「偏に執心の在る有り、此に宿することを得ず。」著云く、「某甲執心無し。」殊云く、「偏に受戒するや否や。」著云く、「受戒すること久し。」殊云く、「偏若し執心なくんば何ぞ受戒することを用ひん。」著遂に辭し退く。均提童子、著を送つて出づ。著云く、「適來和尚道ふ、

大の時節をあらはす稱なり、但し今は「時節」といふ程に見て可なり。
 ① 驚口。驚地或は驚面と殆んど同意。
 ② 向上の事。向上の一大事の畧にして、佛師所説の一大事、宇宙の眞理を指していふ。蓋し向上とは向下の對、絶對平等の境をいひ、又最上の意にも用ふ。
 ③ 五洩の默。婺州五洩山雲默禪師、馬祖道一の嗣。
 ④ 石頭。希遷禪師、青原行思の嗣。
 ⑤ 忽然。「たちまち」の意。
 ⑥ 契悟。契は「かなふ」、悟は「さと」とり、と訓す。自己胸中の分別妄想を脱却して、宇宙の眞理を悟るをいふ、開悟と同意。
 ⑦ 拗折。「れちなる」こと。
 ⑧ 承當。自ら會得領悟するをいふ。

前三三後三三とはれ多少ぞ。童子召して云く、「大徳。」著、首を回す。童子云く、「是れ多少ぞ。師曰く、「其の父を觀んと欲せば、先づ其の子を觀よ。」

擧す、文殊大士、無著と茶を喫する次、乃ち玻璃盞を拈起して、無著に問うて曰く、「南方に還つて這箇なりや否や。」著云く、「無。」文殊曰く、「尋常甚麼を將つてか茶を喫す。」著、無對。師代つて手を展べて曰く、「有無は且く置く、這箇を借取し、看得てんや否や。」

石霜因に僧問ふ、「咫尺の間甚と爲てか師顔を觀ざる。」霜曰く、「我れは道ふ、偏界曾て藏さすと。」僧、後雪峯に問ふ、「偏界曾て藏さざる意旨如何。」峯云く、「什麼の處か是れ石霜にあらざる。」僧、回つて霜に舉似す。霜曰く、「這の老漢、什麼の死急かある。」師聞いて曰く、「土地を笑殺す。」

西園一日自ら開浴する次、僧問ふ、「何ぞ沙彌を使はざる。」園乃ち掌を撫すること三下す。師曰く、「一種に是れ時節因縁、中に就いて西園精妙なり。」

擧す、盤山寶積禪師上堂、「夫れ心月孤圓にして、光、萬象を吞む、光、

①無著。姓は董氏、永嘉の人、年十二、州の龍泉寺の律師に從つて出家す、後に牛頭山忠禪師に參す、大曆三年夏五臺山に詣りていふ。

②執心。執着心のこと、或る一物を心に確く執持して離さざるをいふ。

③受戒。師より弟子が戒法を受くるを云ふ、戒に五戒、十戒、四十八戒、二百五十戒、五百戒等の種類あり。

④大徳。門下のものより長上の者を呼ぶ尊號、即ち徳高き僧の意。

⑤玻璃盞。「ガラス」製の碗杯なり。

⑥拈起。拈は「つまむ」と訓す、拈起は拈出と略ん同意。

⑦咫尺。咫は八寸、尺は十寸、即ち距離の極めて近きを云ふ。

⑧偏界不曾藏。宇宙の常相即實

境を照すにあらず、境も亦存するにあらず、光境俱に亡す、復た是れ何物ぞ。師曰く、「光境未だ亡せず、復た是れ何物ぞ。」

師、衆に示して曰く、「唯だ佛菩提あり、是れ眞に歸仗の處」と。復た喝一喝して曰く、「猶ほ者箇、去就の在るあり。」

擧す、鄧隱峯、石頭に在り、頭、草を刻る次、峯、頭の左の側に在つて叉手して立つ、頭、剃子を飛ばし、峯の前に向つて一抹の草を刻る、峯云く、「和尚、祇這個を刻得して那箇を刻得せず。」頭、剃子を提起す、峯接得して便ち草を刻る勢を作す。頭曰く、「汝祇那箇を刻得して這箇を刻得することを解せず。」峯、無對。師代つて曰く、「還つて堆阜ありや。」

擧す、南泉僧に問ふ、「不思議、不思議、總に生ぜざる時、我れに本來の面目を還し來れ。」僧云く、「容止の露る可きなし。」師曰く、「還つて曾て人に將ち示さんや。」陸亘大夫南泉に問うて云く、「弟子家中に一片の石あり、或時は坐し或時は臥す、如今鐫つて佛と作さんと擬す、還つて得んや否や。」泉曰く、「得てん。」陸曰く、「得ざることを莫しや否や。」泉曰く、「得ず。」師曰く、「坐せざる時は即ち佛、坐する時は即ち佛にあらず。」南泉、

相なるをいふ、山の突兀、海の漫々、皆法身佛の露現なるをいふ。

⑨死急。火急と云ふに同じ、極めて急用の意なり。

⑩開浴。浴室を開いて入浴するをいふ。

⑪沙彌。始めて落髮して佛道に入る男子のこと。

⑫盤山寶積禪師。馬祖道一に嗣法す。

⑬佛菩提。菩提は梵語、智、道、覺等と譯す。

⑭歸仗。仗は「よる」と訓す。

⑮者箇。者は此の義、這箇と同じく「この」又は「これらの」意なり。

⑯鄧隱峯。五臺山の鄧隱峰禪師、姓は鄧氏、時に鄧隱峰と稱す、馬祖道一の嗣。

⑰叉手。もと支那の俗禮にして合家(印度の禮)に次ぐとも、又は印度の禮なりともいふ、

① 神山に問ふ、「什麼をか作す。」對へて云く、「
羅を打す。」泉曰く、「手打か脚打か。」神山云く、「
請ふ和尚道へ。」泉曰く、「分明に記取して、作
家に舉似せよ。」師、別して曰く、「脚手なき者始
めて羅を打すことを解す。」

僧、僧の ① 章敬に問ふ、 ② 心法雙べ亡す、指
歸何れの所ぞ。敬曰く、 ③ 野人汚無し、徒らに運
斤に勞す。云く、師に不返の言を請ふ。敬曰く、
即ち返句なしの語を舉して師に問ふ、師曰く、
「道ふことは即ち甚だ道ふ、作家に遇ふこと罕
なり。」

師、衆に示して曰く、「五洩先師一日 沐浴して
香を焚き、 ④ 端坐して衆に告げて曰く、「法身
圓寂なり、去來有ることを示す、 ⑤ 千聖源を
同じうす、 ⑥ 萬靈一に歸す、吾れ今瀉散す、胡ぞ

を受くるものこと。
① 神山。神山の僧密禪師、靈巖
曇巖に嗣法す、洞山良弁、常
に密師伯と稱して尊敬せり。
② 羅。銅鑼なり、樂器の名。
③ 作家。唐代に於て詩文に巧な
る人を作家といふ。轉じて禪
林、伶俐の人を呼ぶに用ふる
なり。

④ 章敬。京兆府章敬寺の懷禪
師、馬祖道一の法嗣。
⑤ 心法。心は能縁の主觀をい
ひ、法は所縁の客觀をいふ
なり。

⑥ 野人。莊子の故事、野人鼻端
に塵(しらつち)の蠅の羽ほど
つきて汚れてあるを、匠石が
斤(の)を揮ひ風をなして翫
り取りたりといふ、今はその
反對にて菩提の自性、本來清
淨、迷悟の論に涉るべきにあ
らざることといふ。
⑦ 沐浴。沐は髪を洗ふこと、浴

手を相續ふるもにて、其の錯
ふるに左手の親指を中に入れ
て拳を作り、高き胸の邊に置
き、右手の五指を以て覆ふを
いふ。但し現時の又手法は左
手の拇指を屈し、他の四指を
以て覆ひ、更に右手を以て之
を覆ひ胸に當つるなり。
⑧ 剗子。子は助字、剗子は鎌な
り。
⑨ 堆阜。小高き土山。唐書に「地
和せず堆阜出づ。」
⑩ 容止。動止に同じ、「ふるま
ひ」の意。孝經に「容止見る
べし。」
⑪ 陸亘大夫。字は景山、吳郡の
人、御史大夫たり、南泉普願に
參じて大いに得るところあ
り、居士中逸群の士なり。
⑫ 弟子。門人、門弟、徒弟に同
じ、學は師の後にあるが故に
弟といひ、解は師に依りて生
ずるが故に子といふ、即ち教

興衰を假らんや、自ら神を勞すること無れ、須
らく ① 正念を存すべし。若し此の命に遵はざ、
眞に吾が恩を報ず、儼し ② 固にして言に違せば
吾が子にあらず。時に僧あり問ふ、「和尚甚麼の
處に向つてか去る。」洩曰く、「去るに處なし。」云
く、「某甲何ぞ見ざる。」洩曰く、「眼の觀る所にあ
らず。」師曰く、「作家」と。」

人有り、舉して一僧に問うて云く、「 ③ 鹽官の
會下に一りの ④ 主事の僧あり、忽ち一鬼使の來
り追ふを見る、僧告げて曰く「某甲身、主事とな
り、未だ ⑤ 修行に暇あらず、乞ふ七日を容し得
てんや否や。」使曰く、「待て、 ⑥ 王に白すること
を爲さん、若し許さば即ち七日後に來らん、然
らすんば ⑦ 須臾に便ち至らん」と言ひ訖つて見
えず。七日後に至つて復た來つて其の僧を覓む

は身を洗ふこと。
① 端坐。端は正の義、坐は坐禪
の略、威儀を整へ作法に依つ
て正しく坐すること。
② 法身。三身の一、此れに三義
ありと雖も今は眞如、法性、
佛性等の語と同意にて、吾人
凡夫に具有する理性をいふ。
③ 千聖。聖とは佛祖のこと、に
て、千聖とは三世歴代の佛祖
をいふ。
④ 萬靈。詳しくは三界萬靈とい
ひ、欲、色、無色の三界の一
切精靈をいふ。
⑤ 正念。八正道の一、よく戒定
慧の三學を思念し、之を任持
して散亂顛倒せしめざるをい
ふ。
⑥ 固。頑固のこと。論語に「固
なく必なく云々。」賤の意を兼
ぬ。
⑦ 鹽官。鹽官齊安禪師のこと。
⑧ 主事。知事といふも同じ、釋

氏要覽には「主事四員あり、
一に監寺、二に維那云々」と
あり。
⑨ 修行。一般に佛祖の法を守り
て善行を修むることをいひ、
又久修練行といひて持戒苦行
のことをいふ。
⑩ 王。閻摩羅王のこと。
⑪ 須臾。「しばらく」、「少しの
間」のこと。中庸に云く、「道
は須臾も離るべからず云々」
とあり。
⑫ 覓者。著は意味を強むるの語
なり、覓者は「もとむる」の
意。
⑬ 抵擗。挨拶、とりさばきのこ
と。
⑭ 江陵。支那湖北省揚子江の畔、
荊州の府なり。
⑮ 大川。又は大湖と稱す、石頭
希遷に嗣法す。
⑯ 坐具。梵語に尼師壇、坐具と
譯し、又隨坐衣と義譯す、僧

るに了に得べからず。若し^⑤ 覓著せられん時、如何が他を^⑥ 抵擬せん。師代つて曰く、「他に覓得せらる。」

江陵の僧 大川に參ず、川問ふ、「幾時か江陵を發足するや。」僧^⑦ 坐具を提起す。川曰く、「子が遠來を謝す、下り去れ。」僧禪牀を繞ること一巾して便ち出づ。川曰く、「若し不慙麼ならば争か眼目の^⑧ 端的を知らん。」僧^⑨ 掌を拊つて曰く、「人を苦殺す、幾ど錯つて諸方の^⑩ 老宿を判す。」川曰く、「甚だ^⑪ 禪宗の道理を得たり。」僧、丹霞に舉似す。霞曰く、「大川の法道に於ては即ち得たり、我が這裏は然らず。」云く、「未審し此間作麼生。」霞曰く、「猶は大川の三步に較ることあり。」僧禮拜す。霞曰く、「錯つて諸方を判する者多し。」師曰く、「是れ丹霞にあらずんば、玉石を分ち難し。」

雲居到り參ず、師問ふ、「甚麼の處よりか來る。」居曰く、「翠微より來る。」師曰く、「翠微何の言句あつてか。徒に示す。」居云く、「翠微^⑫ 羅漢を供養す、某甲問ふ、羅漢を供養す、羅漢還つて來るや否や。微曰く、爾毎日箇の甚麼をか啗ふと。」師曰く、「實に此の語ありや否や。」云く、「有り。」師曰く、「虚りに作家に參見し來らず。」

師、雲居に問ふ、「汝名は甚麼ぞ。」云く、「道膺。」師曰く、「向上更に道へ。」云く、「向上は即ち道膺と名づけず。」師曰く、「老僧が雲嚴にありし時の祇對と異なることなし。」

雲居問ふ、「如何なるか是れ祖師意。」師曰く、「閩黎他後^⑬ 把茅頭を蓋ふことあらんに、忽ち人あつて問はゞ、如何が祇對せん。」居云く、「道膺が罪過。」

師、雲居に謂つて曰く、「吾れ聞^⑭ 思大和尚^⑮ 倭國に生れ王と作ると、是なりや否や。」居云く、「若し是れ思大ならば佛とも亦作らず。」師之を然りとす。

師、雲居に問ふ、「甚麼の處にか去來す。」居云く、「山を踏み來る。」師曰く、「那箇の山か住するに堪へたる。」居云く、「那箇の山か住するに堪へざらん。」師曰く、「慙麼ならば則ち國內總に閩黎に占卻せらる。」居云く、「然らず。」師曰く、「慙麼ならば則ち子、箇の入路を得ず。」居云く、「路なし。」師曰く、「若し路なくんば争か老僧と^⑯ 相見することを得ん。」居云く、「若し路あらば即ち和尚と山を隔て去らん。」師、乃ち曰く、「此の子已後千人萬人^⑰」

偈六物の一にして坐下に敷くものなり。

⑤ 端的。端は正、的は明白の義、故に正確分明の意なり。⑥ 老宿。老年宿徳の略にて、長上の人を尊崇する語。

⑦ 禪宗。坐禪を専らにするより世人他の宗派と簡別して用ひし名稱なり。禪宗の名は何れの時代より初まりしか明かならざれど、始めは宗派の觀念を以てしたるにあらざるは諸種の祖典によつて明かなり、佛法の總府登に斯の如きの名當るべけんや。

⑧ 丹霞。子淳禪師、劍州の人、芙蓉道楷禪師の嗣。

⑨ 翠微。京兆終南山の無學禪師、丹霞天然に嗣法す。

⑩ 徒。徒衆なり、會下雲衲のこと。

⑪ 羅漢。阿羅漢の時、梵語、無學、不生、無生、殺賊又は應

供と譯す、聲聞四果の極位、再び生死の境界に生れざるが故に無生或は不生といひ、煩惱の賊を盡滅するが故に殺賊といひ、此處に至れば更に學ぶべき法なきが故に無學といひ、此處に至れば無量の功德を具して他の供養に應ずるの資格あるが故に應供といふ。

⑫ 把茅蓋頭。一把の茅で頭を蓋ふだけの小き草庵を結んで住するといふこと。

⑬ 思大和尚。南嶽の慧思、姓は李氏、元魏南豫州武津の人、偏く禪徳に親しみ、摩訶衍を學ぶ、常は林野に居して經行修禪す。

⑭ 倭國。支那にて日本を呼ぶ稱。聖德皇太子は南嶽の化身といふ。

⑮ 相見。對面すること、拜顔、拜眉などいふも同じ、但し祖門下の相見は只だ眉目相見のみならず、師資能所を絶し

把不住にして去ることあらん。」

雲居、師に随つて水を渡る次、師問ふ、「水深きこと多少ぞ。」居云く、「不濕。」師曰く、「麤人。」居云く、「請ふ、師、道へ。」師曰く、「乾かす。」

師、雲居に謂つて曰く、「昔、南泉、彌勒下生經を講する僧に問うて曰く、『彌勒什麼の時か下生す。』云く、『見に天宮にあり、當來下生す。』南泉曰く、『天上に彌勒なく、地下に彌勒なし』と。時に居遂に師に問うて曰く、『只だ天上に彌勒なく、地下に彌勒なきが如きんば、未審し誰が與に字を安す。』師、直に得たり。禪牀を震動することを。乃ち曰く、『膺闍黎、吾れ雲巖にあつて曾て老人に問ふ、直に得たり、火爐震動することを。今日、子に一間せられて、直に得たり通身汗流るることを。』

雲居、庵を三峯に結び、日を経て堂に赴かず、師問ふ、「子、近日何ぞ齋に赴かざる。」居云く、「毎日自ら天神の供を送る有り。」師曰く、「我れ將に謂へり、汝は是れ箇の人なりと、猶ほ這箇の見解を作すことあり、汝晩間に來れ。」居、晩に至る、師、「膺庵主」と召す。居、應諾す。師曰く、「不思議不思議、是れ甚麼ぞ。」居庵に回り寂然として宴坐す。

て一體なるを眞の相見とはいふなり。

把不住。把住し得ざることを、把住とは取つて動かざるの義なり。

彌勒下生經。具には彌勒下生成佛經といひ、彌勒が下生成佛することを説きたるものなり。

彌勒。又梅樹麗耶ともいひ、慈氏と譯す。性は阿逸多といひ、無能勝と譯す。南天竺の婆羅門にして兜率天に上生し、未來五十六億七千萬歳の後、此土に出現し、釋尊に代つて衆生を濟度するを云ふ。これを彌勒下生といふ、故に彌勒を當來下生彌勒尊佛と云ふ。

火爐。火を焚く爐なり、山國の農家に在る圍爐裏にて、圍んで暖を取る所なり。

庵。聚落を離れて野外に荷且

天神此より竟に尋ぬれども見えず。此の如く三日にして乃ち絶ゆ。

雲居、醬を合する次、師、問ふ、「什麼を作す。」居曰く、「醬を合す。」師曰く、「多少の鹽をか用ふ。」云く、「旋入る。」師曰く、「何の滋味をか作す。」居云く、「得たり。」

師、雲居に問ふ、「大闍提の人は父を殺し、母を害し、佛身血を出し、和合僧を破る。是の如く種々の孝養何にかある。」居云く、「始めて孝養を得たり。」

雲居、作務の次、悞つて蚯蚓を剗殺す、師曰く、「這箇聲。」居云く、「他死せず。」師曰く、「二祖、鄴都に往く、又作麼生。」居無對。

師、扇上に佛の字を書す。雲居見て卻つて不の字を書す、師又改めて非の字と作す、雪峯見

に作りたる屋舎をいふ。

堂。僧堂を指す。

齋。潔齋と熟字して、身口意の三業をつしむことなれども、轉じて佛事の時の供養の食事といふに至れり、但し普通は齋といひて午時の飯食をいふ。

天神。地紙に對し、天に屬する神をいふ。

箇の人。佛祖の大道を會得したる人をいふ。

見解。知見解會の略、見聞覺知に依りて解了したる知識といふ程の意なり。

庵主。一庵の主をいふ、現今地方に依りて比丘尼の異稱として用ひらるることあれども、庵主は必ずしも尼に限るに非ず。

寂然。さびしき貌。

宴坐。宴は安なり、燕なり、「やすむ」と訓す。

醬。醬は「みそ」と訓す、味噌に同じ、醬を合すとは醬を製するをいふ。

旋。旋は「や」と訓す、稍と同義。

大闍提。梵語、斷善根、又は信不具と義譯す、本來解脱の因を缺きて到底成佛する能はざるものをいふ。

作務。作業勞役を云ふ。

這箇聲。支那宋代の俗語にして、是れはどうしたることかといふ程の意。

鄴都。二祖慧可、法を僧璨に付し、正勅寺に往いて説法す、辯和法師、邑宰翟仲況に誘り師に加ふるに非法を以てす、是れより先き塚に謂つて曰く、吾れ宿累あり、今當に之を償ふべしと、往いて鄴縣に到り、怡然として委順す。

器。「うつは」と訓す、佛道を傳ふるに足る人材として斯ん

て乃ち一時に除卻す。

曹山來つて師に謁す。師問うて曰く、「閣黎、名は何ぞ。」對へて曰く、「本寂。」師曰く、「向上更に道へ。」曹云く、「道はず。」師曰く、「什麼と爲てか道はざる。」曹云く、「本寂と名づけず。」師深く之を器とす。

曹山 行脚の時、烏石の靈觀禪師に問ふ、「如何なるか是れ毗盧の師、法身の主。」石曰く、「我れ若し爾に向つて道はゞ即ち別にあるなり。」曹、師に舉示す。師曰く、「好箇の語頭、祇進語を缺く、何ぞ甚麼と爲てか道はざると問はざる。」曹卻り來つて前語を進む。石曰く、「若し我れ不道と言はゞ即ち我が口を瘞卻す、若し我れ道と言はゞ即ち我れ舌を寒卻す。」曹歸つて師に舉示す。師深く之を肯ふ。

曹山親しく師の室に入つて密に所解を印せらる、盤桓すること數載、乃ち師を辭す、師問ふ、「什麼の處にか去る。」云く、「不變異の處に去る。」師曰く、「不變異の處に去ることあらんや。」曹云く、「去るも亦不變異。」師又曰く、「子歸らば飛禽嶺を過ぐるを打することなしや。」曹曰く、「是。」師曰く、「來時飛禽嶺より來ることを打することなしや。」曹云く、

三〇

① 行脚。本師の膝下を離れ、善友良師を尋ねて諸方を遊行し、山川を跋渉するをいふ。
② 烏石の靈觀禪師。福州烏石山靈觀禪師、黃藥希運に嗣法す。
③ 警却。どもりにすること。
④ 密。密は秘密の密に非ず、親密の密なり。
⑤ 印。印可の時、印は信なり、可は許可なり、印可とは信認して證明を與ふるの意なり。
⑥ 盤桓。躊躇低徊すること。
⑦ 飛禽嶺。山の名、支那新城縣の東七十里に在り。
⑧ 打。成、爲の義なり。
⑨ 寶鏡三昧。寶は尊重の義、鏡は明鑑の義、人に具足の不味なる妙心は不生不滅、不垢不淨にして、萬物を照鑑し、毫もたがはざること明鏡の如し、但しこれ吾人凡夫常に然するをいふ。

⑩ 寶鏡三昧。寶は尊重の義、鏡は明鑑の義、人に具足の不味なる妙心は不生不滅、不垢不淨にして、萬物を照鑑し、毫もたがはざること明鏡の如し、但しこれ吾人凡夫常に然するをいふ。

「是。」師曰く、「一人あり、飛禽嶺より過ぐることを打せずして、便ち此間に到る、子還つて知るや。」曹云く、「渠彼に往くなし。」師曰く、「子甚の道理を見て便ち渠彼に往くなしと道ふ。」曹云く、「若し這の田地に到らずんば争か恁麼に道ふことを解せん。」師遂に囑して曰く、「吾れ雲巖先師の處にあつて、親しく寶鏡三昧を印せらる。事、窮めて的要なり、今汝に付す。」其の詞は尾に出す。師又曰く、「末法の時代、人多くは乾慧なり、若し眞偽を辨驗せんと要せば三種の滲漏あり、一に曰く、見滲漏。機、位を離れずんば毒海に墮在す。二に曰く、情滲漏。向背に滞在すれば見處偏枯なり。三に曰く、語滲漏。妙を究むれば宗を失し、機、終始を味ます。濁智流轉は此の三種を出でず、子宜しく之を知るべし。」

道全(第二世の住、亦中洞山と云ふ)、師に問ふ、「如何なるか是れ出離の要。」師曰く、「閣黎足下、煙生す。」全、當下に契悟し、更に他に遊ばず。雲居、進語して云く、「終に敢て和尚の足下煙生するに孤負せず。」師曰く、「歩々玄なる者は即ち是れ功到。」

① 飛禽嶺。山の名、支那新城縣の東七十里に在り。
② 打。成、爲の義なり。
③ 寶鏡三昧。寶は尊重の義、鏡は明鑑の義、人に具足の不味なる妙心は不生不滅、不垢不淨にして、萬物を照鑑し、毫もたがはざること明鏡の如し、但しこれ吾人凡夫常に然するをいふ。
④ 末法。佛滅後一千年を正法といひ、更に其の後千年を像法といひ、其の後一萬年を末法といふ、末法の世には正師少く、佛法は漸次に衰滅するが故に此の名あり。
⑤ 乾慧。理に偏したる智慧。
⑥ 滲漏。不覺の中に自ら流注する微細なる煩惱をいふ。
⑦ 見滲漏。己見尙ほ存するの意にて、機、位を守つて佛見法見の未だ全く消滅せざるを云ふ。
⑧ 情滲漏。情識尙ほ存し取捨の念未だ全く滅せざるを云ふ。
⑨ 語滲漏。語句の妙を極むるも語路に滞在して、未だ宗旨に

月餘、一法の示誨を蒙らず、意何にかある。微曰く、「甚麼をか嫌ふ。」僧あり、舉して師に問ふ。師曰く、「闇黎争か老僧を怪み得ん。」龍牙又、徳山に謁し、問うて曰く、「遠く聞く、徳山一句の佛法と。到來するに及んで未だ曾て和尚、一句の佛法を説くことを見ず。」徳山曰く、「什麼をか嫌ふ。」牙、肯はず。乃ら師の法席に造り、前の如く之を問ふ、師曰く、「争か老僧を怪み得ん。」

龍牙、徳山に問ふ、「學人、鎧鉦の劍に仗つて師の頭を取らんと擬する時如何。」山頰を引ぶ、龍牙云く、「頭落ちぬ。」山、微笑す。牙、後に師に參じ、前語を擧す。師曰く、「徳山什麼とか道ひし。」云く、「徳山無語。」師曰く、「道ふこと莫れ、無語と、且く徳山落つる底の頭を將つて老僧に呈似せよ。」牙、過を省して、懺謝し、遂に師の席に止り、衆に隨つて參請す。

龍牙問ふ、「如何なるか是れ祖師意。」師曰く、「洞水の逆流せんを待つて、即ち汝に向つて道はん。」牙、始めて厥の意を悟る。

華嚴問ふ、「學人、未だ理路を見ず、未だ情識を免れず。」師曰く、「汝

還つて理路を見るや也た無や。」云く、「理路なきことを見る。」師曰く、「什麼の處よりか情識を得來る。」云く、「學人、實に問ふ。」師曰く、「慙麼ならば須らく萬里無寸艸の處に向つて立つべし。」云く、「無寸艸の處、還つて立つことを許すや、也た無や。」師曰く、「直に須らく慙麼にし去るべし。」

華嚴柴を搬ぶ次、師、柴を把住して問ふ、「狭路、相逢ふ時作麼生。」云く、「反仄せば何の幸かあらん。」師曰く、「汝、吾が言を記せよ。汝南に向つて住せば一千人あらん、若し北に向つて住せば即ち三二百のみならん。」

九峯見ゆ、師曰く、「掌に神珠あり、白晝に人に示す、人且に劍を按せんとす、況んや玄夜をや、子貴ぶべし」と。峯云く、「但だ珠を識らざる者のみ、之を識らば亦晝夜なからん。」師之を稱して、俊士となす。(師、没して塔の傍に廬す、中和の始めに至つて、乃ち塔を辭して北遊す。)

青林到り參す、師問うて曰く、「近離什麼の處ぞ。」林云く、「武陵。」師曰く、「武陵の法道此間と何似ぞ。」云く、「胡地、冬、筍を抽く。」師曰

合せざるをいふ。
① 道全。洞山の第二世、又は中洞山ともいふ、洞山良价の法嗣。
② 出離。迷界を離るゝの意、出離生死、「出離三界」等の語あり。
③ 當下。直下に同じ、直ちにの意。
④ 龍牙。湖南龍牙山居遁禪師、洞川に嗣法す。
⑤ 徳山。朗州徳山宣鑿禪師、澧州龍潭崇信に嗣法す。
⑥ 鎧鉦劍。干將と共に支那古寶劍の名。
⑦ 呈似。似は示と同じく、指し示すこと。
⑧ 懺謝。懺は梵語、懺摩の略、悔過と譯す、謝は「わびる」と訓じ、罪を詫びる意なり。
⑨ 參請。參問し請益すること、學人が師家に隨事して尋問を發し、師家の提擧を受くるを

いふ。
① 華嚴。京兆華嚴寺の休靜禪師、洞山良价に嗣法す。
② 情識。凡夫迷情の見解をいふ。
③ 反仄。反は「かへる」と訓じ、仄は「かたぶく」と訓す、今反仄とは「かたへに寄る」といふ意味なり。
④ 九峯。筠州九峯普滿禪師、洞山の法嗣。
⑤ 神珠。神は天のかみのことなれど、轉じて靈妙不思議の意に用ひらる、今もその意なり、珠はもと眞珠のことなりしが、轉じて一般に圓き玉をいふ。
⑥ 劍を按す。劍を按かんとして手をかくること。
⑦ 玄夜。猶ほ暗夜、深夜のことし。
⑧ 俊士。智、千人に過ぐるを俊といふ。

く、別飯に^①香飯を炊ぎ、此人を供養せよ。林、拂袖して便ち出づ。師曰く、此の子、向後、天下の人を走殺することあらん。

青林、洞山にあつて松を栽うる次、劉翁なる者あり、偶を求む、偶を作つて曰く、長々三尺餘り、鬱々として青草を覆ふ。知らず何れの代の人ぞ。此の松の老いたるを見ることを得ん。劉、偶を得て師に呈す。師謂つて曰く、此れは是れ、第三代洞山の主人なり」と。

青林、師を辭す。師曰く、子甚麼の處に向つてか去る。林云く、金輪隠れざる的、徧界、紅塵を絶す。師曰く、善く自ら保任せよ。林、珍重して出づ。師門送して、青林に謂つて曰く、恁麼にし去る、一句作麼生か道はん。林曰く、歩々紅塵を踏み、通身影像なし。師良久す。林云く、老和尚何ぞ速かに道はざる。師曰く、子恁麼に性急なることを得たり。林云く、某甲が罪過、便ち禮辭す。

北院、師を辭し嶺に入り去らんと擬す。師曰く、善く爲せよ。飛猿嶺峻なり、好く看よ。院、沈吟良久す。師曰く、通關黎。院應諾す。師曰く、何ぞ嶺に入り去らざる。此に因つて省悟し、更に嶺に入らずして師に師

事す。(時に、鑊頭通と號す。)

師、踈山に問ふ、空劫無人の家、是れ甚麼人の住處ぞ。踈云く、不識。師云く、人還つて意旨ありや也たなしや。云く、和尚何ぞ他に問はざる。師曰く、現に問ふ。次いで、云く、是れ何の意旨ぞ。師對へす。

欽山の還、師に參す、師問ふ、甚麼の處よりか來る。對へて云く、大慈より來る。師曰く、還つて大慈を見るや。欽云く、見る。師曰く、色前に見るか色後に見るか。欽云く、色の前後にあらすして見る。師、黙して置く。欽乃ち曰く、師を離るること太だ早し、師の意を盡さず。

(法眼云く、師の意を盡さずんば、他に承嗣し得易からず。)

巖頭、雪峯、欽山坐する次、師、茶を行き來る。欽乃ち眼を閉づ(或は開眼に作る)。師曰く、甚麼の處にか去來す。欽云く、定に入り來る。師曰く、定、本門なし、何れよりしてか入る。

雪峯、到り參す。師問ふ、甚れの處よりか來る。云く、天台より來る。師曰く、智者を見るや否や。云く、義存鐵棒を喫するに分あり。雪峯、會下にあつて、飯頭となる、米を淘る次、師問ふ、沙を淘つて米

① 飯。「はかりすまひ」のこと、故に尸を青く、それより轉じて一般に粗屋の姓名に用ふ。
② 中和。唐の僖宗皇帝中の年號なり。
③ 青林。洞山師處禪師、洞山の三世なり。良价の法嗣。
④ 近難什麼の處。俗語に「どこから来たか」といふことにて、師家が學人の脚下點檢の語として屢々用ひらる。
⑤ 武陵。今の湖南省常德府武陵縣の西方にありて、有名なる仙境なり。
⑥ 胡地。武陵のこと、南越に屬する故に胡地といふ、土地暖にして冬時猶ほ霜を生ずと。
⑦ 別飯。飯に五穀の炊ぐ器なり、釜と見て差支なし、別は特別なり。
⑧ 香飯。香積園に於ける飯の意より轉じて、佛に供する飯をいひ、更に化して一般僧侶に供する飯をいふ、蓋し清淨にして尊き意歟。
⑨ 偈。梵語伽陀の譯、單獨に句を結びて宣唱する韻文をいふ、大智度論三十三に、一切の偈を紙衣と名づく、六句三句五句、句の多少不定なり云云といへり。
⑩ 金輪。四輪の一、金輪王が現れて何處にも隠れざるの意。
⑪ 紅塵。浮世のちり、煩はしき世の中に喩ふ。
⑫ 保任。保護任持して失はざるをいふ。
⑬ 北院。北院の通禪師。
⑭ 沈吟。思ひ入りて考ふること。
⑮ 鑊頭通。通この時、鑊頭の役を勤めて居たるを以て斯く稱したるなり。
⑯ 欽山の還。澧州欽山文遠禪師、洞山良价に嗣法す。
⑰ 大慈。杭州大慈山。

を去るか、米を淘つて沙を去るか。峯云く、「沙米一時に去る。師曰く、「大衆個の什麼をか喫せん。」峯、遂に米盆を覆却す。師曰く、「因縁に據るに徳山にあるべし。」

師、一日雪峯に問ふ、「甚麼をか作し來る。」峯云く、「槽を斫り來る。」師曰く、「幾斧にか斫り成す。」峯云く、「一斧に斫り成す。」師曰く、「猶ほ是れ這箇の事、那邊の事作麼生。」峯云く、「直に得たり手を下す處なきことを。」師曰く、「猶ほ是れ這邊の事、那邊の事作麼生。」峯休し去る。

雪峯、飯を蒸す次、師問ふ、「今日蒸すこと多少ぞ。」峯云く、「二石。」師曰く、「足らざることを莫しや。」峯云く、「中に於て喫せざる者あり。」師曰く、「忽然として總に喫せば又作麼生。」峯無對。(先雲居代つて云く、「總に喫せば即ち足らざるものあることを見ず。」)

師、雪峯の來るを見て曰く、「門に入り來らば須らく語あることを得べし、蚤く箇の了と道ふことを得ざれ。」峯云く、「某甲口なし。」師曰く、「口なきこととは即ち且く從く、我れに眼を還し來れ。」峯便ち休す。(先雲居云く、「某甲口あらんことを待つて即ち道はん。」長慶云く、「與麼ならば則ち某甲謹んで

①色。色は質礙の義、五根五境等一切の色法をいふ。
②巖頭。支那泉州全齋禪師、徳山宣鑑に嗣法す。

③定。三學の一、六度の一、定は靜慮、靜慮の義にて禪定のこと、心一處に住して種々の妄想分別を起さず、不動著の境界をいふ。

④天台。支那浙江省天台縣の西に在り、隋の智者大師此の山に依つて一宗を開闢す、天台宗是れなり。

⑤智者。天台の智者大師なるも、今は自己本來の面目を指していふ。

⑥養存。蟬蜂の諺。
⑦飯頭。叢林に於て典座の下にあつて、大衆に供する粥飯を掌る役名。

⑧覆却。古來これを解するに米盆を顛却したるなりと云ふ説と、米盆衣の袖位にて覆ひ

退かん。雲居 徴して云く、「祇雪峯與麼に道ふが如きは、是れ入門の語か、是れ入門ならざる語か。」

雪峯、師を辭す。師曰く、「子甚れの處にか去る。」峯云く、「嶺中に歸り去る。」師曰く、「當時、甚麼の路より出づ。」峯云く、「飛猿嶺より出づ。」師曰く、「今回るに甚麼の路に向つてか去る。」峯云く、「飛猿嶺より去る。」師曰く、「一人あり、飛猿嶺より去らず、子還つて識るや。」峯云く、「識らず。」師曰く、「甚麼としてか識らざる。」峯云く、「他、面目なし。」師曰く、「子既に識らず、争か面目なきことを識らん。」峯、無對。

巖頭、徳山に參す、頭、方丈の門に入り、身を側て、問ふ、「是れ凡か是れ 聖か。」山、便ち喝す。頭、禮拜す。人あり、師に舉似す。師曰く、「若し是れ 齋上座にあらずんば、大いに承當し難からん。」頭曰く、「洞山老人、好惡を識らず、錯つて名言を下す。我れ當時 一手擡一手搦。」瑯琊の覺云く、「巖頭、人の 問着するなければ、奇特なることを妨げず、

纔に洞山に腦後に一錐せられて、直得に瓦解冰消す。」
師、徳山の侍者に問ふ、「何方より來る。」云く、「徳山より來る。」師曰く、

たるなりと云ふ説とあれど、蓋し前者當を得たるものならん。

①據于因縁云々。この八字、一本に「子、他後別見人去在」に作る。

②槽。槽とは家畜を養ふ飼桶なるを本義とす、今は牛馬食をいふ歟。

③忽然。思ひがけなくの意。
④先雲居。先雲居とは道膺を指す歟、蓋し道膺以後雲居山に住して名ある者約二十人あり、先の字はそれらと簡別するために特に用ひたるならん。

⑤徴。徴は徴詰の意、これ得歸十八間の一徵問に當る、徵問とは師家を問詰するをいふ。

⑥飛猿嶺。福州にある山の名。
⑦方丈。方一丈の居室の意にて、寺院住持の居處をいふ。

⑧凡。凡夫のこと、聖者に對す、

來つて什麼をかなす。云く、「和尚に孝順し來る。」師曰く、「世間什麼物か最も孝順なる。」侍者、無對。

師、不安。沙彌をして雲居に傳語せしむ、乃ち颯して曰く、「他或は問はん、和尚安樂なりや否やと。但だ道へ雲巖の路、相次絶せりと、汝此の語を下し須らく速く立つべし、恐らくは他、汝を打せん。」沙彌、旨を領じ去つて傳語す、聲未だ絶えざるに、早く雲居に一棒を打せらる。沙彌、無語。(同安の顯、代つて曰く、「恁麼ならば則ち雲巖の一枝墜ちず。」雲居の錫云く、「上座、且く道へ、雲巖の路絶するか絶せざるか。」崇壽の稠云く、「古人此の一棒を打する意作麼生。」)

師、將に圓寂せんとす、衆に謂つて曰く、「吾れに開名の世にあるあり、誰人が吾がために除き得ん。」衆、無對。時に沙彌出でて云く、「和尚の法號。」師曰く、「吾が問名已に謝す。」(石霜云く、「人の他を肯ふことを得るなし。」雲居云く、「若し問名あれば、吾が先師にあらず。」曹山云く、「古より今に至るまで人の辯得するなし。」疎山云く、「龍に水を出づるの機あり、人の辯得するなし。」)

智慧淺くして愚痴なる衆生をいふ、教家に於ては見道以前をすべて凡夫とし、三善根位を内凡、三賢位を下凡、以下を底下の凡夫といふ。
⑥ 聖者の略、凡夫に對し煩惱を斷盡したる人をいふ、聖人といふも同じ、小乘にては見道初果以上をいひ、大乘にては無明を斷破せる地上の菩薩をいふ。
⑦ 森上座。巖頭、諺を全藏といふ。
⑧ 一手擡一手搦。片手にて擡げ片手にて捺へること、即ち一擡一抑、一褒一貶と云はんが如し。
⑨ 瑠璃の覺。潯州瑠璃山慧覺禪師、汾陽の善昭の法嗣。
⑩ 問着。着は意味を強める時用ふる語、問はるゝの意なり。
⑪ 奇特。めづらしくすぐれたること。宋書に曰く、「風骨奇特。」

僧問ふ、「和尚違和還つて病まざる者ありや也たなしや。」師曰く、「有り。」云く、「病まざる者還つて和尚を看するや否や。」師曰く、「老僧他を看するに分あり。」云く、「未審し和尚如何が他を看す。」師曰く、「老僧看する時、病あることを見す。」

師、僧に問ふ、「穀漏子を離れ、甚麼の處に向つてか吾れと相見す。」僧、無對。遂に頰を示して曰く、「學者恒沙一悟なし。過は他の舌頭の路を尋ぬるにあり。形を忘れ蹤跡を混ずることを得んと欲せば、努め力めて慙懃にせよ空裏に歩せよ。」

師、咸通十年己丑三月朔旦を以て、命じて髮を剃り、身を深ひ、衣を披き鐘を聲さしめ、衆を辭し儼然として坐化す。時に大衆、號

特。
① 孝順。孝はよく親に事ふることに、順は「したがふ」と訓す。
② 颯。委囁、付囁の囁にして、己の願望を先方に寄せ告ぐる意。
③ 領。領得のこと、物事をのみこむこと。
④ 圓寂。涅槃の新譯にして、圓滿寂滅の意なり。
⑤ 問名。虛名と同意。
⑥ 法號。佛門に入りたる人につくる名、後世は死者の諡號をいふ、戒名、法諱と云ふも同じ。
⑦ 謝。絶又は退の意。
⑧ 違和。四大和合に違ふの意にして、四大の調和を失つて病となること也。
⑨ 穀漏子。四大色身をいふ。
⑩ 恒沙。恒河沙數の略、恒河の沙程の數といふ意にて無數とす。
⑪ 混。混亡、或は混滅と熟字し、無の意。
⑫ 慙懃。俗に「れんごろ」といふこと、丁寧親切の意なり。
⑬ 咸通十年。咸通は唐の宣宗皇帝中の年號、同十年は佛紀一三五四年、西紀八六九年に當る。
⑭ 儼然。壯なる貌、きつぱりといかめしきこと。
⑮ 大衆。大は多の義、多衆の人といふこと、叢林にて、四方より集り來れる雲衲を總じて大衆といふを常とす。
⑯ 髻。は「ひかげ」と訓す、日影のことなり。
⑰ 愚癡。大衆の愚癡を戒むる齊會なり。
⑱ 臨行。涅槃の行に臨むをいふ。
⑲ 號。法臘にして出家してより

働^① 暑^②を移して止まず、師忽ち目を開いて衆に謂つて曰く、「夫れ出家の人は心物に依らざる、是れ眞の修行なり、生に勞し死に息はゞ、悲みに於て何かあらん。」乃ち主事の僧を召して「愚癡齋一普を辨せしむ。蓋し其の戀情を責むるなり。衆、猶ほ戀慕して止まず、延いて七日に至つて食具、方に備る。師も亦隨つて齋し畢つて曰く、「僧家、大率臨行の際、喧動斯の如きことを事とすること勿れ」と。八日に至り浴し訖つて端坐して長往す。壽六十有三、臘四十二、敎して「悟本大師と謚す。塔を慧覺と曰ふ。」師、昔泐潭に在り、大藏を尋釋して、大乘經要一卷、并に道俗を激勵する偈・頌・誦・誦等を纂出す。諸方に流布す。

① 唐の懿宗皇帝の賜ひし謚號。

② 唐の懿宗皇帝の賜ひし謚號。

行由

師幼歲、師に従つて因に般若心經を念す、「無眼耳鼻舌身意」の處に至つて、忽ち手を以て面を捫でて師に問うて曰く、「某甲に眼耳鼻舌等有り、何が故ぞ、經に無と言ふや。」其の師、駭然として之を異なりとして云く、「吾れは汝が師に非ず」と、即ち指して「五洩山に往いて靈默禪師を禮せしむ。」

師、遊方、首に南泉に謁し、馬祖の諱辰齋を修するに値ふ。泉、衆に問うて曰く、「來日、馬祖の齋を設く、未審し馬祖還つて來るや否や。」衆、皆無對。師乃ち對へて曰く、「伴あらんを待つて即ち來らん。」泉曰く、「此の子、後生なりと雖も、甚だ雕琢するに堪へたり。」師曰く、「和尚、良を厭して賤と爲すこと莫れ。」

師、洞山に參じ問うて曰く、「頃南陽の忠國師、無情說法の話有るを聞く、某甲未だ其の微を究めず。」洞山曰く、「闍黎記得すること莫しや。」師曰

① 行由。行狀緣由の時、履歷のこと。

② 師。幼時の受業の師。

③ 駭然。驚く貌。

④ 五洩山。婺州に在り、馬祖道一の法嗣靈默禪師在住す。

⑤ 馬祖。道一禪師、支那漢州の人、南岳懷讓禪師に參じ、心印を傳ふ。

⑥ 諱辰齋。年忌法要なり。

⑦ 後生。先生に對する語、少年にいふこと。

⑧ 雕琢。剝離琢磨にて、專心辨道することはいふ。

⑨ 厭。厭と同意。

⑩ 洞山。靈祐禪師、支那福州の人、百丈懷海の嗣、洞山仰宗の祖なり。

く、「記得す。」瀉曰く、「子試みに擧すること一徧せよ、看ん。」師、遂に擧す。僧問ふ、「如何なるか是れ古佛心。」國師曰く、「牆壁瓦礫是なり。」僧曰く、「牆壁瓦礫、豈に是れ無情にあらざらんや。」國師曰く、「是。」僧曰く、「還つて説法を解するや否や。」國師曰く、「汝自ら聞かず、他の聞く者を妨ぐ可からず。」僧云く、「未審し甚麼人が聞くことを得。」國師曰く、「諸聖聞くことを得。」僧云く、「和尚還つて聞くや否や。」國師曰く、「我れ聞かず。」僧云く、「和尚既に聞かず、争か無情の説法を知らん。」曰く、「頼に我れ聞かず、我れ聞かば即ち諸聖に齊し、汝即ち我が説法を聞かず。」僧云く、「恁麼ならば則ち衆生無分に去るや。」國師曰く、「我れ衆生の爲に説く、諸聖の爲に説かず。」僧云く、「衆生聞いて後如何。」國師曰く、「即ち衆生に非ず。」僧云く、「無情説法何の典教にか據る。」國師曰く、「灼然、言、典を該ねざれば君子の所談に非ず、汝豈ぞ見ざる。」華嚴經に曰く、「刹説、衆生説、三世一切説と。」師、擧し了る。瀉山曰く、「我が這裏も亦有り、祇是れ其の人に遇ふこと罕なり。」師曰く、「某甲未だ明めず、乞ふ師、指示せよ。」瀉山、拂子

① 忠國師。支那西京光宅寺の慧忠國師、六祖慧能に嗣法す。
 ② 無情説法の話。慧忠國師、雲巖を訪ひし時の問答なり、無情は非情といふに同じ、有情に對す、一切の動物即ち人犬鬼畜等の心靈あるものを有情と稱するに對し、草木金石等の一切心靈なきものをいふ。
 ③ 常説熾然。常に熾んに説法して居てやめるときなし。
 ④ 衆生無分。衆生には其の説法を聞く分際がないかといふ意。
 ⑤ 典教。典經と殆んど同意、聖人の書をいふ。
 ⑥ 灼然。明かなる貌。
 ⑦ 刹。梵語刹摩の略、國、土、田等と譯す。
 ⑧ 衆生。梵語、薩埵の譯、一切生物に名づく。
 ⑨ 三世一切。三世は過去、現在及び未來なり、三世一切とは

を擧起して曰く、「會すや。」師曰く、「不會。請ふ、和尚説け。」瀉曰く、「父母所生の口終に子が爲に説かず。」師曰く、「還つて師と同時に道を慕ふ者有りや否や。」瀉曰く、「此を去つて、濃陵攸縣は石室相連る、雪巖道人といふ有り、若し能く撥草瞻風せば、必ず子が所重と爲らん。」師曰く、「未審し此の人如何。」瀉曰く、「他曾て老僧に問ふ、學人師に奉じ去らんとする時如何、老僧、他に對して道ふ、直に須らく滲漏を絶して始めて得べし、他道ふ還つて師の旨に違はざることを得んや也た無や。老僧道く、第一、老僧這裏にありと道ふことを得ざれ。」師、遂に瀉山を辭し、徑に雲巖に造る。前の因縁を擧し了つて便ち問ふ、「無情説法、甚麼人が聞くことを得ん。」巖曰く、「無情聞くことを得。」師曰く、「和尚聞くや否や。」巖曰く、「我れ若し聞かば汝即ち吾が説法を聞かず。」師曰く、「某甲甚麼としてか聞かざる。」巖、拂子を擧起して曰く、「還つて聞くや。」師曰く、「聞かず。」巖曰く、「我が説法汝尚ほ聞かず、豈に況んや無情の説法をや。」師曰く、「無情説法、何の典教をか該ぬ。」巖曰く、「豈ぞ見ざる。彌陀經に云く、水鳥樹林悉皆念佛念法と。」師此に於て、省あり、乃ち偈を述ぶ。

時間的にも空間的にもあらゆるものといふ意なり。
 ⑩ 濃陵攸縣。濃陵は國名、攸縣は土地の名なり。
 ⑪ 撥草瞻風。深山幽谷に入り、草を撥つて宗師を探り道を問ふこと。
 ⑫ 他。雲巖を指す。
 ⑬ 省あり。省悟、覺醒の義。
 ⑭ 也太奇。「也た太だ奇なり」と訓む、俗に「奇妙々々」といふに同じ。
 ⑮ 餘習。習氣にして煩惱の習慣の殘れるをいふ。
 ⑯ 聖諦。諦は眞實の義にて、佛道といふ程のこと、佛法には眞諦と俗諦とありて眞諦は非有の理を明し、俗諦は非空の理を明す、然しこの兩面は表裏不離の關係を有するが故に、この二を融鑒して眞俗不二となりたる所を聖諦といふ。

「也太奇、也太奇、無情說法不思議、若し耳を將て聽かば終に會し難からん、眼處に聞く時、方に知る可し。」

師、雲巖に問ふ、「某甲、餘習あり、未だ盡きず。」巖曰く、「汝曾て甚麼をか作し來る。」師曰く、「聖諦すら亦爲さず。」巖曰く、「還つて歡喜するや也た未だしや。」師曰く、「歡喜することは則ち無きにあらず、糞掃堆頭に一顆の明珠を拾ひ得たるが如し。」

師、雲巖に問ふ、「相見せんと擬欲する時如何。」曰く、「通事舍人に問取せよ。」師曰く、「見に問ふ。」次いで、曰く、「汝に向つて甚麼とか道はん。」

雲巖、舉して師に問ふ、「藥山、僧に問ふ、見説らく汝算を解すること虚か實か。云く、不敢。山曰く、汝試みに老僧を算せよ看ん。僧無對。汝作麼生。」師曰く、「請ふ、和尚の生日。」

藥山、夜參燈を點せず、山、垂語して曰く、「我れに一句子有り、特牛の兒を生せんを待つて、即ら汝に向つて道はん。」時に僧有り、曰く、「特牛兒を生せり、何を以てか道はざる。」山曰く、「侍者燈を把つて來れ。」其の僧、身を抽んで、衆に入る。雲巖、師に舉似す。師曰く、「其の僧卻つて會す。只だ是れ肯ふて禮拜せず。」

④ 通事舍人。取次の者、玄關番といふ程の意。
⑤ 不敢。いやどういたしましてといふ程の意。

⑥ 夜參。又は小參、晚參ともいひ、夜間、師家大衆を集めて訓誨辯達するをいひ、場所は定所なく、寢堂、法堂等、晚參牌を懸けて之れを報す。

⑦ 垂語。垂詢に同じ、師家の學人に對して教示の語を垂るなり。
⑧ 一句子。子は助字也。
⑨ 特牛。獸三歳を特といふ、特牛は牛の子なり。

雲巖、瀉山に到る。瀉、問ふ、「大保任底の人、那箇か是れ一か是れ二か。」巖曰く、「一機の絹、是れ一段か、是れ兩段か。」師、聞いて曰く、「人の樹を接ぐが如し。」

一日、雲巖、衆に謂つて曰く、「箇の人家の兒子有り、問著するに道不得底有ることなし。」師問ふ、「他の屋裏に多少の典籍か有る。」巖曰く、「一字も也た無し。」師曰く、「爭か恁麼に多知なることを得たる。」巖曰く、「日夜曾て眠らず。」師曰く、「一段の事を問はん、還つて得るや否や。」巖曰く、「道ひ得ば卻つて不道。」

雲巖鞋を作る次、師問ふ、「師に就いて眼睛を乞ふ、未審し還つて得るや也た無や。」巖曰く、「汝底、阿誰にか與へ去る。」師曰く、「良价は無し。」巖曰く、「設し有るも汝什麼の處に向つてか著けん。」師、無語。巖曰く、「眼睛を乞ふ底、是れ眼なりや否や。」師曰く、「眼に非ず。」巖之を咄す。

雲巖、尼衆に問ふ、「汝が爺在りや。」云く、「在り。」巖曰く、「年多少ぞ。」云く、「年八十。」巖曰く、「汝、箇の爺有り、年八十ならず、還つて知るや否や。」云く、「是れ恁麼にし來る者なることなしや。」巖曰く、「猶ほ是れ兒孫なること在り。」師曰く、「直に是れ恁麼にし來らざる者も亦是れ兒孫。」

院主石室に遊んで回る、雲巖問うて曰く、「汝去つて石室の裡許に到り、甚麼と爲てか便ち回る。」

① 大保任底の人。佛法を保護任持する大人の意で、佛道の極意に到達したる人。
② 眼睛。目の玉のこと、如來因地に於て人の求めに因つて眼を施せし事あるよりして、今斯く曰ひ來りしなり。
③ 咄。叱と同じく人を呵し罵る時に發する語。
④ 院主。百丈清規に「都寺、監寺、副寺等を院主といひ、一院の萬端を管理す」と。

主、無語。師代つて曰く、「彼の中、已に人有り占め了る。」巖曰く、「汝更に去つて作麼かせん。」師曰く、「人情斷絶し去る可からず。」

師、雲巖を辭す、巖曰く、「甚麼の處にか去る。」師曰く、「和尚を離ると雖も、未だ所止を卜せず。」曰く、「湖南に去ること莫しや。」師曰く、「無し。」曰く、「郷に歸り去ること莫しや。」師曰く、「無し。」巖曰く、「早晚卻回す。」師曰く、「和尚の住處有らんを待つて即ち來らん。」曰く、「此より一別、相見を得難し。」師曰く、「不相見を得難し。」

師行くに臨んで又雲巖に問ふ、「和尚百年の後、忽ち人有つて、還つて師の眞を、還得するや否やと問はんには、如何か祇對せん。」巖曰く、「但だ伊れに向つて道へ、只だ這箇是と。」師、沈吟す。巖曰く、「价闍黎、箇の事を承當せば、大いに須らく審細にすべし。」師、猶ほ疑に涉る、後水を過ぎて影を視るに因つて、大いに前旨を悟る。因に偈あり、

「切に忌む他に從つて覓むることを。 迢々として我れと疎なり。我れ今獨り自ら往く。處々渠に逢ふことを得たり。 渠今正に是れ我れ。我れ今是れ渠にあらず。應に須らく 與麼に會して、方に始めて如々に契ふべし。」

師、魯祖寶雲禪師に到り參す、禮拜して侍立し、少頃あつて出づ、卻つて再び入り來る。祖曰く、

① 迢得。迢は貌と同じ、象(かたどる)なり。
② 价闍黎。洞山真价を指す。
③ 迢々。はるかにの意。
④ 與麼會。新様に會得してといふこと。
⑤ 魯祖寶雲。魯山の寶雲禪師、馬祖道一の嗣。

「祇恁麼、祇恁麼、所以此の如し。」師曰く、「大いに人有りて肯はず。」祖曰く、「作麼汝が口辯を取らん。」師、便ち禮拜す。乃ち奉侍すること數月。僧、魯祖に問ふ、「如何なるか是れ不言の言。」祖曰く、「汝が口甚麼の處にか在る。」云く、「口無し。」祖曰く、「甚麼を將てか飯を喫す。」僧、無對。師代つて曰く、「他飢るす、甚麼の飯をか喫せん。」

師、南源(道明禪師)に到る、方に法堂に上る。源曰く、「已に相看了り。師、便ち下り去る。明日に至つて卻つて上り、問うて曰く、「昨日已に和尚の慈悲を蒙る、知らず什麼の處か是れ某甲と相看の處。」源曰く、「心々無間斷にして、性海に流入す。」師曰く、「幾と放過す。」

師、南源を辭し去る。源曰く、「多く佛法を學んで、廣く利益を作せ。」師曰く、「多く佛法を學ぶことは即ち問はず、如何なるか是れ廣く利益を作すこと。」源曰く、「一物も違ふこと莫き即ち是なり。」

師、棹樹に到る、棹樹問うて曰く、「來つて什麼をか作す。」師曰く、「和尚に親近す。」棹樹曰く、「若し是れ親近せば、兩片皮を動かすことを用ひて作麼かせん。」師無對。(曹山後に聞いて乃ち云く、「一子親み得たり。」)

師初め 京兆の興平和尙を禮す。平曰く、「老朽を禮すること莫れ。」師曰

① 南源。道明禪師、馬祖道一の法嗣。
② 法堂。說法堂の義にして、大法を闡揚し、宗旨を演説する等、一切の法式を行ふ處をいふ、現今寺院の本堂之れなり。
③ 相看。相見と同じ。
④ 性海。佛性海の義、平等一如の涅槃を大海に喩へたるなり。
⑤ 棹樹。神州棹樹慧省禪師、藥山惟嚴に嗣法す。
⑥ 兩片皮。唇のこと、徒らに口舌を弄することを兩片皮を動かすといふ。
⑦ 京兆の興平和尙。京兆は京尹と同じく首府のこと、興平和尙は馬祖道一の法嗣。

く、「老朽にあらざるを禮す。」平曰く、「渠禮を受けず。」師曰く、「渠曾て禮せず。」師卻つて問ふ、「如何なるか是れ古佛心。」平曰く、「既に汝が心是なり。」師曰く、「然も此の如くなりと雖も、猶ほ是れ某甲が疑處。」平曰く、「若し恁麼ならば即ち木人に問取し去れ。」師曰く、「某甲に一句子有り、諸聖の口を借らず。」平曰く、「汝試みに道へ看ん。」師曰く、「是れ某甲にあらず。」

師、平和尙を辭す。平曰く、「甚麼の處にか去る。」師曰く、「流に沿ふて定止すること無し。」平曰く、「法身流に沿ふか、報身流に沿ふか。」師曰く、「總に此の解を作さず。」平、乃ち掌を拊つ。(保福云く、「洞山自ら是れ一家。」乃ち別して云く、「幾人をか覚め得たる。」)

師、薯山に到る、薯曰く、「汝已に一方に住す、又這裏に來つて作麼かせん。」師、對へて曰く、「良价疑を奈何ともすること無し、特に來つて和尙に見ゆ。」薯、「良价」と召す、師、應諾す。薯曰く、「是れ什麼ぞ。」師、無語。薯曰く、「好箇の佛、只だ是れ光焰無し。」

師、(泐潭に在つて) 初首座の語あることを見るに曰く、「也太奇、也太奇、佛界、道界不思議。」師、遂に問うて曰く、「佛界道界をば即ち問はず、

①法身。無色無形の理佛のこと、所謂眞如を人格化して法身といふ。
 ②報身。因位の願に酬報して成就したるもの萬徳圓滿の佛身をいふ。
 ③保福。從展禪師、福州の人、雪峰義存に嗣法す。
 ④薯山。慧超禪師、支那吉州の人、湖南の如會に嗣法す。
 ⑤泐潭。支那江西省鄱陽湖の附近なる洪州に在り、古より禪僧多く此の地に住して化門を張れり。
 ⑥初首座。初首座の傳未だ詳かならず、傳燈錄には「初上座」に作る。
 ⑦道界。六道界のこと、衆生界にして佛界に對す、界とは種

祇佛界道界と説く底の如き、是れ甚麼人ぞ。」初、良久無對。師曰く、「何ぞ速かに道はざる。」初曰く、「争ふことは即ち得ず。」師曰く、「道ふとも也た未だ曾て道はず、甚麼の争ふことは即ち得ずと説かん。」初、無對。師曰く、「佛と道と俱に是れ名言、何ぞ教を引かざる。」初曰く、「教に甚麼とか道ふ。」師曰く、「意を得て言を忘す。」初曰く、「猶ほ教意を將て心頭に向はば、病を作すこと不在らん。」師曰く、「佛界道界と説く底の病大か小か。」初、又無對。次の日忽ち遷化す。時に師を稱して首座を問殺する。价となす。

師、(密師伯と) 經由する次、谿に菜葉を流すを見る、師曰く、「深山、人無くんば何に因つてか菜有らん、流に隨はば、道人の居あること莫からんや。」乃ち共に議して草を撥ふ。谿行五七里の間、忽ち羸形異貌の人を見る。乃ち(龍山和尙是れなり(亦隱山とも云ふ))。行李を放下して問訊す。龍曰く、「此の山に路無し、閻黎何れの處よりか來る。」師曰く、「路無きとは且く置く、和尙何れよりか入る。」龍曰く、「我れ雲水より來らず。」師曰く、「和尙此の山に住すること多少の時ぞ耶。」龍曰く、「春秋に涉らず。」師曰く、「和尙、先に住するか、此の山、先に住するか。」龍曰く、「知らず。」師曰

族、趣等の義あり。
 ①教。佛敎の略。
 ②价。良价の略。
 ③密師伯。神山密禪師、雲巖曇成禪師の法を嗣ぐ、洞山とは法眷にして山常に師伯と呼ぶ、故に世に密師伯といふ。
 ④經由。道を歩行すること。
 ⑤道人。佛道を修する人。
 ⑥羸形。羸はもと羊の瘦せることなれど、轉じて人にも用ふ。
 ⑦龍山。支那潭州の人、又隱山ともいふ、馬祖道に嗣法す。
 ⑧行李。行裝の瘦子、荷物のこと。
 ⑨問訊。他に對して合掌低頭して、語を述べることなるも、現今にては但だ單に合掌低頭することはいふ。
 ⑩人天。人間界天上界の略。
 ⑪兩箇の泥牛。有無迷悟生佛正偏等の待對の見が、悉く真空

く、「甚麼として知らざる。」龍曰く、「我れ人天より來らず。師曰く、「和尚何の道理を得てか便ち此の山に住す。」龍曰く、「我れ兩箇の泥牛、鬪つて海に入るを見る、直に今に至つて消息を絶す。師、始めて威儀を具し、禮拜して即ち問ふ、「如何なるか是れ主中の寶。」龍曰く、「青山、白雲を覆ふ。師曰く、「如何なるか是れ主中の主。」龍曰く、「長年、戸を出でず。師曰く、「主賓相去ること幾何ぞ。」龍曰く、「長江水上の波。」師曰く、「賓主相見何の言説か有る。」龍曰く、「清風白月を拂ふ。師辭し退く。

師、一日、密師伯と水を渡る。師曰く、「錯つて脚を下すこと莫れ。」伯云く、「錯たば即ち過ぐることを得ず。」師曰く、「錯らざる底の事、作麼生。」云く、「長老と共に水を過ぐ。」

師、密師伯と茶園を鋤く。師、鋤頭を擲下して曰く、「我れ今日困す、一點の氣力も也た無し。」伯曰く、「若し氣力なくんば、争か恁麼に道ひ得ることを解せん。」師曰く、「汝將に謂へり、氣力有る底是なり」と。

師、密師伯と水を過ぐる次、乃ち問うて曰く、「水を過ぐる事、作麼生。」伯曰く、「脚を濕さず。」師曰く、「老老大々として這箇の語話を作す。」伯曰く、「儻作麼生か道はん。」師曰く、「脚、濕はず。」

法性海に歸入するを見たといふので、自分悉く異なる差別のを見を離れてしまつたことをいふ。
 威儀。威儀とは、行住坐臥一舉一動善く規矩に今し、人をして畏敬の念を起さしむる容儀をいふ。
 主中の寶。正中の偏、平等中の差別といふと同じ。
 長江。揚子江の別名。
 長老。道眼を具へ智徳ある人の意にして、小比丘より大比丘を尊稱して呼ぶに用ふ。

密師伯、因に把針する次、師問ふ、「什麼をか作す。」伯云く、「把針す。」師曰く、「把針の事、作麼生。」伯云く、「針々相似たり。」師曰く、「二十年同行して這箇の語話を作す、豈に與麼の工夫有らんや。」伯曰く、「長老又作麼生。」師曰く、「大地、火を發する底の道理の如し。」他日、師に問ふ、「知識通する所遊踐せずといふこと莫し、徑截の處、師の一言を乞ふ。」師曰く、「伯の意、何ぞ功を取ることを得たる。」伯、斯れに因つて頓に下語の非常なることを覺る。

師、密師伯と行く次、忽ち白兔の走り過ぐるを見る。伯曰く、「俊なる哉。」師曰く、「作麼生。」伯云く、「大いに白衣の相に拜せらるゝに似たり。」師曰く、「老々大々として這箇の語話を作す。」伯云く、「汝、作麼生。」師曰く、「積代の簪纓、暫時落薄。」

師、密師伯と木橋を過ぐ、師先づ過ぎ了つて、木橋を拈起して曰く、「過ぎ來れ。」伯云く、「价閣黎。」師使ち木橋を放下す。

師、一官人に會す。官人曰く、「三祖の信心銘、弟子、註せんと擬す。」師曰く、「纔かに是非あれば、紛然として心を失す」と。作麼生か註せ

①把針。裁縫すること。
 ②同行。同參修行の時。
 ③徑截。徑は直の意、截は斷の意。
 ④俊。俊快の義、俗に「すばしい」といふ程の意。
 ⑤白衣。無官下賤なる者をいふ。
 ⑥簪纓。簪は「かんざし」のこと、纓は「冠のひも」のことにして、轉じて高位高官の人をいふに至る。
 ⑦落薄。落魄に同じ、「おちぶれる」こと。
 ⑧三祖。鑑智僧璨禪師、禪宗支那相承の第三祖。二祖慧可大師に嗣法す。
 ⑨信心銘。三祖大師の著、四言一百四十六句、五百八十四字より成る韻語にして、佛祖單傳の禪要を述ぶ。
 ⑩弟子。官人自らをいひしなり。

ん。(法眼代つて云く、「慈愛ならば則ち弟子註せず。」)

師、密師伯と百顔の哲禪師の處に到る。顔、問ふ、「甚れの處よりか來る。師曰く、「湖南より來る。顔曰く、「觀察使姓は甚麼ぞ。」師曰く、「姓を得ず。顔曰く、「名は甚麼ぞ。」師曰く、「名を得ず。顔曰く、「還つて事を理むるや也た無や。」師曰く、「自ら廊幕の在る在り。顔曰く、「還つて出入するや否や。」師曰く、「出入せず。顔曰く、「豈に出入せざらんや。」師便ち拂袖して出で去る。顔、來日、早を侵し、堂に入りて師を召す、師、近前す。顔曰く、「昨日、上座に祇對する話、老僧が意に愜はず、一夜安からず。今請ふ、上座別に一轉語を下せ、若し老僧が意に愜はゞ、即ち粥を開き相伴ふて夏を過さん。」師曰く、「却つて請ふ和尚問へ。」顔曰く、「出入せずといふ是れ如何。」師曰く、「太尊貴生。」顔乃ち粥を開き同じく夏を過す。師、密師伯と行く次、路傍の一院を指して曰く、「裏面に人有り、心と説き性と説く。」伯曰く、「是れ誰ぞ。」師曰く、「師伯に一間せられて、直に得たり。去死十分。」伯曰く、「心と説き性と説く底は誰ぞ。」師曰く、「死中活を得たり。」

- ①百顔。一本に柏巖に作る、支那鄂州柏巖明哲禪師、巖山惟儼に嗣法す。
- ②觀察使。各地に遣はして政治の狀態官吏の勤怠などを觀察させたる使者をいふ。今洞山「湖南より來る」と答へしを以つて、抑草の意を含めて洞山を呼ぶに此の語を以てしたるなり。
- ③廊幕。幕僚と同じ、屬官のこと。
- ④上座。梵に悉多毘羅、又長老とも譯し、上座の義にして沙門中の老宿を尊稱せる名なり、現今にては出家得度後入衆したる者を皆上座と呼ぶ。
- ⑤夏。夏安居のこと、夏季九旬なり。
- ⑥太尊貴生。生は助字、太は、はなはだと訓す。えらい者也。
- ⑦去死十分。死にきつたといふこと。

歌頌

寶鏡三昧歌

如是の法、佛祖密に附す。汝今之を得たり。宜しく善く保護すべし。銀盤に雪を盛り、明月に鷲を藏す。類して齊しからず。混する則んば處を知る。意言に在らざれども、來機亦赴く。動すれば窠臼を成し、差へば顛佇に落つ。背觸共に非なり。大火聚の如し。但文彩に形せば、即ち染汚に屬す。夜半正明、天曉不露。物の爲に則となる。用ひて諸苦を抜く。有爲に非すと雖も、是れ語無きにあらず。寶鏡に臨んで、形影、相視るが如く、汝是れ渠にあらず。渠正に是れ汝。世の嬰兒の、五相完具す

- ①歌頌。歌頌は共に韻語の一體なり。
- ②寶鏡三昧歌。本歌は四言九十四句三百七十六字より成り、主として偏正回互の妙旨を説き、同時に修行の方法、化導の要旨をも示さる。古來禪門五家七宗の間に重要視され、特に曹洞宗にては最も之を重じ、朝夕誦誦されつゝあり、寶鏡三昧の語義前註に詳かなり、看よ。
- ③如是の法。佛祖の大法をいふ。
- ④密。親密の義。
- ⑤銀盤に雪。銀盤、雪、共に同一白色、然れども同一物に非ず、平等差別正偏回互の旨に喩ふ。
- ⑥明月に鷲。銀盤に雪を盛ると同様なり。
- ⑦來機。法を問ひに來る人のこと。
- ⑧窠臼。土中の穴のこと。
- ⑨顛佇。思慮定まらず、進退決せざる義。
- ⑩五相。起、住、去、來及び語なり。
- ⑪嬰兒の言葉の分明ならざるをいふ。
- ⑫重離六爻。偏正回互、重離とは易の離の卦を重ねたのをいふ。一爻、三離、三三重離。六爻の爻は易の算木一本のこと、離の卦は三爻であるが之を重ねれば六本になる故六爻といふ。偏は明、差別、事等

るが如し。不去不來、不起不住。婆々和々、有句無句。終に物を得ず。語未だ正しからざるが故に、重離六爻、偏正回互。疊んで三と成り、變じ盡きて五と成る。莖草の味の如く、金剛の杵の如し。正中妙挾、敲唱雙へ擧ぐ。宗に通じ途に通ず。挾帶挾路、錯然なる則んば吉なり。犯忤すべからず。天真にして妙なり。迷悟に屬せず。因縁時節、寂然として昭著す。細には無間に入り、大には方所を絶す。毫忽の差、律呂に應せず。今頓漸あり。宗趣を立するに縁つて、宗趣分る。即ち是れ規矩なり。宗通じ趣極るも、眞常流注。外寂に内搖くは、繋げる駒伏せる鼠。先聖之を悲んで、法の檀度となる。其の顛倒に随つて、縋を以て素となす。顛倒想滅すれば、

に當り、正は時、平等、理等に當る、此の二者は互に不二なるを回互といふ。離の一卦若し重れて六爻を得れば自ら回互の象あり、偏正回互の義に似たるをいふ。
 ⑤ 疊三變五。重離の六爻若し疊めば巽の三爻二となる、而れば本の離三の卦と合すれば都合三卦となる、これを疊三といふ。而して重離を疊んで得たる兌の卦の下は自ら巽三の卦となる、次に兌を上巽を下に并ぶれば澤風火火三三を得、巽を上兌を下に并ぶれば風澤中孚三三を得、斯くの如く離の卦二つに依り五種の卦を成す、而して更に疊まんとすれば、再び重離の卦となる故に、變じ盡きて五となる」とはいふなり。
 ⑥ 莖草の味。一名五味子といひ、此草の實は五味を具ふ、一より五を生じ五は即ち一に歸す、五一不二の理を示す。
 ⑦ 金剛の杵。五結の其中は一木にして兩端は各々五分に分るなり、五一不異の理を示す。
 ⑧ 正中妙挾。平等の本體の中に自然に千差萬別の妙用を挾持して居るをいふ。
 ⑨ 敲唱雙へ擧ぐ。學人が師家に法を問ひ、師家が之に答ふるをいふ。
 ⑩ 宗、途。宗は「むれ」と訓じ、俗に云ふ、「目的」のこと、途は其の目的に達する手段をいふ、途中の意なり。
 ⑪ 挾帶挾路。挾帶して宗に通じ、挾路にして途に通ずるの意。
 ⑫ 錯然。交錯敬慎の貌。
 ⑬ 天真。造作にあづからず、變更なきの意。
 ⑭ 律呂。支那音樂の六律六呂の

① 肯心自ら許す。古轍に合はんと要せば、請ふ、前古を觀せよ。佛道を成するに垂として、十劫樹を觀す、虎の缺けたるが如く、馬の馬の如し。下劣あるを以て、寶几珍御、驚異あるを以て、狸奴白牯、弄は巧力を以て、射て百歩に當つ。箭鋒相値ふ。巧力何ぞ預らん。木人方に歌ひ、石女起つて舞ふ。情識の到るに非ず、寧ろ思慮を容れんや。臣は君に奉し、子は父に順す。順せざれば孝に非ず、奉せざれば輔に非ず。潛行密用は、愚の如く魯の如し。只だ能く相續するを、主中の主と名づく。
 ② 玄中銘 并に序
 竊に以れば、絶韻の音は、玄唱を假つて以て宗を明し、入理の深談は、無功を以て旨を會す。體用を混然し、偏圓を宛轉す。亦猶は

こと。
 ① 頓漸。慧能門下を南頓と稱し、神秀門下を北漸と稱し、相對峙せるを指す、頓は一超直入如來地の意、漸は漸々修學悉當成佛の意。
 ② 宗趣。宗は宗旨の義、趣は趣向の義にて、宗旨に趣向する道程をいふ。
 ③ 眞常流注。眞如常住の境界に違するも、微細の煩惱は絶えず流れ出でて止まぬこと。
 ④ 法の檀度。檀度とは具には檀那波羅密といひ、檀那は布施、波羅密は度彼岸と譯す。
 ⑤ 縋、素。縋は黒色、素は白色、即ち有無、色空、淨穢、苦樂等のことをいふ。
 ⑥ 肯心。自己の心に領會すること。
 ⑦ 十劫樹を觀す。大通智度佛將に佛道を證得せんとするも能はず、更に十劫の間樹下に蟄坐し、觀念して漸く佛果を證得せしをいふ。
 ⑧ 虎の缺。「玄義」に虎の人を傷づること一度すれば、耳に一缺を生ずといふ、缺は傷の意。
 ⑨ 馬の駒。馬は束縛なり、馬の繩束を受けて自由ならぬをいふ。
 ⑩ 寶几珍御。金銀珠玉等にて飾り立てし几、几は足のせかくる道具なり、御は天子御用ひらるゝ衣食のこと、珍御は衣服調度の美なるを云ふ。
 ⑪ 弄。弓の名人の名をいふ。
 ⑫ 潛行密用。潛は「ひそむ」と訓じ、表面より見えぬこと、密は綿密、緻密の義、外に神異奇行の相をあらはさず、内に深沈穩密の行を持つをいふ。
 ⑬ 玄中銘。銘は文の一體にして物の功を記銘し、又警戒するの辭なり、今、本銘は四言五

① 乃を投じ、斤を揮つて、輪扁手に得るがごとし。虚立犯さず、廻互傍参す。② 鳥道に寄つて寥空なり。玄路を以て該括す。然も空體寂然なりと雖も、群動に乗かす。有句中の無句に於て、妙體前に在り。無語中の有語を以て、廻塗復た妙なり。是を以て用にして動かす、寂にして凝らす。清風草を偃せども搖かす。皎月天に普けれども照すに非ず。蒼梧丹鳳を棲ましめず、激潭③ 豈に紅輪を墜さんや。獨にして孤ならず、無根にして永固なり。雙つながら明にして韻を齊しうし、事理俱に融す。是れを以て、高く④ 雪曲を歌へば、和する者還つて稀なり。⑤ 布鼓軒に臨む、何人か鳴撃せん。旨、妙に達せざれば、幽微を措き難し。儻し或は用にして功なく、寂にして虚しく照し、事理雙べ明し、體用滯無くんば、玄中の旨、其れ斯に在り。

大陽門下、日々⑥ 三秋。明月堂前、時々⑦ 九夏。森羅萬象、古佛の家風。碧落青霄、道人の⑧ 活計。靈苗瑞草、野父芸るを愁ひ、⑨ 露地の白牛、牧人牧ふに懶し。龍、枯骨に吟じて、異響聞き難く、木馬嘶く時、何人か聴くと道はん。⑩ 夜明簾外、古鏡徒らに耀き、空王殿中、光光那ぞ照さん。

十六句、二百二十四字の韻語。洞山、學人を警醒するたに詠出する所なり。
① 無功。功勳五位中の功々に同じ、無功は大切にして無我の往來、脱落の境界をいふ。
② 投刃。揮斤、輪扁共に莊子にある故事。
③ 鳥道。玄路。前註を見よ。
④ 蒼梧丹鳳。鳳凰は蒼梧に棲むもの、然るに棲ますといふ、其の位を守らざるに喩ふ。
⑤ 激潭。紅輪は大陽のこと、大陽は激潭に沈むやうに見ゆるけれども、遂に水中に没するにあらず、是れ亦停滯せざるに喩ふ。
⑥ 雪曲。陽春白雪は最も高尙の曲にして、人の之れに和する者甚だ少し。
⑦ 布鼓。布で造つた大鼓、故に鳴らない。
⑧ 三秋。秋三ヶ月をいふ。

激源洪水、尙ほ孤舟に棹し、古佛の道場、猶ほ① 車子に乗す。無影樹下、永劫清涼。觸目荒林、年を論じて② 放曠たり。舉足下足、鳥道殊なること莫し。坐臥經行、玄路にあらざること莫し。向つて道ふ去ること莫れと、歸り來れば父に背く。夜半正明、天曉不露。先行到らず、末後甚だ過ぐ。③ 没底の船子、④ 無漏にして堅固なり。碧潭の水月、⑤ 隱々沈め難し。青山白雲、無根にして卻つて住す。峰巒秀異なれども鶴、機を停めず。靈木迢然たれども、風依倚すること無し。徒らに布鼓を敲く、誰か是れ⑥ 知音。空を撃つて聲を成す、何人か掌を撫せん。⑦ 胡笳曲子は、⑧ 五音に墮ちず。韻、青霄に出づ、君が吹唱するに任す。

⑨ 古路坦然、誰か足を措かん。人の⑩ 還郷の曲を唱ふることを解する無し。清風月下、⑪ 株を守るの人、⑫ 涼免漸く遙にして春草緑なり。天香襲うて⑬ 芬馥を絶す、月色凝つて照觸するに非ず、玄を行するも猶ほ是れ⑭ 崎嶇に渉る。妙を體すれば茲に因つて延足に背く。殊に然らず何ぞ展縮せん。縦ひ然ることを得るも混泥の玉なり。⑮ 獬豸欄を同じて辨する者嗤

① 九夏。一夏九句のこと。
② 活計。「なりはひと調じ、境界の義。
③ 露地の白牛。法華譬喩品の説に基く、無漏實相の妙智に譬へしもの。
④ 夜明簾。初學記に曰く、秦金玉を以て簾となし、珠璣を以て箔となす、晝夜長に明なり云々しと。
⑤ 車子。子は助字。
⑥ 放曠。放は縱なり、曠は空なり潤なり。
⑦ 没底の船子。没は絶なり無なり、子は助字。無底船といふに同じ、底なき船のことにて、一切執著を離れたる解脱の意に用ふ。
⑧ 無漏。無爲の義なり、造作變遷に渉らざるをいふ。
⑨ 隱々。有るが如く、無きが若くはつきりせぬこと。
⑩ 迢然。高き貌。

ふ。薰猶處を共にして、須らく郁しきことを分つべし。長天の月は谿谷に徧く、不斷の風松竹を偃す。我れ今此に到つて、從容たることを得たり。吾が師は我が隨逐することを叱す。新豐の路、峻しくして仍ほ鼓かなり。新豐の洞、漠然として沃ぐ。登る者は登つて動搖せず。遊ぶ者は遊んで急速すること莫し。荆榛を絶し、麝麝を罷む。馨香を飲み清肅を味ふ。重を負ふて登臨し、屣を脱いで廻る。他を看るに早く是れ空しく擔鞠す。來つて肩に駕して芳躅を履む。至つて心を激ましめ去つて目を凝す。亭堂有りと雖も到る人稀なり。林泉長せず尋常の木。道、鑄離せざれども曲親なるに非ず。野人歩を進む何ぞ瞻矚せん。工夫到らざれば方圓ならず。言語通せざれば眷屬に非ず。事

①知音。眞に心を知り合ふたる友をいふ、知己に同じ。
②胡笳の曲子。子は例の助字、胡笳の曲とは蘆葉を巻きて吹く笛の曲、胡子の吹く笛なり、その曲は尋常の音楽と異なり、音律に入らざるものなるより、佛祖相傳の宗風、判釋等の外なるに喩ふ。
③五音。音律にて宮、商、角、徵、羽といふ。
④新豐吟。吟は歌と殆んど同意、洞洞新豐山に於ける作なるが故に此の名あり、七言三十六句の古體にして、前の寶鏡三昧歌、玄中銘等と同調なり。
⑤古路。佛祖の履行せる道のこと、即ち佛祖の行へる大道をいふ。
⑥還鄉曲。本家郷に歸り穩坐する歌曲といふこと、即ち中途に住着せず、一色空邊に止ま

らざることを。
⑦株を守るの人。韓非子に出づ、愚人の意、宋人田を耕すに、兔あり來つて田中の株に觸れて死す、他の宋人之を見、耕を釋め株を守つて兔の來り死するを待つに、卒に得ることなかりきといふ。
⑧涼兔。涼月に同じ。
⑨分蘗。かたること。
⑩時。山路平かならざる貌。
⑪辨。堯帝の時の瑞獸にして、辨は雄、豕は雌なり、雄雌同形にして辨じ難し。
⑫蕪蕪。香のよき草と惡しき草となり。
⑬從容。舉動詳審、閑雅の貌。
⑭鼓。滑と同じ。
⑮洪然。水の澄んで、少しも動かざる貌。
⑯荆榛。いばらなどの雜草の生ひしげれるところ。
⑰新豐。新は切なり、勳は斬な

然らずんば、詎ぞ冥旭せん。我れ然らずんば何ぞ斷續せん。感懃に爲に報す道中の人。若し玄關を戀はゞ即ち拘束せられん。

綱要頌 三首

① 敲唱俱行
② 金鏡雙鎖備り、叶路隱かに全く該ぬ。寶印空に當つて妙なり。重重錦縫開く。
③ 金鎖玄路
交互す明中の暗。功齊しうして轉た難きことを覺ゆ。力窮つて進退を忘れ、金鎖網、鞅々。
④ 不墮凡聖
事理俱に涉らす。回照絶だ幽微。風に背いて功拙なし。電火、燦として追ひ難し。
⑤ 五位
正位卻つて偏、偏に就いて辨得すれば、是れ

り續なり。
① 履。踵に同じ、「くつ」の、と。
② 擔鞠。難儀して山などに昇ること。
③ 鑄離。鑄は刻なり。
④ 曲親。曲つて居ること、親とほうなじなり。
⑤ 野。春秋戰國時代の楚の都、荊州府。
⑥ 瞻矚。共に「みる」こと訓す。
⑦ 玄關。玄妙なる道に進み入る端緒の意、轉じて一般に家の入口のこと。
⑧ 綱要。宗旨の大綱的要なり、今洞山之を分つて三種となし、頌を以てあらはすなり。
⑨ 敲唱俱行。敲は學人が問話の爲めに師家の門を敲きて教を乞ふこと。唱は師家が學人の問話に對して答ふること。俱行は俱に行はれて親密なるをいふ、即ち敲唱俱行は學人と

師家との境地親密にして二面なきをいふなり。
① 金鏡。金鏡雙鎖備は、正偏、智行雙へ備はりて圓なることに喩ふ。
② 金鎖玄路。金鎖は佛縛法縛をいふ、菩提涅槃は黄金の美なるが如きも、之に縛せらるれば苦むが故に、金鎖といふ、玄路は玄々微妙の路にして向上の一路をいふ、されば佛に縛せられ法に縛せられ、又向上の一路に滞るは却つて其の身の束縛なることを示すがこの頌なり。
③ 鞅々。覆ひ隠す貌。
④ 不墮凡聖。凡聖は凡夫聖人のこと、凡聖、生佛迷悟、是非等の二見の生ずるはこれ三界輪廻の根本の故に、一切の對待を絶し、二見に墮せざれば三界を出離し、涅槃寂靜を示すがこの頌なり。

① 兩意を圓にす。偏位偏なりと雖も、亦兩位を圓にす。緣中に辨得すれば、是れ有語中の無語。或は正位、中來なるものあり、是れ無語中の有語。或は偏位中來なるものあり、是れ有語中の無語。或は相兼帶來なる者あり、這裏有語無語を説かず。這裏直に須らく正面にして去るべし。這裏圓轉ならざることを得ざれば、事須らく圓轉すべし。然れば途にあるの語は總に是れ病なり。夫れ當人先づ須らく語句を辨得して、正面にして去るべし。有語是れ恁麼に來り、無語是れ恁麼に去る、作家中、言語無きにあらず、有語無語に涉らず。這裏を喚んで兼帶の語と作す、全く的なし。他の智上座、遷化の時に臨んで人に向つて道ふ、「雲巖有ることを知らず、我れ悔らくは當初に伊に向つて説かざりし

② 標。かびやく貌。
③ 五位。五位に四種あり、正偏五位、功勳五位、君臣五位、王子五位これなり、但し後の二は前二を譬喩的に説明したるものなり、この五位たる所説極めて簡なれども、禪宗哲學の大意を概括して餘蘊なければ、臨濟の四料簡と共に古來禪門に於て廣く用ひられ、參禪の要術、工夫の標準として重要なものなり。
④ 兩意を圓にす。兩意とは正位と偏位をいふ、正は平等なり、眞如なり、萬法の本體なり、偏とは差別なり、個々獨立の萬法の現象をいふ。現象せる萬物個々の外に本體なきの意を示す、これを正中偏とも偏中正ともいふなり。
⑤ 中來。證に入る過程をいひしものにして直に本體界を徹見して大悟するものと、個々萬

有の道理を究めて悟入するものとあり、前者を正位中來（正中來）後者を偏位中來（偏中來）といふ。
⑥ 相兼帶來。普通之を兼中到といふ、正偏、來至毫も墨礙なく互に融攝し、自由自在の妙用を顯現する位なり、兼帶は圓攝總收の意にて前四位は只だ是れこの一位の所變なりとす。
⑦ 蔡子。蔡は法の義、法子と云ふも同じ。
⑧ 異類中行。異類即ち畜生の中に行くの意、發願利生の大乗の菩薩が成佛得脱の後、涅槃に安住せず、生死の迷界に却來して、六道に輪廻して一切有情を濟度するをいふ。
⑨ 密聞黎。密師伯のこと。
⑩ 正中偏。正は平等一如の本體界をいふ、宇宙の本體に常住不變にして時間空間を超越

ことを。然も是の如くなりと雖も、且く藥山の蔡子に違せず」と。看よ他の智上座、合に恁麼生か老婆なる。南泉喚んで、異類中行と作す、且つ密聞黎知らず。

五位頌 五首

① 正中偏。三更初夜月明の前。怪むこと莫れ相逢ふて相識らざることを。隠々として猶ほ懐く舊日の嫌。

② 偏中正。失曉の老婆古鏡に逢ふ。分明觀面更に他無し。更に頭に迷ふて猶ほ影を認むることを休めよ。

③ 正中來。無中路有り塵埃を出づ。但だ能く當今の諱に觸るゝこと莫くんば、也た勝る前朝斷舌の才。

④ 兼中至。兩刀鋒を交へて避くることを須

し、因果の範疇を以て律すべからず、即ち眞空なり、然らば全く無相なるやといふに然らず、吾人の眼前に顯現する現象界の事物一々本體の現れにして、萬有の外に別に眞如あるなし、是の道理を正中偏といふ、偏とは偏頗の意にして起滅變現極りなき差別の現象界をいふ。
① 隱々。不昭明の貌。
② 嫌。一に研に作る。
③ 偏中正。是は前の正中偏を反對に云ひ來りしに過ぎず、千變萬化の差別界即平等の實在界なりとす。
④ 失曉。破曉と同じ、あけがたのこと。
⑤ 觀面。猶ほ親見といはんが如し。

⑥ 正中來。正偏に基づける修行の工夫を明せるものなり、即ち其の究極は正偏兼帶の一位にあれども、其に到達する功夫に於て、正中より來るあり、偏中より至るありて自ら二方面あり、今兼中至といふは即ち偏中至のことなり。
⑦ 當今。今上陛下のこと。
⑧ 前朝斷舌の才。隋の時辯士あり、李知章と名づく、辯論ある毎に衆皆舌を結（ま）く、故に時人之を號して斷舌の才となす。
⑨ 火裏の蓮。火中の蓮のことに喩て、思慮分別の及ばざるに喩ふ。
⑩ 宛然。さながらといふこと。
⑪ 衝天の氣。一本に冲天と作る。
⑫ 兼中到。正偏等には毫も墨礙することなく、互に融攝して蹤跡を絶し、自由自在の妙用

ひす。好手は猶ほ、火裏の蓮の如し。宛然として自ら、衝天の氣有り。兼中到、有無に落ちず誰か敢て和せん。人人盡く常流を出でんと欲す。折合して還つて炭裡に歸して坐す。

功勳頌（異本、上堂の次、問話の僧に示す頌に作る。）

問ふ、「如何なるか是れ向。」師曰く、「力を得て須らく飽くことを忘すべし、權を休めて更に餓ゑす。」

聖主由來、帝堯に則る。人を御するに禮を以て、龍腰を曲ぐ。有る時闕市頭邊を過ぐれば、到る處、文明にして、聖朝を賀す。

問ふ、「如何なるか是れ奉。」師曰く、「只だ朱紫の貴きを知つて本來人に鼻負す。」

淨洗濃粧阿誰が爲ぞ。子規聲裏人を勸めて歸らしむ。百花落ち盡きて啼いて盡くること無し。更に亂峯深き處に向つて啼く。

問ふ、「如何なるか是れ功。」師曰く、「手を撒して端然として坐す、白雲深き處間なり。」

枯木花開く、劫外の春。倒に玉象に騎つて麒麟を趁ふ。而今高く隠る千峰

の外。月皎く風清し好日の辰。

問ふ、「如何なるか是れ其功。」師曰く、「素粉跡を沈め難し、長安久しく居らず。」

衆生諸佛相侵さす。山は自ら高く水は自ら深し。萬別千差底事をか明す。鷓鴣啼く處、百花新なり。

問ふ、「如何なるか是れ功功。」師曰く、「混然として諱む處なし。此の外更に何をか求めん。」

頭角纔かに生すれば已に堪へず。心を擬して佛を求む、好し、羞慚するに。迢々たる空劫人の識る無し。南に向つて五十三を詢ぬるを肯はんや。

王子頌 五首

誕生

天然の貴胤本功に非ず。徳、乾坤に合くして

を顯現する位を云ふ。自他生佛、迷悟修證の論すべきなき境界なり。

功勳頌。功勳五位のことにして功勳五位とは、問、奉、功、共功、功々をいふ。畢竟此れ實踐哲學の標準たるべきものにして、功の進修を明かしたるものなり、其の一々に就いては前註を見るべし。

帝堯。支那古代の堯帝のこと、堯天下を治むること五十年、天下の治まるか治まらざるかを知らずと云ふ、世之を無爲にして化すと稱す。

龍腰。天子の腰を尊んで云ふなり、龍腰と云ふに例す。

文明。世の開け行くに云ふ。

聖朝。聖天子の朝廷といふこと。

鼻負。鼻は脊の骨、罪と同意、或は率の寫誤ならん乎、率負はそむくの意にて、孤負

南に向つて五十三を詢ぬ。華嚴經入法界品に出づ、善財童子南方に向ひ、德雲比丘に參じて後、展轉して普賢菩薩に至る迄百十城を經、五十三の善知識に參すとあり、つまり修行行脚といふことなり。

王子頌。王子五位頌のことなり、本録之を載すと雖も、古來作者に異説あり、或は洞山と云ひ、或は曹山と云ひ、又或は石霜なりといふ、但しこは偏正五位に倣ひ、王子の譬喩を以て修行の歷程を説けるものなり。

誕生。誕生王子のこと、本來國王の正嫡に生れ出でたる太子にして、普人の初發心の時、直ちに正覺を成じ、少しも功用を假らずして佛果位に至ることを示す、正中來に近し。

普漢。普元と同じ、おほざらのこと。

育勢隆なり。始末一期雜種無し。宮を六宅に分つて它宗にあらず。上に和し下に睦じうして陰陽順ひ、共氣連枝、器量同じ。誕生王子の父を識らんと欲せば、鶴、霧漢に騰つて銀籠を出づ。

朝生

苦學情を論じて世群ならず。出で來つて凡事已に倫を超ゆ。詩は五字を成す。三冬の雪。筆は分毫を落す四海の雲。萬卷の積功聖代を彰し、一心の忠孝明君を輔く。鹽梅は是れ生れながら知得するにあらず。金榜何ぞ勞せん至勳を願ふことを。

末生

久しく巖嶽に棲んで功夫を用ふ。草榻柴扉志を守つて孤なり。十載の見聞心自ら委す。

- ①朝生。朝生王子のこと、王宮に生れて臣位に在る太子にして、一度は王位に上り得るも、必ずしも直ちに王位に上るには非ず即ち宰相位なり、吾人の日常修行の功成り、佛果位に到るも必ずしも直ちに佛果位に至るには非ず、漸々修學悉當成佛をいふ、偏中正に近し。
- ②三冬。冬の三ヶ月間をいふ。
- ③鹽梅。よき程の味に加減すること、轉じて君を輔佐するにいふ。
- ④末生。末生王子のこと、天子の末子にして、必ずしも王位に就かざるに非ざるも、寧ろ臣位に在つて王を輔佐するをいふ、吾人の權根鈍くして容易に佛果に達せざるも、修行の間には頓に成佛することあらんも、寧ろ菩薩位に在つて衆生を濟度するをいふ、偏中正に近し。
- ⑤草榻。榻は「かりぎぬ」と訓す、床のこと。
- ⑥衣襟。襟は「かりぎぬ」と訓す、衣襟は着物のこと。
- ⑦三秋の思。待ち遠くして暫時の間も長く感ずること。
- ⑧化生。化生王子のこと、王宮に生れたる王子なれども、全く臣位に在つて衆生濟度の化他門に在るをいふ、吾人が一度回光返照すれば、佛果位に達せらるるも、全く佛たらんとせずして唯だ衆生を教化するをいふ、正中偏に近し。
- ⑨當陽。分明の義、又は當面、又は當體などの意に用ふ。
- ⑩内生。内生王子のこと、生れながら天子にして若宮のこと、誕生王子と異なる所は誕生王子は太子の位にあるも、内生王子は生れながら王位にあるをいふ、吾人本來生れな

す。一身の冬夏衣襟無し、澄凝として愁看る。三秋の思。清苦して名を高うす上哲の圖。業就つて巍科極志に酬ゆ。比來臣相途に當らず。

化生

傍帝化を分つて傳持を爲し、萬里の山河政威を布く。紅影の日輪下界に凝り、碧油風冷し暑炎の時。高低豈に尊卑の奉を廢せんや。五袴途を蘇め遠近知る。妙印手に持して煙塞靜なり。當陽那ぞ肯て織機を露さん。

内生

九重、深密にして復た何をか宣べん。弊を掛けて絲ひ來つて妙傳を顯す。祇一人天地の貴きに奉じ、從他あれ諸道自ら權を分つことを。紫羅帳合して君臣隔り、黃閣簾垂れて禁制全し。汝方に隅官屬の戀ふるが爲に、遂に黃葉止啼の錢を將てす。

眞讚

這箇の影像を以て、洞山の主人と爲さば、たゞに紙と墨とを見る。是れ山中の人にあらず。

- ①から佛たるをいふ、兼中別に近し。
- ②九重。支那にて天子の位を九天に喻ふるより、禁中の別稱。
- ③紫羅帳。紫色のうすぎぬのこと。
- ④黃閣。黃門に同じ、禁門は黃閣なり、故にいふ。
- ⑤黃葉止啼錢。涅槃經嬰兒乳品にある喩、幼兒の時くを見て此は錢なりと云へば、幼兒は眞の錢なりと思ひて啼を止む、方便說法の義に喩ふ。
- ⑥眞讚。眞影を讚美する語。

附載

自誠

名利を求めず、榮を求めず。只麼に縁に隨つて此の生を度る。三寸氣消せば誰か是れ主。百年身後謾に虛名。衣裳破れて後重々に補ひ、根食無き時、旋旋に營む。一個の幻軀能く幾日ぞ。他の間事の爲に無明を長せんや。

規誠

夫れ沙門。釋子は、高上を宗と爲す。既に攀縁を絶す、宜しく淡薄に従ふべし。父母の恩愛を割き、君臣の禮儀を捨て、髮を剃り衣を染め、巾を持し鉢を捧げ、出塵の徑路を履みて、入聖の階梯に登り、潔白なること霜の如く、清淨なること雪の若し。龍神欽敬し、鬼魅歸降す。心を專にして意を用ひ、佛の深恩に報じ、父母の生身、方に利益に當はん。豈に門徒を結託し、朋友に追隨し、筆硯を事持し、文章を馳騁し、區區たる名利、

- ①附載。附録と同じ。
- ②自誠。洞山自ら誠むる辭。
- ③名利。名聞利養の略。
- ④榮。榮達の略。
- ⑤三寸。舌のこと。
- ⑥消。消盡の意。
- ⑦旋々。廻轉往復の貌。
- ⑧間事。むだごとの意。
- ⑨無明。明に對す、煩惱妄想のこと、蓋し吾人の煩惱妄想は般若の智慧を昧まし、眞理を明らむること能はざらしむるが故に無明といふなり。
- ⑩規誠。訓誡の辭なり。
- ⑪釋子。釋氏といふに同じ、蓋し佛は釋迦種族、佛の法中に入れば、佛の族人なるが故に

役役たる趨塵、戒律を思はず、威儀を破卻し、一生の容易を取り、萬劫の艱辛と爲すことを許さんや。若し教つて斯の如くんば、徒らに釋子と稱するならん。

北堂を辭する書

伏して聞く、諸佛の出世、皆父母に従つて身を受く、萬彙の興生、盡く天地を假りて覆載す。故に父母に非ざれば生せず、天地無くんば長せず。盡く養育の恩に沾ひ、俱に覆載の徳を受く。嗟夫れ一切の含識萬象の形儀は、皆無常に屬す、未だ生滅を離れず。則ち乳哺の情至り、養育の恩深しと雖も、若し世路を把つて供養せば、終に報答し難し。血食を作つて侍養せば、安んぞ久長を得ん。故に孝經に云く、「日日三牲の養を用ふと雖も、猶ほ孝にあらざるなり。」相牽いて沈没し、永く輪廻に入る。罔極の深恩に報いんと欲せば、出家の功德に若くはなし。生死の愛河を截り、煩惱の苦海を越ゆれば、千生の父母に報じ、萬劫の慈親に答ふ。三有四恩報せずといふこと無し。故に經に云く、「一子出家すれば九族天生す」と。良价、今世の身命を捨て、誓つて家に還らず、永劫の根塵を將て

- 佛弟子は釋を以て姓となす。
- ⑦淡泊。薄は泊と同じ、淡泊は恬靜無爲の貌。
- ⑧巾、鉢。巾は手巾、鉢は鉢盂、共に僧十八種物の一なり。
- ⑨北堂。北堂は母の在す處なり、故に母のことを北堂といふ。
- ⑩萬彙。萬彙の品彙。
- ⑪含識。又は含靈ともいひ、有情のこと、即ち一切の生物界悉くを指す。
- ⑫世路。世間普通の送りもの。
- ⑬三牲。牛と羊と猪となり。
- ⑭沈没。苦界(六趣四生)に沈没するを云ふ。
- ⑮輪廻。六趣四生の間に出生入死して窮まりなきこと、宛も車輪の廻轉して窮りなきが如きに喩へていふ。
- ⑯罔極。罔は「なし」と訓ず、無極と同じ。
- ⑰三有、四恩。前註を見よ。

頓に般若を明む。伏して惟れば父母、心喜捨を開いて、意攀緣すること莫れ。淨飯の國王を學び、摩耶の聖后に効へ。他時異日、佛會に相逢はん、此の日今時且つ相離別す。良に遠に甘旨に違するに非ず、蓋し時、人を待たず、故に云ふ、「此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの時に向つてか此の身を度せん」と。伏して冀はくは、尊懷相寄憶すること莫れ。頌、二首

未だ心源を了せず數春を度る。翻つて嗟す浮世謾に。逸巡すること。幾人か道を得空門の裏、獨り我れ淹留して世塵にあり。謹んで尺書を具へて眷愛を辭す。愿はくは大法を明めて慈親に報せん。涙を洒いで頻に相憶ふことを須ひされ。譬へば當初我が身無きに似よ。

巖下の白雲、常に伴を作し、峯前の碧障以て鄰を爲す。干むることを免る世上の名と利と、永く別る人間の愛と憎と。祖意は直に言下をして曉さしむ。玄微は須らく句中の眞に透るべし。合門の親戚相見んと要せば、直に當來證果の因を待つべし。

後に北堂に寄する書

良价、甘旨を離れしより、杖錫、南に遊び、星霜已に十秋を換ふ、岐路俄に萬里を經たり。伏して

①九族。高祖父、曾祖父、祖父、父母、己、子、孫、曾孫、玄孫是れなり。

②般若。梵語、智慧と譯す、世間の智慧に擇んで、法界の事理を照らし、一切の眞理に通達する聖智をいふ、又佛法のことをもいふ。

③淨飯。釋尊の父。

④摩耶。釋尊の母。

⑤逸巡。行いて進まざる貌。

⑥淹留。久しく留ること。

⑦尺書。極めて簡單な手紙。

⑧祖意。教意に對す、祖師意の時、祖師とは多く達磨を指す、今は達磨西來の意旨をいふ。

惟みれば、娘子、心を收め道を慕ひ、意を攝して空に歸し、離別の情を懐くことを休めよ、倚門の望を作すこと莫れ。家中の家事、但だ且く時に隨ふ、轉たあれば轉た多く、日に煩惱を増す。阿兄は勤めて孝順を行じ、須らく氷裏の魚を求むべし。小弟は力を竭して奉承し、亦霜中の筍に泣くべし。夫れ人の世上に居る、己を修し孝を行すれば、以て天に合ひ、僧は空門に在つて、道を慕ひ禪に參じ、而して慈德に報ゆ。今則ち千山萬水香

かに二途を隔つ、一紙八行、聊か意を伸ぶ。頌、名利を求めず。儒を求めず。空門を。愿樂して俗徒を捨つ。煩惱盡くる時愁火滅し、恩情を斷する處愛河枯る。六根の戒定香風引き、一念の無生慧力扶く。爲に北堂に報す悵望することを休め、譬へば死了するが如く譬へば無きが如くせよと。

嬢の回書を附す

吾と汝と夙に因縁有り、始めて母子恩愛の情分を結ぶ。懷孕せしより神佛を祈り、願はくは男子を生せんと。胞胎月満ちて、性命絲の如くに懸る。愿心を遂ぐることを得て珠寶を惜むが如し。糞穢だも臭惡を嫌はず、乳哺だも辛勤に倦まず、稍人と成りしより、遂に習學せしむ。或は

①娘子。母のことを指していふ。

②倚門の望。戰國策に出づ、王孫賈の母の故事なり、王孫賈の母曰く、「汝、朝に出でて晩に来る時は、吾れ門に倚つて望む、汝暮に出でて、還らざる時は、吾れ閭に倚りて望む云々」と。

③阿兄。阿は助字。

④氷裏の魚。晋の王祥は至孝、繼母朱氏、寒天に魚を欲す、祥衣を解いて氷を剖いて魚を求めんとす、氷忽ち自ら解けて雙鯉躍り出づ。

⑤霜中の筍。晋の孟宗の後母、冬月笋を求む、宗竹林中に入

暫くも時を逾えて歸らざれば、便ち倚門の望を作す。來書に堅く出家を要すといふ。父亡じ母は老い、兄は薄く弟は寒く、吾何れにか依頼せん。子は娘を抛つての意有り、娘は子を捨つるの心無し。一たび汝が他方に往きしより、日夜常に悲涙を洒ぐ。苦なる哉、苦なる哉、今既に誓つて郷に還らず。即ち汝が志に従ふを得ん。敢て汝が王祥が氷に臥し、丁蘭が木を刻みしが如きことを望むにあらず、但願はくは汝目連尊者の如く我を度し、下、沈淪を脱し、上、佛果に登らんことを。如し其れ然らずんば、幽譴の在る有らん、切に宜しく體悉すべし。

つて泣き、箒之れがために生ず。
⑦ 儒。優しく柔かなることを本義とす、轉じて孔子の教學を奉ずる學者又は其の教學、或は廣く學者の總稱に用ふ。
⑧ 惡樂。惡は譴なり、敬なり、惡、樂共に「れがふ」と訓ず。
⑨ 六根。眼耳鼻舌身意。
⑩ 丁蘭。丁蘭、母に事へて孝なり、母逝いて、木を刻みて母

となして之に事へたり。
⑪ 目連尊者。目連の母、地獄に墮して苦しむ、佛に従つて、施餓鬼法會を修して、母の苦を拔濟す。
⑫ 幽譴。幽は深、遠、隱等の義を兼ね、譴は責なり、惡なり、冥罰といふほどの意。
⑬ 體悉。悉は悉知、體は體得と熟語する字にて、自己の身心に徹して明了に會得する也。

洞山悟本禪師語錄之餘

① 屬者、予。山陰に遊び、書を得て之を讀むに、皆祖語なり、問予の未だ嘗て探らざるもの有り、片玉なりと雖も、崑岡に出づるが故に後に附す。

日本沙門 宜默玄契 校勘

師、雲巖に問ふ、「和尚の眞を寫さんと擬す、得てんや也た無や。」巖云く、「幾くか成ずることを得る。」師曰く、「尋常に眞を寫すこと七八を得。」巖云く、「猶ほ是れ失することあり。」師曰く、「失せざる時如何。」巖云く、「直に十成なることを得。」師曰く、「古人道ふ、直に十成を得るも似すといふ時如何。」巖云く、「他に成數なし。」
雲巖、師と共に荒地を鋤く次、先徳の事に就いて師問ふ、「此の人、什處の處にか去る。」巖、良久して云く、「作麼、作麼。」師曰く、「太遲生也。」
師、雲巖に問ふ、「未だ陰界に有らざる時、還つて道ひ得てんや否や。」

① 餘。「あまり」と訓じ、「残り」のこと、古來編輯されし洞山語錄の殘餘の意なり。
② 屬者。近時の義。
③ 山陰。山陰道のこと。
④ 祖語。洞山大師の語なる意。
⑤ 崑岡の片玉。崑岡は崑崙山をいふ、事文類聚に曰く、「天下第一とす、猶ほ桂林の一枝、崑山の片玉のごとし」とあり、今の意推して知るべし。

巖云く、「爾今還つて有りや否や。」
雪峰、柴を般ぶ次、乃ち師の面前に于て一束を抛下す。師曰く、「重きこと多少ぞ。」峯云く、「盡大地の人提不起。」師曰く、「争か這裏に到ることを得。」峯、無語。

壽山解禪師行脚の時、師の法席に造る。師曰く、「閩黎の生縁何れの處ぞ。」云く、「和尚若し實に問はゞ某甲は即ち是れ閩中の人。」師曰く、「爾が父の名は何ぞ。」云く、「今日、和尚の此の一間を致すことを蒙つて、直に得たり忘前失後なることを。」

師、僧を勸して曰く、「心法雙び忘すれば性即ち真なり、第幾座ぞ。」
僧云く、「第二座。」師曰く、「什麼に因つてか他の第一座を與へざる。」無對。
一人有り、代つて云く、「心に非ず、法に非ず。」師曰く、「心法雙び忘すれば即ち是れ非法。何ぞ更に是の如く道ふや。」無對。師自ら代つて曰く、「眞に座を得ず。」

衆に示して曰く、「有ることを知る底の人は地獄に入ることを知す、有ることを知らざる底の人は門外に走過す。」

①校勸。しらかんがふること。
②十成。十分成就の意。
③太運生也。生は助字なり、太は「はなはだ」と訓す、おそいおそいといふ程の意。
④陰界。陰は色、受想行識の五陰、界は六根、六境、六識の十八界。五陰は吾人色身の總稱、之れより開展したるものが界なり。
⑤壽山解禪師。福州壽山師解禪師、大安禪師に嗣法す。
⑥閩中。閩とは東越の別名、今の福建省の古稱なり。
⑦勸。勸辨と熟語し、しらかあきらかにすること。

師、新羅の僧に問ふ、「未だ海を過ぎらざる時、什麼の處にか在る。」無對。自ら代つて曰く、「祇今海を過ぎる、也た什麼の處にか在る。」

師曰く、「今時の學者、學を得んと欲せば、直に須らく佛向上の人を體取して始めて得べし。如今の學者只だ十方諸佛あることを知つて、十方諸佛出身の處有ることを知らず、空しく佛有ることを知つて成佛を得ず。」

師、僧に問ふ、「三人同行して一人は語を解し、一人は語を解せず、那箇の一人は是れ什麼ぞ。」對へて云く、「此れ豈に是れ主客を辨得せざらんや。」師曰く、「是なり。」云く、「如何が是れ客。」師曰く、「語と不語と俱に是れ客。」又曰く、「人の珠を弄することを解するが如き、手に觸れず地に落ちず、即今、往來底、喚んで什麼と作してか即ち得ん。」無對。師自ら代つて曰く、「不得不得。」

師、上座來つて師を禮拜するを見て曰く、「來つて什麼をか作す。」云く、「和尚の爲に來らす。」師曰く、「若し尊者を禮せば、某甲は則ち偏に坐せん。」
愼微長老、手に拄杖を把る、一僧指して云く、「這箇の拄杖、何れの處よりか出づ。」微云く、「雪地より出づ。」師肯はず、自ら代つて曰く、「如今出づ、也た人の辨得する有りや。」

①佛向上の人。佛向上事を體得したる人の意、即ち本分の衲僧をいふ。
②體取。體得に同じ、身心に徹して會得領悟するをいふ。
③尊者。梵に阿利耶といひ、尊者又は聖と譯す、尊ぶべき人の意にて、智徳ある人に附する敬稱なり。
④拄杖。僧の携ふる杖のこと、衲僧之を携ふる所以は行脚の

① 黃檗、② 鹽官より三百衆を領して南泉に到る、毎に三百人の爲に説法する次、南泉便ち説法の處に到つて云く、「此の道場を借つて還つて一間を許さんや否や。」衆云く、「便ち請ふ。」泉問ふ、「③ 定慧等しく學び、明かに佛性を見るも此の理如何。」衆云く、「十二時中一物に依倚せず。」泉云く、「是れ長老の見處なること莫しや。」衆云く、「不敢。」泉云く、「④ 齋水錢は即ち且く置く、⑤ 草鞋錢什麼人をしてか還さしむ。」僧有り、師に舉似す、師曰く、「責狀し了つて棒を喫せしめよ。」

師、僧に問ふ、「爾の名は何ぞ。」僧云く、「請ふ和尚安名せよ。」師卻つて良价と稱す。僧無對。雲居、代つて云く、「恁麼ならば則ち出頭の處無し。」又云く、「恁麼ならば則ち總に和尚に占卻せらる。」
延慶の⑥ 端禪師に人有り問ふ、「蚯蚓斬つて兩段と爲す、兩頭俱に動く、佛性阿那頭にか在る。」慶、兩手を展ぶ、師別して曰く、「即今問ふ底阿那頭にか在る。」
師、田畔に到る、⑦ 師僧有りて挿田す、一僧有りて倒挿す。師問ふ、「閣黎什麼に因つてか倒挿す。」對へて云く、「心中活することあり。」師、言はず

時、危に乘じ險を渉るに力を扶くるがためなり。

① 黃檗、支那黃檗山希運禪師、百丈懷海に嗣法す。

② 鹽官、支那洪州鎮國海昌院齊安禪師、馬祖道一に嗣法す。

③ 定慧等學、明見佛性、涅槃經の文なり。

④ 齋水錢、道元禪師は、「こんずのあたひ」といへり、或は「おちらし」なりと云ふ説もあれど、つまりは飯料のことなり。

⑤ 草鞋錢、行脚して參師問法するために、草鞋を買ふ金の意にて、俗に云ふ「わらぢ錢」なり。

⑥ 端禪師、支那襄州延慶山法端禪師、鴻山靈祐に嗣法す。

⑦ 阿那頭、阿那箇頭ともいふ、何處の義、即ち「ドチラ」といふこと。

⑧ 師僧、この師の字有る所以評ならず。
⑨ 日先出、一本に「自先出」に作る、是なり。
⑩ 鄧州、河南省新蔡縣。
⑪ 刮骨の禪、刮骨は換骨と義稍同じ。
⑫ 紙燃、かんぜよりのこと、「紙燃無油」は「縁に對せずして照し、物に觸れずして知る」と同意。
⑬ 癩切、癩は古の隱字なり、隱は痛なり。
⑭ 鼻、鼻に同じ、惡氣なり。
⑮ 法嗣、法統を嗣續せる弟子の意、師の印可を受けて傳法せるものをいふ。
⑯ 檀語、語録のこと。
⑰ 傳法正宗記、佛日契高の著、嘉祐七年を以て成る、全部九卷。
⑱ 大鑿、曹溪山慧能禪師。

して院に歸る、翌日、衆僧普請して出づる次、① 日先づ出で、昨日倒に挿田するの僧の出で來るを候問す、其の僧末後に門を出づ。師問ふ、「閣黎、昨日東園に竹を斫るは誰ぞ。」其の僧測ること罔くして云ふ、「知らず」と。師曰く、「閣黎何れの處の人ぞ。」云く、「② 鄧州の人。」師曰く、「老僧行脚の時、曾て往過し來る。」

僧、師に問うて云く、「承る、和尚刮骨の禪を説くと、請ふ、和尚四方八面に刮れ。」師曰く、「刮處勿し。」云く、「和尚幸に是れ好手、什麼としてか刮不得。」師曰く、「爾還つて道ふことを聞かや、世醫手を拱くと。」問ふ、「如何なるか是れ善知識の眼。」師曰く、「③ 昏然油無し。」問ふ、「十二時中何を將つてか奉獻せん。」師曰く、「無物。」問ふ、「身命 意切の處如何。」師曰く、「雜種すること莫れ。」云く、「何を將つてか奉獻せん。」師曰く、「虚空を將つて奉獻せよ。」云く、「虚空と非空と將ち來るに相似せず。」師曰く、「相似と道ふも也た得たり、不相似と道ふも也た得たり。」云く、「如何が是れ相似。」師曰く、「目前。」云く、「如何なるか是れ不相似。」師曰く、「目前不是。」問ふ、「本に返り源に還る時如何。」師曰く、「一片の雪の如し、天より降下するは絲髮の大きさの如く、物掛著する

時は則ち地に到らず。問ふ、「暫時も在らざれば死人に如同すと、如何。師曰く、「好し埋卻するに。」又曰く、「鼻なり。」又曰く、「命絶す。」

師の法嗣、其の史傳に出づる者二十七人、其の機語有る者十有九人。傳法正宗記に曰く、「大鑑の六世、筠州洞山の良价禪師といふ。其の出す處の法嗣凡そ二十六人。一は雲居の道膺と曰ふ者（教して弘覺禪師と諡す、塔を圓寂と曰ふ、洞山の上足なり）。一は撫州の本寂と曰ふ者（教して元證禪師と諡す、塔を福圓と曰ふ）。一は洞山道全と曰ふ者（第二世中洞山）。一は龍牙の居通と曰ふ者。一は京兆の休靜と曰ふ者。教して實智大師、無爲の塔と諡す、華嚴寺に住す）。一は京兆の觀子和尙と曰ふ者。一は筠州の普滿と曰ふ者。一は台州の道幽と曰ふ者。一は洞山の師虔と曰ふ者（第三世、後洞山青林和尙と號す）。一は洛京の通儒と曰ふ者。一は越州の乾峯和尙と曰ふ者。一は吉州の禾山和尙と曰ふ者。一は天童の咸啓と曰ふ者（先に蘇州寶華山に住す）。一は潭州の寶益山和尙と曰ふ者。一は益州の通禪師と曰ふ者（北院に住し、教して證真大師と諡す）。一は高安白水の本仁と曰ふ者。一は撫州疎山の光仁と曰ふ者。一は澧州欽山の文遠と曰ふ者。一は天童の義禪師と曰ふ者。一は太原の方禪師と曰ふ者。一は新羅の金藏和尙と曰ふ者。一は益州の白禪師と曰ふ者。一は潭州の文殊和尙と曰ふ者。一は舒州の白和尙と曰ふ者。一は邵州の西湖和尙と曰ふ者。一は青陽の通玄和尙と曰ふ者」と。日本人瓦屋能光禪師も亦其の一なり。（師は本朝高僧傳に曰く、「海に航して唐に入り、洞山价禪師に參じて親し

く法印を承く」と）。

國譯洞山悟本禪師語錄 終

國譯洞山語錄の尾に書す

龍の物たる、其れ非常なるか。邪人能く觀るもの寡し。丹青以て畫き、人に告ぐるに龍を以てすれば、人其の龍たることを知る。信せざるものは未だ之れ有らざるなり。後眞龍を見て之に告ぐるに龍を以てすれば、人且つ怪む。今の世に方つて、孰れか法を説かざる。露々たる其の教、似たることは似たり、眞なるときは否なり。彼の畫龍の如く然り。惟り畫龍の雲を興し、霖を爲さざるのみに非ず。間朱を奪ひ、幾んど病を爲す。戲懼るべし。屬者、禪人宜默なる者あり、再び洞山の語要を編集し、來り以て予に告ぐ。予、燕香稽首、看讀すること一過、之に謂つて曰く、「近世支那の禪師瑞白雪公言へること有り、曰く、「洞山古刹は我等が祖基、傾頽已に久し瓦礫存せず。今幸に孤涯上座住持す。重ねて祖塔を新にせんと欲す。我輩は洞上の兒孫たり、烏んぞ坐視すべけんや」と。是に由つて之を觀れば、知んぬ、

- ①書。叙と殆んど同意。
- ②丹青。赤と青のことにして、繪の具にて彩色したる繪畫をいふ。
- ③霖々。驟しき貌。
- ④霖。三日以上降り續く雨をいふ。
- ⑤燕香。熱は燒なり、燒香に同じ。
- ⑥利。具には剎摩といふ梵語、塔、廟、寺宇、伽藍等と譯す。
- ⑦祖基。祖は始なり、今は祖師の意、基は「もとめ」と訓じ、根據、土臺の意。
- ⑧住持。住職といふに同じ、一寺に住して佛法を久住護持する意なり。
- ⑨棠蔭。棠は甘棠(コリンゴ)のこと、周の召伯の故事、祖先の居た處といふ義に用ふ。

重ねて棠蔭を彼の土に修することを。今や子に於ける亦祖録を我が國に資始す。宜なるかな、違ふ所を知れることを。吾が儕苟くも遠裔を辱うす。安んぞ喜躍せざらんや。工に命じて梓に録み以て其の傳を廣め、參學の者をして丹青の外寔に神龍あり、雲行き雨施すこと千古此の如きことを知らしむ。請ふ怪むこと莫れ。

- ①資始。たすけはじむること。
- ②儕。輩に同じ、同輩のこと。
- ③遠裔。裔は「あとつぎ」と訓す、子孫、末葉の義なり。
- ④元文己未。櫻町天皇元文四年に當る。
- ⑤鷹峯。山城國愛宕郡にあり。
- ⑥源光。寺名、洞山の住せし寺なり。
- ⑦叟。「おきな」と訓じ、老人の稱。
- ⑧和南。梵語、稽首、禮拜、敬禮と譯す。

元文己未三月の八日

鷹峯源光主人 覺城 叟請詢 和南拜譯

洞山悟本大師語錄序

從上宗乘爲物垂言一如搗塗毒鼓聞者皆喪絕後乃重甦無舌而解語湖南正脈青石濫觴五傳迄乎新豐一瀉千里百谷朝宗法性波瀾渺無涯涘矧夫文章富贍家法縝密高懸寶鏡善赴來機自非入室神足阿誰敢窺影鞭門外遊人逡巡退縮歐峯奔逸絕塵荷玉步趨繼踵以至二八賢詰執轡並馳駸駸乎其壯矣哉其片言隻字崑壁南金雖多載陳編未見有全錄僉曰祖庭闕典莫同心不浩歎宜默禪人爲之慷慨髮指纂錄惟懋采摭殆盡乃釐作壹局昔者湛然澄禪師得山林居士等涉獵叢書鈔錄玄沙語味際天浴日之海鹹於一滴以慰禪者之渴心今也宜默倣其故事者乎可謂勤矣若夫一家雲仍因標見月得意忘言箇箇臣奉君人人子就父則洞水逆流瀾漫乎四海被其沾丐者孰敢不隨喜因叙緒言弁諸卷端

元文之戊午百鐘吉旦

住林泉沙門元趾稽首拜題

重集洞山悟本大師語要自序

吾大雄氏之於心印淵淵浩浩於戲大哉在昔此教也發機靈山達乎少林燈燈繼明奕葉纓綬以及乎我然年世寢遠其勢也不能無同異而已矣最其昭昭莫若靈山靈山以還莫若少林少林以還莫若曹溪曹溪一脈流為兩派湮流之大沛然其波瀾狂矣方此時也障而東之者是乃出乎濟上洞上之二家二家各有其所存者師師幾語相與嚶其垂誨於千載之下雖然其語縝密其機高尚譬之郢中之歌其曲彌高其聲彌奇所謂國中屬而和者不過數人而已所以如洞山語錄其傳絕矣其語雖存浮沈春池與礫相混其故何也杜撰之輩妄以凡情改易古語也最其甚者如觀察使之語皆改易如渠今正是我我今不是渠之語有更正是作不是者或有改不是作正是者是以不能其脈不斷絕者乎又如也勝前朝斷舌才之句易前作知則其義不了者乎是以雖居士無盡未嘗無不解本據之問也大凡類此予以為居今之世志古之道孟浪猶然况後昆哉於是焉溫尋古本竊竊乎校讎同異纂集成矣人或謂予曰祖佛言教似生冤家始有參學分此是弗洞山大師語耶曰唯然有之曰奚為非耶予曰將謂無祖佛况亦言教哉或聞予言芒乎無對予曰已乎已乎苟有不者此語之於編修今也區區其可再乎

是歲戊午仲春十五日

日本國沙門

玄契涉筆于歌浦瑞龍精舍

洞山悟本禪師語錄

參學沙門 玄契 編次

師供養雲巖真次僧問先師道祇這是莫便是否師曰是云意旨如何師曰當時幾錯會先師意云未審先師還知有也無師曰若不知有爭解恁麼道長慶云既知有又云養子方知父慈。

雲巖諱日師營齋僧問和尚於雲巖處得何指示師曰雖在彼中不蒙指示云既不蒙指示又用設齋作甚麼師曰爭敢違背他云和尚初見南泉為甚麼卻與雲巖設齋師曰我不重先師道德亦不為佛法祇重他不為我說破僧云和尚為先師設齋還肯先師也無師曰半肯半不肯云為甚麼不全肯師曰若全肯即孤負先師也問欲見和尚本來師如何得見師曰年牙相似即無阻矣僧擬進語師曰不躡前蹤別請一問僧無對雲居代云恁麼則不見和尚本來師也人恁麼道問家又向這裏覓甚麼。

上堂曰還有不報四恩三有者麼衆無對又曰若不體此意何超始終之患直須心心不觸物步步無處所常無間斷始得相應直須努力莫閒過日僧問寒暑到來如何回避師曰何不向無寒暑處去云如何是無寒暑處師曰寒時寒殺閻黎熱時熱殺閻黎

上堂曰祖教佛教似生冤家始有參學分若透祖佛不得即被祖佛謾去

上堂曰坐斷主人公不落第二見北院出衆云須知有一人不合伴師曰猶是第二見院便掀倒禪牀師曰老兄作麼生院云待某甲舌頭爛卽向和尚道早參疎山仁出問未有之言請師示誨師曰不諾無人肯疎云還可功也無師曰爾卽今還功得麼疎云功不得卽無諱處

上堂曰欲知此事直須如枯木生花方與他合疎山問一切處不乖時如何師曰闍黎此是功勳邊事幸有無功之功子何不問云無功之功豈不是那邊人師曰大有人笑子恁麼問云恁麼則迢然去也師曰迢然非迢然云如何是迢然師曰喚作那邊人卽不得云如何是非迢然師曰無辨處

夜參不點燈有僧出問話退後師令侍者點燈乃召適來問話僧出來其僧近前師曰將取三兩粉來與這箇上座其僧拂袖而退自此省發遂罄捨衣資設齋得三年後辭師曰善爲時雪峯侍立問云祇如這僧辭去幾時卻來師云他祇知一去不解再來其僧歸堂就衣鉢下坐化雪峯上報師曰雖然如此猶較老僧三生在

上堂曰有一人在千人萬人中不背一人不向一人爾道此人具何面目雲居出云某甲參堂去

師示衆曰體得佛向上事方有些子語話分僧便問如何是語話師曰語話時闍黎不聞云和尚還聞否師曰待我不語話時卽聞僧問如何是正問正答師曰不從口裏道云若有人問師還答否師曰也未曾問問如何是從門入者非寶師曰便好休問和尚出世幾人肯師曰竝無

一人肯云爲甚麼竝無一人肯師曰爲箇箇氣字如王

上堂曰道無心合人人無心合道欲識箇中意一老一不老後僧問曹山如何是一老山云枯木僧又云三從六義又曰此事直須妙會事在其妙體在妙處

解夏上堂曰秋初夏末兄弟或東或西直須向萬里無寸草處去良久曰祇如萬里無寸草處作麼生去顧視左右曰欲知此事直須如枯木花開方與他合有僧到石霜霜問和尚有何言句示徒僧舉前語霜云有人下語否云無霜云何不道出門便是草僧回舉似師師曰此是一千五百人善知識語別云大唐國內能有幾人

上堂曰向時作麼生奉時作麼生功時作麼生共功時作麼生功功時作麼生僧問如何是向師曰喫飯時作麼生云如何是奉師曰背時作麼生云如何是功師曰放下饅頭時作麼生云如何是共功師曰不得色云如何是功功師曰不共

師謂衆曰擬心是犯戒得味是破齋曹山曰如今人如佛味和味盡爲滯著又曰擬心蚤差況復有言耶示衆曰知有佛向上人方有語話分時有僧問如何是佛向上人師曰非佛保福別云佛非雲門云名不得狀不得所以言非法眼又曰塵中不染丈夫兒雲門云拄杖但喚作拄杖一切但喚作一切

問如何是玄中又玄師曰如死人舌問如何是毘盧師法身主師曰禾莖粟幹問三身之中阿那身不墮衆數師曰吾常於此切僧問曹山先師道吾常於此切意作麼生山云要頭便師洗鉢次見兩鳥爭蝦蟆有僧便問這箇因甚麼到恁麼地師曰祇爲闍黎會下有老宿去雲巖回師問汝去雲巖作麼生宿云不會師代曰堆堆地又老宿拈袈裟角問

云父母未生時還有這箇麼師曰只今豈是有耶宿搖手師因看稻田次朗上座牽牛師曰這箇牛須好看恐喫稻去朗云若是好牛應不喫稻師問講維摩經僧曰不可以智知不可以識識喚作甚麼語云讚法身語師曰喚作法身早是讚也

示衆曰一大藏教只是箇之字

垂語曰直道本來無一物猶未消得他鉢袋子僧便問時時勤拂拭爲甚麼不得佗衣鉢未審甚麼人合得師曰不入門者云只如不入門者還得也無師曰雖然如此不得不與佗

垂語曰直道本來無一物猶未消得他衣鉢這裏合下得一轉語且道下得什麼語有一上座下語九十六轉不愜師意末後一轉始愜師意師曰闍黎何不早恁麼道別有一僧密聽祇不聞末後一轉遂請益上座上座不肯說如是三年執侍巾餅終不爲舉上座因有疾其僧曰某甲三年請舉前話不蒙慈悲善取不得惡取去遂持刀向之曰若不爲某甲舉即便殺上座也上座悚然曰闍黎且待我爲汝舉乃曰直饒將來亦無處著其僧禮謝

師因普請次巡察去見一僧不赴普請師問爾何不去僧云某甲不安師曰爾尋常健時何曾去來

師問僧甚處來僧云遊山來師曰還到頂麼云到師曰頂上有人麼云無人師曰恁麼則不到頂也云若不到頂爭知無人師曰我從來疑著這漢

冬節與秦首座喫果子次乃問有一物上拄天下拄地黑似漆常在動用中動用中收不得且

道過在甚麼處秦云過在動用中同安顯別師喚侍者撥退果卓

僧問卽今往來底喚作甚麼則得師曰不得不得有一僧在延壽堂不安要見師師遂往僧云和尚何不救取人家男女師曰爾是甚麼人家男女云某甲大鬧提人家男女師良久僧云四山相逼時如何師曰老僧日前也向人家屋簷下過來云回互不回互師曰不回互云教某甲向甚處去師曰粟畝裏去僧噓一聲云珍重便坐脫師以拄杖敲頭三下曰汝祇解與麼去不解與麼來

師看病僧云火風離散時如何師曰來時無一物去亦任從伊云爭奈羸瘵何師曰須知有不病者云如何是不病者師曰悟則無分寸不悟則隔山坡云前程還許卜度也無師曰雖然黑似漆成立在今時京兆七師令僧問師云那箇究竟作麼生師曰卻須問他始得

蟾首座問師佛真法身猶若虛空應物現形如水中月作麼生說箇應底道理師曰如驢馱井座云是則是只道得八成師曰首座作麼生座云如井觀驢

有庵主不安凡見僧便云相救相救多下語不契師乃去訪之主亦云相救師曰甚麼相救主云莫是藥山之孫雲巖嫡子麼師曰不敢主合掌云大家相送便遷化僧問師云亡僧遷化向甚麼處去師曰火後一莖茆

師示衆曰我有三路接人鳥道玄路展手僧問師尋常教學人行鳥道未審如何是鳥道師曰不逢一人云如何行師曰直須足下無私去云祇如行鳥道莫便是本來面目否師曰闍黎因甚顛倒云甚麼處是學人顛倒師曰若不顛倒因甚麼卻認奴作郎云如何是本來面目師曰

不行鳥道。

師問僧去什麼處來僧云製鞋來師曰自解依他僧云依他師曰他還指教汝也無僧曰允即不違。

師見幽上座來遽起向禪牀後立幽云和尚為甚麼回避學人師曰將謂闍黎不見老僧。

僧問茶莫如何是沙門行莫云行則不無有覺即乖別有僧舉似師師曰他何不道未審是甚。

麼行僧遂進此語莫云佛行佛行僧回舉似師師曰幽州猶似可最苦是新羅東譯齊拈云此

若有且道甚麼處不得若無他又道最苦是新羅還點檢出麼他道行則不無有覺即乖卻令再問是甚麼行又道佛行那僧是會了問不會了問請斷看。

僧卻問如何是沙門行師曰頭長三尺頸長二寸乃師令侍者持此語問三聖然和尚聖於侍

者手上招一招者回舉似師師肯之。

師問僧甚處來云三祖塔頭來師曰既從祖師處來又要見老僧作甚麼云祖師即別學人與

和尚不別老僧欲見闍黎本來師還得否云亦須待和尚自出頭來始得師曰老僧適來暫時

不在僧問如何是空劫已前自己師曰白鳥入蘆花官人問有人修行否師曰待公作男子即

修行僧問承古有言相逢不擊出舉意便知有時如何師乃合掌頂戴。

師問僧世間何物最苦僧云地獄最苦師曰不然云師意如何師曰在此衣線下不明大事是

名最苦。

師問僧名什麼僧曰某甲師曰阿那箇是闍黎主人公僧云見祇對次師曰苦哉苦哉今時人

例皆如此只是認得驢前馬後底將為自己佛法平沈此之是也賓中主尚未分如何辨得主

中主僧便問如何是主中主師曰闍黎自道取云某甲道得即是賓中主雲居代云某甲道得不是賓中主如

何是主中主師曰恁麼道即易相續大難師遂示頌曰嗟見今時學道流千千萬萬認門頭恰

似入京朝聖主祇到潼關便即休。

師因僧問如何是青山白雲父師曰不森森者是云如何是白雲青山兒師曰不辨東西者是

云如何是白雲終日倚師曰去離不得云如何是青山總不知師曰不顧視者是乃頌曰青山

白雲父白雲青山兒白雲終日倚青山總不知問清河彼岸是甚麼草師曰是不萌之草問如

何是西來意師曰大似駭雞犀問蛇吞蝦蟆救則是不救則不救則雙目不睹不救則形

影不彰。

有僧辭大慈慈曰去什麼處僧云暫去江西慈曰我勞汝一段事得否僧云和尚有什麼事慈

曰將取老僧去僧云更有過於和尚者亦不能將得去慈便休其僧後舉似師師曰闍黎爭合

恁麼道僧云和尚作麼生師曰得法眼別云和尚者去某甲提童子師又問其僧大慈別有什麼言句僧云有

時示衆云說得一丈不如行取一尺說得一尺不如行取一寸師曰我不恁麼道僧云作麼生

師曰說取行不得底行取說不得底雲居云行時無說路說時無行路不說不行時合行什麼路樂普云行說俱不到即本在

舉藥山問僧甚處來云湖南來山曰洞庭湖水滿也未云未山曰許多時雨水為甚麼未滿僧

無語師代曰甚麼劫中曾增減來。

師舉示衆曰藥山與雲巖先師遊山腰間刀響巖間甚麼物作聲山抽刀幕口作斫勢師曰看

他藥山橫身為這箇事今時人欲明向上事須體此意始得。

舉五洩默禪師到石頭處云一言相契即住不契即去頭據坐洩便行頭隨後召曰闍黎闍黎洩回首頭曰從生至死祇是這箇回首轉腦作麼洩忽然契悟乃拗折拄杖而棲止焉師曰當時不是五洩先師大難承當然雖如是猶涉途在

舉無著和尚因日晚遂問文殊云擬投一宿得否殊云爾有執心在不得此宿著云某甲無執心殊云爾受戒否著云受戒久矣殊云爾若無執心何用受戒著遂辭退均提童子送著出著云適來和尚道前三三後三三是多少童子召云大德著回首童子云是多少師曰欲觀其父先觀其子

舉文殊大士與無著喫茶次乃拈起玻璃盞問無著曰南方還有這箇否著云無文殊曰尋常將甚麼喫茶著無對師代展手曰有無且置借取這箇看得不

石霜因僧問咫尺之間爲甚不覩師顏霜曰我道徧界不曾藏僧後問雪峯徧界不曾藏意旨如何峯云什麼處不是石霜僧回舉似霜霜曰這老漢有什麼死急師聞曰笑殺土地

西園一日自開浴次僧問何不使沙彌園乃撫掌三下師曰一種是時節因緣就中西園精妙舉盤山寶積禪師上堂夫心月孤圓光吞萬象光非照境境亦非存光境俱亡復是何物師曰光境未亡復是何物

師示衆曰唯有佛菩提是真歸仗處復喝一喝曰猶有者箇去就在

郭隱峯在石頭頭刻草次峯在頭左側叉手而立頭飛刻子向峯前刻一株草峯云和尚祇刻得這箇不刻得那箇頭提起刻子峯接得便作刻草勢頭曰汝祇刻得那箇不解刻得這箇峯

無對師代曰還有堆阜麼

舉南泉問僧不思善不思惡思總不生時還我本來面目來僧云無容止可露師曰還會將示人麼陸亘大夫問南泉云弟子家中有一片石或時坐或時臥如今擬鑄作佛還得否泉曰得陸曰莫不得否泉曰不得師曰不坐即佛坐即非佛南泉問神山作什麼對云打羅泉曰手打腳打神山云請和尚道泉曰分明記取舉似作家師別曰無腳手者始解打羅

僧舉僧問章敬心法雙亡指歸何所敬曰郢人無汚徒勞運斤云請師不返之言敬曰即無返句之語問師師曰道即甚道罕遇作家

師示衆曰五洩先師一日沐浴焚香端坐告衆曰法身圓寂示有去來千聖同源萬靈歸一吾今灑散胡假興哀無自勞神須存正念若遵此命真報吾恩儼固違言非吾之子時有僧問和尚向甚麼處去洩曰無處去云某甲何不見洩曰非眼所覩師曰作家

師問石瀧曰几前一箇童子甚了事如今向甚麼處去也瀧云火焰上泊不得卻歸清涼世界去也

有人舉問一僧云鹽官會下有一主事僧忽見一鬼使來追僧告云某甲身爲主事未暇修行乞容七日得否使曰待爲白王若許即七日後來不然須臾便至言訖不見至七日後復來覓其僧了不可得若被覓著時如何抵擬他師代曰被他覓得也

江陵僧參大川亦曰大湖川問幾時發足江陵僧提起坐具川曰謝子遠來下去僧繞禪牀一匝便出川曰若不恁麼爭知眼目端的僧拈掌曰苦殺人幾錯判諸方老宿川曰甚得禪宗道理僧

舉似丹霞，霞曰：於大川法道，即得我這裏不然。云：未審此間作麼生。霞曰：猶較大川三步在。僧禮拜。霞曰：錯判諸方者多。師曰：不是丹霞，難分玉石。

雲居到參，師問甚處來。居曰：翠微來。師曰：翠微有何言句示徒。居云：翠微供養羅漢，某甲問供養羅漢，羅漢還來否。微曰：爾每日噫箇甚麼。師曰：實有此語否。云：有。師曰：不虛參見作家來。

師問雲居，汝名甚麼。云：道膺。師曰：向上更道。云：向上即不名道膺。師曰：與老僧在雲巖時，祇對無異也。

雲居問：如何是祖師意。師曰：闍黎他後有把茅蓋頭，忽有人問如何祇對。居云：道膺罪過。師謂雲居曰：吾聞思大和尚生倭國，作王是否。居云：若是思大佛，亦不作師。然之。

師問雲居，甚處去來。居云：蹋山來。師曰：那箇山堪住。居云：那箇山不堪住。師云：恁麼則國內總被闍黎占卻。居云：不然。師曰：恁麼則子得箇入路。居云：無路。師曰：若無路，爭得與老僧相見。居云：若有路，即與和尚隔山。山或作生。去也。師乃曰：此子已後千人萬人，把不住去在。

雲居隨師渡水次，師問水深多少。居云：不濕。師曰：麤人。居云：請師道。師曰：不乾。

師謂雲居曰：昔南泉問講彌勒，下生經僧曰：彌勒什麼時下生。云：見在天宮，當來下生。南泉曰：天上無彌勒，地下無彌勒。時居遂問師曰：只如天上無彌勒，地下無彌勒，未審誰與安字。師直得禪牀震動，乃曰：膺闍黎吾在雲巖，曾問老人，直得火爐震動，今日被子一問，直得通身汗流。雲居結庵于三峯，經日不赴堂。師問：子近日何不赴齋。居云：每日自有天神送供。師曰：我將謂汝是箇人，猶作這箇見解在。汝晚間來，居晚至，師召膺庵主，居應諾。師曰：不思善，不思惡，是甚

麼。居回菴，寂然宴坐，天神自此竟尋不見。如此三日，乃絕。

雲居合醬次，師問作什麼。居曰：合醬。師曰：用多少鹽。云：旋入。師曰：作何滋味。居云：得。

師問雲居，大闍提人殺父母，出佛身血，破和合僧，如是種種孝養何在。居云：始得孝養。

雲居作務次，悞刻殺蚯蚓。師曰：這箇孽。居云：他不死。師曰：二祖往鄴都，又作麼生。居無對。

師於扇上書佛字，雲居見卻書不字。師又改作非字，雪峯見乃一時除卻。

曹山來謁師，師問曰：闍黎名什麼。對曰：本寂。師曰：向上更道。曹云：不道。師曰：爲什麼不道。曹云：不名本寂，師深器之。

曹山行腳時，問烏石靈觀禪師，如何是毘盧師法身主。石曰：我若向爾道，即別有也。曹舉似師，師曰：好箇話頭，祇缺進語，何不問爲甚麼不道。曹卻來進前語。石曰：若言我不道，即癡卻我口。若言我道，即謬卻我舌。曹歸舉似師，師深肯之。

曹山親入師室，密印所解盤桓數載，乃辭師。師問：什麼處去。云：不變異處去。師曰：不變異處豈有去耶。曹云：去亦不變異。師又曰：子歸鄉莫打飛鷲，嶺過麼。曹曰：是。師曰：來時莫打飛鷲，嶺來麼。曹云：是。師曰：有一人，不打飛鷲，嶺過，便到此間。子還知麼。曹云：渠無彼往。師曰：子見甚道理，便道渠無彼往。曹云：若不到這田地，爭解恁麼道。師遂囑曰：吾在雲巖先師處，親印寶鏡三昧，事窮的要，今付于汝。其詞出尾。師又曰：末法時代人多乾慧，若要辨驗真僞，有三種滲漏。一曰：見滲漏，機不離位，墮在毒海。二曰：情滲漏，滯在向背，見處偏枯。三曰：語滲漏，究妙失宗，機昧終始，濁智流轉于此三種，子宜知之。

道全第二世住亦問師如何是出離之要師曰闍黎足下煙生全當下契悟更不他遊雲居進語云終不敢孤負和尚足下煙生師曰步步玄者即是功到

龍牙因參翠微乃問學人自到和尚法席一箇餘月不蒙一法示誨意在於何微曰嫌甚麼有僧舉問師曰闍黎爭怪得老僧龍牙又謁德山問云遠聞德山一句佛法及乎到來未曾見和尚說一句佛法德山曰嫌什麼牙不肯乃造師法席如前問之師曰爭怪得老僧

龍牙問德山學人仗鑊鉞劍擬取師頭時如何山引頸龍牙云頭落也山微笑牙後參師舉前語師曰德山道什麼云德山無語師曰莫道無語且將德山落底頭呈似老僧牙省過懺謝遂止于師席隨衆參請龍牙問如何是祖師意師曰待洞水逆流或作即向汝道牙始悟厥旨

華嚴問學人未見理路未免情識師曰汝還見理路也無云見無理路師曰什麼處得情識來云學人實問師曰怎麼須向萬里無寸艸處立云無寸艸處還許立也無師曰直須怎麼去華嚴搬柴次師把住柴問狹路相逢時作麼生云反仄何幸師曰汝記吾言汝向南住有一千人若向北住即三二百而已

九峯見師師曰掌有神珠白晝示人人且按劍况玄夜乎子可貴也峯云但不識珠者耳識之亦無晝夜師稱之爲俊士師沒盧於塔傍至中和始乃辭塔北遊

青林到參師問曰近離什麼處林云武陵師曰武陵法道何似此問云胡地冬抽筍師曰別甌炊香飯供養此人林拂袖便出師曰此子向後走殺天下人在青林在山栽松次有劉翁者求偈作偈曰長長三尺餘鬱鬱覆青草不知何代人得見此松老

劉得偈呈師師謂曰此是第三代洞山主人

青林辭師師曰子向甚麼處去林云金輪不隱的徧界絕紅塵師曰善自保任林珍重而出師門送謂青林曰怎麼去一句作麼生道林曰步步踏紅塵通身無影像師良久林云老和尚何不速道師曰子得怎麼性急林云某甲罪過便禮辭

北院辭師擬入嶺去師曰善爲飛猿嶺峻好看院沈吟良久師曰通闍黎院應諾師曰何不入嶺去因此省悟更不入嶺師事於師時號鐘師問踈山空劫無人家是甚麼人住處踈云不識師曰人還有意旨也無云和尚何不問他師曰現問次云是何意旨師不對

欽山遂參師師問甚麼處來對云大慈來師曰還見大慈麼欽云見師曰色前見色後見欽云非色前後見師默置欽乃曰離師太早不盡師意法眼云不盡師意不易承嗣得他

巖頭雪峯欽山坐次師行茶來欽乃閉眼或作師曰甚麼處去來欽云入定來師曰定本無門從何而入雪峯到參師問從甚麼處來云天台來師曰見智者否云義存喫鐵棒有分雪峯在會下作飯頭淘米次師問淘沙去米淘米去沙峯云沙米一時去師曰大衆喫箇什麼峯遂覆卻米盆師曰據子因緣合在德山

師一日問雪峯作甚麼來峯云斫槽來師曰幾斧斫成峯云一斧斫成師曰猶是這邊事那邊事作麼生峯云直得無下手處師曰猶是這邊事那邊事作麼生峯休去雪峯蒸飯次師問今日蒸多少峯云二石師曰莫不足麼峯云於中有不喫者師曰忽然總喫

又作麼生，峯無對。先雲居代云：總與即不見有不足者。

師見雪峯來，曰：入門來，須得有語，不得道蚤箇了。峯云：某甲無口。師曰：無口，即且從還我眼來。峯便休。先雲居云：待某甲有口，即道。長慶云：與麼則某甲謹退。雲居云：祇如雪峯與麼道，是入門語，不是入門語。

雪峯辭師，師曰：子甚處去。峯云：歸嶺中去。師曰：當時從甚麼路出。峯云：從飛猿嶺出。師曰：今回向甚麼路去。峯云：從飛猿嶺去。師曰：有一人，不從飛猿嶺去，子還識麼。峯云：不識。師曰：爲甚麼不識。峯云：他無面目。師曰：子既不識，爭知無面目。峯無對。

巖頭參德山，頭入方丈門，側身問：是凡是聖。山便喝。頭禮拜，有人舉似師。師曰：若不是巖上座，大難承當。頭曰：洞山老人，不識好惡，錯下名言。我當時一手擡，一手搦。現那覺云：巖頭無人問著，一錘，直得瓦解冰消。

師問德山侍者：從何方來。云：德山來。師曰：來作什麼。云：孝順和尚來。師曰：世間什麼物最孝順，侍者無對。

師不安，令沙彌傳語雲居，乃囑曰：他或問和尚安樂否，但道雲巖路相次絕也。汝下此語，須遠立，恐他打汝。沙彌領旨去，傳語聲未絕，早被雲居打一棒。沙彌無語。同安顯代云：恁麼則雲巖一古道人打此一棒，意作麼生。

師將圓寂，謂衆曰：吾有開名在世，誰人爲吾除得。衆皆無對。時沙彌出云：請和尚法號。師曰：吾開名已謝。石霜云：無人得他肯。雲居云：若有開名，非吾先師。曹山云：從古至今，無人辦得。疎山云：龍有出水之機，無人辦得。僧問：和尚達和，還有不病者也無。師曰：有。云：不病者還看和尚否。師曰：老僧看他有分。云：未審

和尚如何看他。師曰：老僧看時不見有病。

師問僧：離殼漏子，向甚麼處與吾相見。僧無對。遂示頌曰：學者恒沙無，一悟過在尋他舌頭路，欲得忘形蹤跡，努力慙慙空裏步。

師以咸通十年己丑三月朔旦，命剃髮澡身，披衣聲鐘，辭衆儼然坐化。時大衆號慟，移晷不止。師忽開目，謂衆曰：夫出家之人，心不依物，是真修行。勞生息死，於悲何有。乃召主事僧，令辨愚癡齋一普，蓋責其戀情也。衆猶戀慕不止，延至七日，食具方備。師亦隨齋畢，曰：僧家勿事大率，臨行之際，喧動如斯。至八日，浴訖，端坐長往。壽六十有三，臘四十二。敕諡悟本大師。塔曰：慧覺。師昔在迦潭，尋釋大藏，冀出大乘經要一卷，并激勵道俗，獨願誠等，流布諸方。

行由

師幼歲從師，因念般若心經，至無眼耳鼻舌身意處，忽以手捫面問師曰：某甲有眼耳鼻舌等，何故經言無其師？駭然異之，云：吾非汝師，卽指往五洩山禮靈默禪師。師遊方，首謁南泉，值馬祖諱辰修齋，泉問衆曰：來日設馬祖齋，未審馬祖還來否？衆皆無對，師乃出對曰：待有伴卽來。泉曰：此子雖後生，甚堪雕琢。師曰：和尚莫厭良爲賤。師參澗山，問曰：頃聞南陽忠國師有無情說法話，某甲未究其微。澗曰：閣黎莫記得麼？師曰：記得。澗曰：子試舉一徧看。師遂舉，僧問：如何是古佛心？國師曰：牆壁瓦礫是。僧曰：牆壁瓦礫豈不是無情？國師曰：是。僧曰：還解說法否？國師曰：常說熾然，說無間歇。僧云：某甲爲甚麼不聞國師曰：汝自不聞，不可妨他聞者也。僧云：未審甚麼人得聞？國師曰：諸聖得聞。僧云：和尚還聞否？國師曰：我不聞。僧云：和尚既不聞，爭知無情說法？國師曰：賴我不聞，我若聞卽齊於諸聖。汝卽不聞我說法也。僧云：怎麼則衆生無分去也？國師曰：我爲衆生說，不爲諸聖說。僧曰：衆生聞後如何？國師曰：卽非衆生。僧云：無情說法，據何典教？國師曰：灼然言不該典，非君子之所談。汝豈不見華嚴經曰：刹說衆生說，三世一切說。師舉了，澗山曰：我這裏亦有祇是罕遇其人。師曰：某甲未明，乞師指示。澗山豎起拂子曰：會麼？師曰：不會。請和尚說。澗曰：父母所生口，終不爲子說。師曰：還有與師同時慕道者否？澗曰：此去灤陵攸縣石室相連，有雲巖道人，若能撥草瞻風，必

爲子之所重。師曰：未審此人如何？澗曰：他曾問老僧，學人欲奉師去時如何？老僧對他道：直須絕滲漏，始得。他道：還得不？違師旨也。無老僧道：第一不得道。老僧在這裏，師遂辭澗山，徑造雲巖。舉前因緣了，便問無情說法，甚麼人得聞？巖曰：無情得聞。師曰：和尚聞否？巖曰：我若聞，汝卽不聞。吾說法也。師曰：某甲爲甚麼不聞？巖豎起拂子曰：還聞麼？師曰：不聞。巖曰：我說法，汝尙不聞，豈況無情說法乎？師曰：無情說法，該何典教？巖曰：豈不見彌陀經云：水鳥樹林悉皆念佛念法。師於此有省，乃述偈也。太奇也太奇，無情說法不思議。若將耳聽終難會，眼處聞時方可知。師問雲巖：某甲有餘習未盡。巖曰：汝曾作甚麼來？師曰：聖諦亦不爲。巖曰：還歡喜也未？師曰：歡喜則不無。如糞掃堆頭拾得一顆明珠。

師問雲巖：擬欲相見時如何？曰：問取通事舍人。師曰：見問，次曰：向汝道甚麼？雲巖舉問師。樂山問僧：見說汝解算虛實，云：不敢。山曰：汝試算老僧看，僧無對。汝作麼生？師曰：請和尚生日。或作月。

樂山夜參不點燈，山垂語曰：我有一句子待特。或作禮。牛生兒，卽向汝道。時有僧曰：特牛生兒也，何以不道？山曰：侍者把燈來，其僧抽身入衆。雲巖舉似師，師曰：其僧卻會，只是不肯禮拜。雲巖到澗山，澗問：大保任底人，與那箇是一是二？巖曰：一機之絹，是一段是兩段。師問曰：如人接樹。

一日雲巖謂衆曰：有箇人家兒子，問著無有道不得底。師問：他屋裏有多少典籍？巖曰：一字也無。師曰：爭得恁麼多知？巖曰：日夜不曾眠。師曰：問一段事，還得否？巖曰：道得卻不道。

雲巖作鞋次師問就師乞眼睛未審還得也無巖曰汝底與阿誰去也師曰良价無巖曰設有汝向什麼處著師無語巖曰乞眼睛底是眼否師曰非眼巖咄之

雲巖問尼乘汝爺在云在巖曰年多少云年八十巖曰汝有箇爺不年八十還知否云莫是恁麼來者巖曰猶是兒孫在師曰直是不恁麼來者亦是兒孫

院主遊石室回雲巖問曰汝去到石室裏許為甚麼便回主無語師代曰彼中已有人占了也巖曰汝更去作麼師曰不可人情斷絕去也

師辭雲巖巖曰甚麼處去師曰雖離和尚未下所止曰莫湖南去師曰無曰莫歸鄉去師曰無曰早晚卻回師曰待和尚有住處即來曰自此一別難得相見師曰難得不相見

師臨行又問雲巖和尚百年後忽有人問還認得師真否如何祇對巖曰但向伊道只這箇是師沈吟巖曰你箇黎承當箇事大須審細師猶涉疑後因過水觀影大悟前旨因有偈切忌從他覓迢迢與我疎我今獨自往處處得逢渠渠今正是我我今不是渠應須與麼會方始契如

如

師到參魯祖寶雲禪師禮拜侍立少頃而出卻再入來祖曰祇恁麼祇恁麼所以如此師曰大有人不肯祖曰作麼取汝口辯師便禮拜乃侍奉數月僧問魯祖如何是不言言祖曰汝口在

甚麼處云無口祖曰將甚麼喫飯僧無對師代曰他不飢喫甚麼飯

師到南源道明禪師方上法堂源曰已相看了也師便下去至明日卻上問曰昨日已蒙和尚慈悲不知什麼處是與某甲已相看處源曰心心無間斷流入於性海師曰幾放過

師辭南源去源曰多學佛法廣作利益師曰多學佛法即不問如何是廣作利益源曰一物莫違即是

師到樟樹樟問曰來作什麼師曰親近和尚樟曰若是親近用動兩片皮作麼師無對曹山後

師初禮京兆與平和尚平曰莫禮老朽師曰禮非老朽平曰渠不受禮師曰渠不曾禮師卻問如何是古佛心平曰既汝心是師曰雖然如此猶是某甲疑慮平曰若恁麼即問取木人去師

曰某甲有一句子不借諸聖口平曰汝試道看師曰不是某甲

師辭平和尚平曰甚麼處去師曰沿流無定止平曰法身沿流報身沿流師曰總不作此解平乃拈掌保羅云洞山自是一家乃別云竟得幾人

師到薯山薯曰汝已住一方又來這裏作麼師對曰良价無奈疑何特來見和尚薯召良价師應諾薯曰是什麼師無語薯曰好箇佛只是無光燭

師在泐潭見初首座有語曰也大奇也大奇佛界道界不思議師遂問曰佛界道界即不問祇如說佛界道界底是甚麼人初良久無對師曰何不速道初曰爭即不得師曰道也未曾道說

甚麼爭即不得初無對師曰佛之與道俱是名言何不引教初曰教道甚麼師曰得意忘言初曰猶將教意向心頭作病在師曰說佛界道界底病大小初又無對次日忽遷化時稱師為問殺首座价

師與密師伯經由次見鬆流菜葉師曰深山無人因何有菜隨流莫有道人居否乃共議撥草

谿行五七里間，忽見羸形異貌人，乃龍山和尚是也。亦云：龍山。放下行李問訊。龍曰：此山無路，闍黎從何處來？師曰：無路且置，和尚從何而入？龍曰：我不從雲水來，師曰：和尚住此山多少時耶？龍曰：春秋不涉，師曰：和尚先住此山，龍曰：不知，師曰：爲甚麼不知？龍曰：我不從人天來，師曰：和尚得何道理，便住此山？龍曰：我見兩箇泥牛闖入海，直至子今絕消息，師始具威儀禮拜，便問：如何是主中賓？龍曰：青山覆白雲，師曰：如何是主中主？龍曰：長年不出戶，師曰：主賓相去幾何？龍曰：長江水，上波，師曰：賓主相見，有何言說？龍曰：清風拂白月，師辭退。

師一日與密師伯渡水，師曰：莫錯下腳，伯云：錯卽過不得也，師曰：不錯底事，作麼生？云：共長老過水。

師與密師伯勸茶園，師擲下鏝頭曰：我今日因一點氣力也無，伯曰：若無氣力，爭解恁麼道得？師曰：汝將謂有氣力底是也。

師與密師伯過水次，乃問曰：過水事作麼生？伯曰：不濕腳，師曰：老老大大作這箇語話，伯曰：爾作麼生道？師曰：腳不濕。

密師伯因把針次，師問作什麼？伯云：把針，師曰：把針事作麼生？伯云：針針相似，師曰：二十年同行作這箇語話，豈有與麼工夫？伯曰：長老又作麼生？師曰：如大地火發底道理，他日問師，知識所通莫不遊踐，徑截處乞師一言，師曰：師伯意何得取功？伯因斯頓覺下語非常。

師與密師伯行次，忽見白兔走過，伯曰：俊哉，師曰：作麼生？伯云：大似白衣拜相，師曰：老老大大作這箇說話，伯云：汝作麼生？師曰：積代簪纓，暫時落薄。

師與密師伯過木橋，師先過了，拈起木橋曰：過來，伯云：价闍黎，師便放下木橋。

師會一官人，官人曰：三祖信心銘，弟子擬註，師曰：纔有是非，紛然失心，作麼生註？法眼代云：恁麼則弟子不註。

師與密師伯到百顏，哲禪師處，顏問甚處來，師曰：湖南來，顏曰：觀察使姓甚麼？師曰：不得姓，顏曰：名甚麼？師曰：不得名，顏曰：還理事也無？師曰：自有廊幕在，顏曰：還出入否？師曰：不出入，顏曰：豈不出入？師便拂袖出去，顏來日侵早入堂，召師，師近前，顏曰：昨日祇對上座話，不慳老僧意，一夜不安，今請上座，別下一轉語，若慳老僧意，便開粥，相伴過夏，師曰：卻請和尚問，顏曰：不出入，是如何？師曰：太尊貴生，顏乃開粥，同過夏。此語諸本誤改易文字，還作混等，單語，又開粥下，加飯字，最不可也。

師與密師伯行次，指路傍一院曰：裏面有人，說心說性，伯曰：是誰？師曰：被師伯一問，直得去死，十分，伯曰：說心說性，底誰？師曰：死中得活。

歌頌

寶鏡三昧歌

如是之法佛祖密付汝今得之宜善保護銀盃盛雪明月藏鷺類之弗齊混則知處意不在言
來機亦赴動成窠臼差落顛佇背觸俱非如大火聚但形文彩即屬染汚夜半正明天曉不露
爲物作則用拔諸苦雖非有爲不是無語如臨寶鏡形影相覩汝不是渠渠正是汝如世嬰兒
五相完具不去不來不起不住婆婆和和有句無句終不得物語未正故如重離六爻偏正回
互疊而爲三變盡成五如莖草味如金剛杵正中妙挾敲唱雙舉通宗通塗挾帶挾路錯然則
吉不可犯忤天真而妙不屬迷悟因緣時節寂然昭著細入無間大絕方所毫忽之差不應律
呂今有頓漸緣立宗趣宗趣分矣即是規矩宗通趣極真常流注外寂中搖係駒伏鼠先聖悲
之爲法檀度隨其顛倒以編爲素顛倒想滅肯心自許要合古轍請觀前古佛道垂成十劫觀
樹如虎之缺如馬之馮以有下劣寶几珍御以有驚異驚奴白牯羿以巧力射中百步箭鋒相
值巧力何預木人方歌石女起舞非情識到寧容思慮臣奉於君子順於父不順非孝不奉非
輔潛行密用如愚如魯但能相續名主中主

玄中銘并序

竊以絕韻之音假玄唱以明宗入理深談以無功而會旨混然體用宛轉偏圓亦猶投及揮

斤輪扁得手虛玄不犯回互傍參寄鳥道而寥空以玄路而該括然雖空體寂然不乖群動
於有句中無句妙在體前以無語中有語迴塗復妙是以用而不動寂而不凝清風復草而
不搖皓月普天而非照蒼梧不棲於丹鳳激潭豈墜於紅輪獨而不孤無根永固雙明齊韻
事理俱融是以高歌雪曲和者還稀布鼓臨軒何人鳴擊不達旨妙難措幽微儻或用而無
功寂而虛照事理雙明體用無滯玄中之旨其有斯焉

大陽門下日日三秋明月堂前時時九夏森羅萬象古佛家風碧落青霄道人活計靈苗瑞草
野父愁芸露地白牛牧人懶放龍吟枯骨異響難聞木馬嘶時何人道聽夜明簾外古鏡徒耀
空王殿中千光那照激源湛水尚棹孤舟古佛道場猶乘車子無影樹下永劫清涼觸目荒林
論年放曠舉足下足鳥道無殊坐臥經行莫非玄路向道莫去歸來背父夜半正明天曉不露
先行不到末後太過沒底船子無漏堅固碧潭水月隱隱難沉青山白雲無根卻住峰巒秀異
鶴不停機靈木迢然風無依倚徒敲布鼓誰是知音空擊成聲何人撫掌胡笳曲子不墮五音
韻出青霄任君吹唱

新豐吟

古路坦然誰措足無人解唱還鄉曲清風月下守株人涼兔漸遙春草綠天香襲兮絕芬馥月
色凝兮非照燭行玄猶是涉崎嶇體妙因茲背延促殊不然兮何展縮縱得然兮混泥玉獬豸
同欄辨者嗤薰菴共處須分郁長天月兮徧谿谷不斷風兮偃松竹我今到此得從容吾師叱
我相隨逐新豐路兮峻仍顛新豐洞兮湛然沃登者登臨不動搖遊者遊兮莫忽速絕荆榛兮

罷斷歛馨香兮味清肅負重登臨脫屣廻看他早是虛擔鞠來駕肩兮履芳躅至激心兮去
凝目亭堂雖有到人稀林泉不長尋常木道不鷲雕非曲穎鄂人進步何瞻矚工夫不到不方
圓言語不通非眷屬事不然兮詎冥旭我不然兮何斷續慙慙爲報道中人若戀玄關卽拘束

綱要頌 三首

敲唱俱行

金鉞雙鎖備叶路隱全該寶印當空妙重重錦縫開

金鎖玄路

交互明中暗功齊轉覺難力窮忘進退金鎖網纒纒

不墮凡聖

事理俱不涉回照絕幽微背風無巧拙電火燦難追

五位

正位卻偏就偏辨得是圓兩意偏位雖偏亦圓兩意緣中辨得是有語中無語或有正位中來
者是無語中有語或有偏位中來者是有語中無語或有相兼帶來者這裏不說有語無語這
裏直須正面而去這裏不得不圓轉事須圓轉然在途之語總是病夫當人先須辨得語句正
面而去有語是怎麼來無語是怎麼去作家中不無言語不涉有語無語這裏喚作兼帶語全
無的也他智上座臨遷化時向人道雲巖不知有我悔當初不向伊說雖然如是且不違於
藥山蔡子看他智上座合作麼生老婆也南泉喚作異類中行且密闍黎不知

五位頌 五首

正中偏三更初夜月明前莫怪相逢不相識隱隱猶懷舊日嫌
偏中正失曉老婆逢古鏡分明觀面更無他休更迷頭猶認影
正中來無中有路出塵埃但能莫觸當今諱也勝前朝斷舌才
兼中至兩及交鋒不須避好手猶如火裏蓮宛然自有衝天氣
兼中到不落有無誰敢和人人盡欲出常流折合還歸炭裏坐

功勳頌 異本作上堂次
示問話俗頌

問如何是向師曰得力須忘他休糧更不饑

聖主由來法帝堯御人以禮曲龍腰有時鬧市頭邊過到處文明賀聖朝

問如何是奉師曰只知朱紫貴豈負本來人

淨洗濃粧爲阿誰子規聲裏勸人歸百花落盡啼無盡更向亂峯深處啼

問如何是功師曰撒手端然坐白雲深處閒

枯木花開劫外春倒騎玉象趁麒麟而今高隱千峯外月皎風清好日辰

問如何是共功師曰素粉難沉跡長安不久居

衆生諸佛不相侵山自高兮水自深萬別千差明底事鷓鴣啼處百花新

問如何是功師曰混然無諱處此外更何求

頭角纔生已不堪擬心求佛好羞慚迢迢空劫無人識肯向南詢五十三

王子頌 五首

誕生

天然貴胤本非功，德合乾坤育勢隆。始末一期無雜種，分宮六宅不它宗。上和下睦陰陽順，共氣連枝器量同。欲識誕生王子父，鶴騰霄漢出銀籠。

朝生

苦學論情世不群，出來凡事已超倫。詩成五字三冬雪，筆落分毫四海雲。萬卷積功彰聖代，一心忠孝輔明君。鹽梅不是生知得，金榜何勞顯至勳。

末生

久棲巖嶽用功夫，草榻柴扉守志孤。十載見聞心自委，一身冬夏衣緣無。澄凝愁看三秋思，清苦高名上哲圖。業就巍科酬極志，比來臣相不當途。

化生

榜分帝化爲傳持，萬里山河布政威。紅影日輪凝下界，碧油風冷暑炎時。高低豈廢尊卑奉，五袴蘇途遠近知。妙印手持煙塞靜，當陽那肯露纖機。

內生

九重深密復何宣，挂弊絲來顯妙傳。祇奉一人天地貴，從他諸道自分權。紫羅帳合君臣隔，黃閣簾垂禁制全。爲汝方隅官屬戀，遂將黃葉止啼錢。

真讚

以這箇影像爲洞山主人，徒觀紙與墨，不是山中人。

附載

自誠

不求名利不求榮，只麼隨緣度此生。三寸氣消誰是主，百年身後謾虛名。衣裳破後重重補，糧食無時旋旋營。一个幻軀能幾日，爲他間事長無明。

規誠

夫沙門釋子，高上爲宗，既絕攀緣，宜從淡薄。割父母之恩愛，捨君臣之禮儀。剃髮染衣，持巾捧鉢。履出塵之徑路，登入聖之階梯。潔白如霜，清淨若雪。龍神欽敬，鬼魅歸降。專心用意，報佛深恩。父母生身，方需利益，豈許結託門徒，追隨朋友，事持筆硯，馳聘文章，區區名利，役役趨塵，不思戒律，破卻威儀，取一生之容易，爲萬劫之艱辛。若教如斯，徒稱釋子。

辭北堂書

伏聞諸佛出世，皆從父母而受身。萬彙與生，盡假天地而覆載。故非父母而不生，無天地而不長。盡沾養育之恩，俱受覆載之德。嗟夫！一切含識，萬象形儀，皆屬無常。未離生滅，雖則乳哺情至，養育恩深。若把世路，供資終難報答。作血食侍養，安得久長。故孝經云：雖日用三牲之養，猶不孝也。相牽沈沒，永入輪回。欲報罔極深恩，莫若出家功德。截生死之愛河，越煩惱之苦海。報千生之父母，答萬劫之慈親。三有四恩，無不報矣。故經云：一子出家，九族生天。良价捨今世之

身命，誓不還家。將永劫之根塵，頓明般若。伏惟父母心開喜捨，意莫攀緣。學淨飯之國王，効摩耶之聖后。他時異日，佛會相逢。此日今時，且相離別。良非違違甘旨，蓋時不待人。故云：此身不向今生度，更向何時度。此身伏冀尊懷，莫相寄憶。頌二首

未了心源度數春，翻嗟浮世謾逡巡。幾人得道空門裏，獨我淹留在世塵。謹具尺書辭眷愛，願明大法報慈親。不須洒淚頻相憶，譬似當初無我身。

巖下白雲常作伴，峯前碧障以爲鄰。免干世上名與利，永別人間愛與憎。祖意直教言下曉，玄微須透句中真。合門親戚要相見，直待當來證果因。

後寄北堂書

良价自離甘旨，杖錫南遊。星霜已換於十秋，岐路俄經於萬里。伏惟娘子收心慕道，攝意歸空。休懷離別之情，莫作倚門之望。家中家事，但且隨時轉多。日增煩惱，阿兄勤行孝順，須求冰裏之魚，小弟竭力奉承，亦泣霜中之笋。夫人居世上，修己行孝，以合天心。僧在空門，慕道參禪，而報慈德。今則千山萬水，杳隔二途。一紙八行，聊伸寸意。頌

不求名利不求儒，願樂空門捨俗徒。煩惱盡時愁火滅，恩情斷處愛河枯。六根戒定香風引，一念無生慧力扶。爲報北堂休悵望，譬如死了譬如無。

附嬢回書

吾與汝夙有因緣，始結母子恩愛情分。自從懷孕，禱神佛，願生男兒。胞胎月滿，性命絲懸。得遂愿心，如珠寶惜。糞穢不嫌於臭惡，乳哺不倦於辛勤。稍自成，人遂令習學，或暫逾時不歸。

便作倚門之望來書堅要出家父亡母老兄薄弟寒吾何依賴子有拋娘之意娘無捨子之心一自汝往他方日夜常洒悲淚苦哉苦哉今既誓不還鄉即得從汝志不敢望汝如王祥臥冰丁蘭刻木但愿汝如目連尊者度我下脫沈淪上登佛果如其不然幽譴有在切宜體

悉

洞山悟本禪師語錄之餘

屬者予遊于山陰得書讀之皆祖語也問有子未嘗探者雖片玉出崑岡故附後

日本沙門 宜默玄契 校勘

師問雲巖擬寫和尚真得也無巖云幾得成師曰尋常寫真得七八巖云猶是失在師曰不失時如何巖云直得十成師曰古人道直得十成不似時如何巖云他無成數
雲巖共師鋤薑地次巖就先德事師問此人什麼處去也巖良久云作麼作麼師曰太遲生也師問雲巖未有陰界時還道得否巖云爾今還有否雪峰般柴次乃于師面前拋下一束師曰重多少峯云盡大地人提不起師曰爭得到這裏峯無語
壽山解禪師行腳時造師法席師問曰閣黎生緣何處云和尚若實問某甲即是閩中人師曰爾父名什麼云今日蒙和尚致此一問直得忘前失後
師勸僧曰心法雙忘性即真第幾座僧云第二座師曰因什麼不與他第一座無對有一人代云非心非法師曰心法雙忘即是非法何更如是道無對師自代曰真不得座
示衆曰知有底人解入地獄不知有底人門外走過
師問新羅僧未過海時在什麼處無對自代曰祇今過海也在什麼處
師曰今時學者欲得學直須體取佛向上人始得如今學者只知有十方諸佛且不知有十方諸佛出身處空知有佛不得成佛

師問僧三人同行一人解語一人不解語那箇一人是什麼對云此豈不是辨得主客也師曰是也云如何是客師曰語與不語俱是客又曰如人解弄珠不觸手不落地即今往來底喚作什麼即得無對師自代曰不得不得

師看上座來禮拜師曰來作什麼云不為和尚來師曰若禮尊者某甲則偏坐慎微長老手把拄杖一僧指云這箇拄杖出何處微云雪地出師不肯自代曰如今出也有人辨得麼

黃檗從鹽官領三百衆到南泉每為三百人說法次南泉便到說法處云借此道場還許一問否衆云便請泉問定慧等學明見佛性此理如何衆云十二時中不依倚一物泉云莫是長老見處麼衆云不敢泉云醬水錢即且置草鞋錢教什麼人還有僧舉似師師曰責狀了喫棒師問僧備名什麼僧云請和尚安名師卻稱良价僧無對雲居代云恁麼則無出頭處又云恁麼則總被和尚占卻也

延慶端禪師有人問蚯蚓斬為兩段兩頭俱動佛性在阿那頭慶展兩手師別曰即今問底在阿那頭

師到田畔有師僧插田有一僧倒插師問闍黎因什麼倒插對云心中活在師不言歸院翌日衆僧普請出次日先出候問昨日倒插田僧出來其僧未後出門師問闍黎昨日東園斫竹誰其僧罔測云不知師曰闍黎什麼處人云鄧州人師曰老僧行脚時曾往過來

僧問師云承和尚說刮骨禪請和尚四方八面刮師曰勿刮處云和尚幸是好手為什麼刮不

得師曰爾還聞道世醫拱手問如何是善知識眼師曰昏然無油問十二時中將何奉獻師曰無物問身命惡切處如何師曰莫雜種云將何奉獻師曰將虛空奉獻云虛空與非空將來不相似師曰道相似也得道不相似也得云如何是相似師曰目前云如何是不相似師曰目前不是問返本還源時如何師曰如一片雪從天降下若絲髮大物掛著則不到地問暫時不在如同死人如何師曰好埋卻又曰是也又曰命絕也

師法嗣其出史傳者二十七人其有幾語者十有九人傳法正宗記曰大鑿之六世曰筠州洞

山良价禪師其所出法嗣凡二十六人一曰雲居道膺者教證弘覺禪師塔一曰撫州本寂者教證元證禪師塔一曰洞山道全者第二世中洞山一曰龍牙居遁者一曰京兆休靜者教證寶智大師無

師塔曰福圓一曰京兆蜆子和尚者一曰筠州普滿者一曰台州道幽者一曰洞山師虔者第三世後洞山

一曰洛京通儒者一曰越州乾峯和尚者一曰吉州禾山和尚者一曰天童咸啓者先住蘇州

一曰潭州寶蓋山和尚者一曰益州通禪師者住北院教證一曰高安白水本仁者一曰撫州

疎山光仁者一曰澧州欽山文選者一曰天童義禪師者一曰太原方禪師者一曰新羅金藏

和尚者一曰益州白禪師者一曰潭州文殊和尚者一曰舒州白和尚者一曰邵州西湖和尚

者一曰青陽通玄和尚者日本人瓦屋能光禪師亦其一也師本朝高僧傳曰航海入唐

參洞山价禪師親承法印

洞山悟本禪師語錄 終

書洞山語錄尾

龍之爲物其非常邪、人能觀者寡矣、丹青以畫告人、以龍、人知其爲龍、不信者未之有、後觀眞龍、告之以龍、人且怪焉、方今之世、孰不說法、囂囂其教、似則似、眞則否、如彼畫龍、然非惟畫龍不興、雲爲霖而已、間奪朱、幾爲病、於戲、可懼、屬者有禪人、宜默者、再編集洞山語要、來以告予、予燕香稽首、看讀一過、謂之曰、近世支那禪師、瑞白雪公有言、曰、洞山古刹、我等祖基、傾頽已久、瓦礫不存、今幸孤涯上座住持、欲重新祖塔、我輩爲洞上兒孫、烏可坐視乎、由是觀之、知重修業蔭彼土、今也於子、亦資始祖錄乎、我國宜矣、知所遵也、吾儕苟辱、遠裔安不喜躍、命工毀梓、以廣其傳、俾參學者、知丹青外、寔有神龍、雲行雨施、千古如此、請莫怪焉。

元文己未三月之八日

鷹峯源光主人覺城叟請詢和南拜撰

國譯撫州曹山本寂禪師語錄

解題

曹山は地名、支那江西省撫州に在り、舊吉水といふ。山に崇壽院あり、洞山良价の法嗣本寂住す。傳に云く、「(本寂)遂に曹溪に往き、祖塔を禮し、吉水に回る。衆、師の名を仰ぎ、乃ち開法を請ふ。師、六祖を志慕す。遂に山を名けて曹となす」と。

按ずるに曹山諱は本寂、元證大師は其の謚號なり。俗姓は黃氏、支那泉州莆田の人。初め儒學に志ありしも、故あつて佛に歸す。十九出家、二十五登戒。唐の咸通の初、良价に洞山に投じて親炙すること數載、深く其の堂奥に達す。後辭して席を曹山及び荷玉に開くに、其の名遐邇に聞え、到るもの踵を接すといふ。曹洞の宗名は實に洞山曹山二師に因るといふものあるに至る、亦以て其の道價を察するに足る。後年洪州の鐘氏、師の道望を慕ひて屢々請すれども遂に往かず、天復元年六月十五日寂す。壽六十二、臘三十七。

本録二卷、收むる所は、師一代の語要、細大遺漏なきが如し。初め支那に於て大師の語録と稱し、二二三の世に行はるゝものなきにあらざりしが、多くは是れ僞撰、然らざれば杜撰、以て師の眞面目を

窺ふに足らず。紀州林泉寺玄契宜默なるもの深く之を傷み、明僧郭正中著す所の五家語錄及び群籍の中に就いて、大師の語要を撰撫し、改めて曹山語錄と題し、寛保元年刊行せり。本録即ち是れなり。其の編集の來山校讎の苦心に至つては、卷頭附する所の鷹峯請詢の序并に宜默の自序等に就いて知るべし。寶曆十年指月慧印更に之を校訂復版す。自序に云く、「師の語要は元文の間、洞山の録と并せ行ふあり。而して之も亦多衆の遮眼に便ならず。庚辰（寶曆十年）の秋、吉祥の衆祐、予に就いて集録して版に刊り、洞祖の録と并せ行はれて、以て時世の妄偽を反正せんと欲す云々」と。之を宜默の所編に比ぶるに、其の内容固より大差あるべからずと雖も、語話の排列等多少の異なきに非ず。而して此れ盛んに世に行はると雖も、今は専ら宜默に従ふ。

國譯曹山語錄序

古人言へることあり、曰く、「意言に在らず」と。又曰く、「意を得て言を忘す」と。意は旨なり、言は標なり。旨か之を得易からず、標か之を得難からず。所以に、得易きの標を假つて、得難きの旨を得、苟も其の旨を得ば、標を忘じて可なり。若し其の旨を失はば、標其れ安んぞ用ひん。故に古人唯だ其の標を執する者の爲に、之を葛藤と謂ひ、又之を敲門の瓦子と謂ふなり。雲州の禪者契宜默、荷玉大師の語を郭正中が五宗錄に得、又慧霞・廣暉・晦然等の著す所の陳編を得て、同異を校讎し、眞偽を辨驗し、題して曹山語錄と曰ひ、向者に刊する所の洞山語錄に附し、以て其の傳を廣む。大いなるかな志子、其れ隗より始む。然れども予未だ嘗て

- ① 曹山。支那江西省撫州にある山の名。今は此の山の崇壽院に住せる本寂禪師のことをいふ。
- ② 語錄。垂示普說等の語要を集録したるもの謂。
- ③ 序。序は緒なり、叙なり、文の一體、所謂「はしがき」のこと。
- ④ 旨。本旨、又は旨趣の義。
- ⑤ 標。目標、又は標徴の意。
- ⑥ 葛藤。葛は「つたかづら」、藤も「かづら」にて、物を束縛し、眞意を把握する障害に喩ふ。
- ⑦ 敲門の瓦子。門を敲く瓦のことにて、手段なるに喩ふ。
- ⑧ 荷玉大師。本寂禪師曾て荷玉山に住するを以て又荷玉大師と稱せらるるなり。
- ⑨ 陳編。陳述編纂せるもの意。
- ⑩ 校讎。かんがへしらぶること。宛ち自己の敵讎をしらぶることとするが故に讎といふ。
- ⑪ 洞山語錄。筠州洞山悟本大師語錄なり。
- ⑫ 禪者。參禪者の意。
- ⑬ 寛保辛酉。寛保は櫻町帝の曆號、辛酉は同元年なり、二月

知らず、果して其れ意を得る者か、抑々又言を執する者か、將に以て敲門の瓦子と爲すものか。請ふ之を禪者に質せ。

是れ歳、寛保辛酉の春、鷹峯源光主人請詢、和南拜稽首して、誤す。

改元なり。西紀一七四一年に當る。
鷹峰源光庵。山城にあり、正山道白の開創に係る。
和南。梵語、稽首、禮拜、敬禮

等と譯す。
稽首。拜して首、地に至るをいふ。最も丁寧なる辭なり。
誤。撰に同じ、述べ作るの意。

國譯曹洞語錄序

荆山の璞、明世と和氏とに逢ふに非ざれば、はるゝことを得んや。玉は實に乏しからず、明世と和氏と實に相逢ふこと難きのみ。新豐荷玉の語録、初め先是往、盛んに世に行はる。魚目珠に淆り、純金沙に在り。宜默。上座其の弊を傷むこと深し。郭氏の五宗録暨び群籍の中に就いて、其の精を取り、其の麤を捨て、録終に成る。余と上座と、方外の交甚だ厚く、余に寄せて之を讀ましむ。余曰く、「上座其れ豊玉の和氏か。和氏有りと雖も、復た明世に逢ふに非ざれば、何すれぞ能く斯に至らん。於戲懿なるかな。吾が大東の文明の徴、今日の美

空しく荆石の中に藏る。燦然たる連城の美、豈に顯

曹洞語錄。曹山錄及び洞山錄の意。初め合本として出せし時の序なり。
荆山の璞云云。韓非子に云く、楚人卞和、荆山の峴岡谷に璞玉を得、之を厲王に獻す。厲王見て石なりといふて刖刑に處し、右足を刖る。再び武王に獻するに、又石なりと云つて左足を刖る。文王の時卞和璞玉を抱いて荆山の下に泣く。文王聞き、召して其の所以を問ふ。和曰く、「刖足悲むに足らず、只だ眞玉を以て瓦石となし、忠臣を以て罪人となすを悲むのみ」と。乃ち

文王其の璞を納れ、玉人に磨かしむるに、果して天下無二の明玉なり。璞は未だ磨かざる玉をいふ。此の玉後秦の十五の城と交換したりといふ、故に之を連城の玉といふなりと。
新豐。洞山初め新豐に住せしが故に、新豐大師ともいふなり。
上座。梵語、悉多毘盧の譯、上座の義にして沙門中老宿の尊稱。
方外。方は猶ほ道の如し、斯の道に依らざるものないふ、僧よりは俗を方外とし、俗よ

あるに至る。孔門の徒、豈に何ぞ敢て其の美を
美とし、其の喜を喜とせざらんや。新豊の録、
彫梓已に成り、荷玉の録、今亦成る。不佞其の
美にして喜なる所以を書し、大方をして上座の
正法眼を知らしむ。

元文庚申八月望。郡山柳澤里恭公美、
縁竹書室の南窓に書す。

りは信を方外とす。今は僧者
と儒者なり。
② 新豊。新豊荷玉の略、今幸に
荷玉の玉の字あり、故に和氏
を縁としていふなり。
③ 於戲。歎美の辭。
④ 善、美と訓す。
⑤ 不佞。自己の謙辭、佞は才な

り、不佞は不才の意。
② 正法眼。正は眞正、又は公正
なり、法は佛法なり、今は佛
法に對する正しき眼の意。
③ 元文庚申。元文は櫻町帝の曆
號、庚申は同五年なり、寛保
改元の前年なり。
④ 望。陰曆十五日のこと。

國譯重ねて曹山元證大師語錄を集むる自序

語錄は何ぞ、荷玉大師元證の説く所なり。其の説く所や、古に存し、今に存す。其の今に存するものよりして、其の古に存するものを校する時は、古は可なり、今は未可なり。若し其れ之を取らば抑々古を取つて可ならんか、將今を取つて可ならんか、寧ろ今古を並べ取つて可ならんか。嗚呼、何れをか取り、何れをか捨てん。如かす今古を校讎し、其の可を取らんには。大凡、大師の語録と稱して世に行はるゝもの、率譌誤に屬す。夫の上堂示徒と作すものゝ如き、或は四禁の頌に助辭を加へ以て上堂に曰くと作すものゝ如き、其の譌誤する所、以て知んぬべし。洞曹語錄の支那に於ける、郭黎眉が輯録する所なり。是れも亦今のみ、古なるときは未だし。然も全壁に非すと雖も、光潤亦燕石の屬に非ず。是に於て不佞、荷玉の教を五宗録中に抜出し、其の取る所を取り、其の舍つる所を捨て、或は陳編以て其の闕を補ひ、語録成れり。於戲古人教を後世に垂れて、其の志を負ふもの、之が爲に前む。其の教を垂るゝ徹つせば、後の世に居し、其の志を負ふもの、安んぞ前むことを得ん。不佞以て古人の機語を撰摭し、

- ① 校。かんがふること。
- ② 嗚呼。嘆息の聲。
- ③ 輯録。輯は聚なり集なり。
- ④ 燕石。燕支山より出づる玉に似て玉にあらざる石。似て非なるものに喩ふ。
- ⑤ 前。通なり。
- ⑥ 機語。機縁の語なり。

古今の眞偽を校正し、廣く其の教を傳へんことを欲して、^① 疊々たる所なり。敢て請ふ、後の世に居し、其の志を負ふもの、之が爲に前み、之が爲に入り、之が爲に體せんことを。若し其れ此の如くならば、謂つべし吾れと。祖師と同じく一龜に乗り、^② 泛々乎として深池の中に游泳すと。豈に愉快ならざらんや。

元文五年庚申の冬、

大日本國 沙門宜默玄契和南拜撰。

- ① 摺摺。ひろふこと。
- ② 疊々。勉めて倦まざる貌。
- ③ 體得の意。
- ④ 祖師。今は曹山を指す。
- ⑤ 泛々乎。軽く浮ぶ貌。
- ⑥ 沙門。動息と譯す、出家して佛道を修するもの、總稱。

國譯撫州曹山本寂禪師語錄卷上

無地地主人郭凝之編集

師、諱は本寂、泉州莆田の黃氏の子。少うして儒を業とす。年十九にして福州の靈石に往いて出家す。二十五にして登戒し、尋で洞山に謁す。洞山問ふ、「閣黎名は甚麼ぞ。」師曰く、「本寂。」山曰く、「向上更に道へ。」師曰く、「道はず。」山曰く、「什麼と爲てか道はざる。」師曰く、「本寂と名づけず。」洞山深く是れを器とす。^① 僧寶傳に、師を耽章と名づく、燈錄の載する所なり、遂に之に仍る。此より室に入つて盤桓すること數載、乃ち辭し去る。洞山遂

① 無地地主人郭凝之。卷中に云く、「海澄縣無地地主人郭正中原名は凝之、字は黎眉、五家語錄五卷を彙編す云々。」
 ② 莆田。縣名。
 ③ 靈石。山の名、福州福唐縣に在り。
 ④ 登戒。登壇稟戒の意。釋氏要覽卷一に云く、「西天祇園比丘樓至、佛を立壇して比丘受戒の爲に請す。如來園外院の東南に於て一壇を置く、此を始めとなす。支那宋元嘉七年天竺の僧朮那跋摩揚都南林寺前竹園に至り、壇を立て比丘の爲

に受戒す、此を始めとなす。」
 ⑤ 支那江西省豫章筠州洞山普利院悟本大師良价禪師、靈巖曇晟の法嗣。
 ⑥ 閣黎。具には阿闍黎、阿遮黎耶、阿祇利等に作り、軌範師、正行等と譯す。初めは僧俗の學解行爲を糾正指導し、其の師範たるべき大徳の稱なりしが、禪門にては僧の代名詞、即ち現今俗稱の尊公、貴公等の意に用ひらる、但し此の場合には單に閣黎といひて阿闍黎とはいはず。
 ⑦ 僧寶傳。具には禪林僧寶傳と

に密に洞上の宗旨を授く。復た問うて云く、「甚麼の處に向つてか去る。」師曰く、「不變異の處に去る。洞山云く、「不變異の處豈に去ると有らんや。師曰く、「去るも亦不變異」と。遂に曹溪に往いて祖塔を禮し、吉水に回る。衆、師の名を嚮ぎ、乃ち開法を請ふ。師、六祖を志慕し、遂に山を名づけて曹と爲す。尋で賊亂に値ひ、乃ち宜黄に之く。信士王若一なる者あり。何王觀を捨て、師を請じて住持せしむ。師、何王を更へて荷玉と爲す。是れに由つて法席大いに興り、學者雲の如くに萃る。洞山の宗、師に至つて盛となる。

いふ、三十卷、宋の洪覺範の著。
①燈錄。具には景德傳燈錄といふ、三十卷、宋の眞宗景祐年中沙門道源編す、諸祖の機縁を集めしもの。
②盤桓。進み難き貌、又徘徊道邊の義に用ふ。
③宗旨。一宗の要旨の意。
④不變異の處。勝天王般若經に云く、「天王佛に問うて曰く、如何か甚般若を修學して、法界に通達せん。佛天王に告げて言く、即ちこれ實の如くせよ。王曰く、云何ぞ實の如くなる。佛の言く、即ち不變異なり。王の曰く、云何が不變異なる。佛の言く、如々なり。王曰く、云何が如々なる。佛の言く、これ智の知るべきなり、言の能く説くに非ず、相と無相とを離る云云。」
⑤曹溪。支那廣東省韶州府の東

南三十里雙峰山下にあり。吉水は撫州曹山の舊名。
⑥六祖。大鑑慧能禪師のこと。支那南海新興の人、姓は盧氏、唐の貞觀十二年二月に生る、幼にして質し、常に採薪して母を養ふ、一日市に出て人の金剛經を誦するを聞き、一念發起して蕪州黄梅の東禪院に五祖弘忍の會下に走り、唯房にあること八閏月、菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃この一偈を作つて半夜五祖の衣法を傳へ、爾來儀鳳元年、南海法性寺に至り、印宗に依りて落髮し、智光に依つて受具す、二年曹溪山寶林寺に入り禪風を舉揚し、舊邸を改めて國恩寺となし、遂に八月三日七十六歳にして寂す、達磨より六傳を經るに依つて六祖と云ふ。

には被毛戴角。二には不斷聲色。三には不受食。」時に稠布襦問うて曰く、「被毛戴角は是れ甚麼の墮ぞ。」師曰く、「是れ類墮。」(古本に沙門墮と作す。)云く、「不斷聲色は是れ甚麼の墮ぞ。」師曰く、「是れ隨墮。」(古本に隨類墮と作す。)云く、「不受食は是れ甚麼の墮ぞ。」師曰く、「是れ尊貴墮。」(五宗錄に此の三墮の語を載すと雖も全文に非ず、且つ後人の語を傳會す、故に問答のみを取つて、餘は此に刪る。)

①信士。在俗の儘、佛法を信じて戒法を受けたる者を云ふ。
②何王觀。道士處居の宮、之を觀といふ。
③萃。衆なり。
④金鎖玄路。洞山三種綱要第二なり。金鎖は佛縛法縛に喩へ、玄路は玄々微妙の路にして向上の一路をいふ。即ち佛に縛せられ法に縛せられ、又向上の一路に滯るは、却つて其の身を束縛するものなることを示す。回互の回は「めぐる」と互は「たがひに」と訓み、甲乙彼地互に交參滲入すること。
⑤正命食。八正道の一、出家の法を守り、五種の邪命を離れ、常に乞食して自活するを云ふ。
⑥三種の墮。墮は自由の義、不染汚の義にして眞個本分の衲僧は以下三種の自在を具せざるべからざるを示すなり。即ち一に沙門墮、二に尊貴墮、

三に隨類墮あり。
⑦五位君臣の旨訣。曹山本寂の創設せしもの、洞山眞僧の正偏五位に依り、之に君臣を配當して五位を定む。君は其の德天地に通じ、正位の平等一色にして一切の差別の境相を混したるが如し、故に君を正位に配す。臣は君の命を待つて靈機を轉じて聖道を弘むるは、偏位は一切萬象森々として現はれ、各自法位に住して働きをなすが如し、故に臣を偏位に配す。臣向。君は、臣は君に依つて自位を安じ、却つて君の聖道を輔くるは、偏位の差別界は正位の平等界を離れざるが如し、故に偏中正に配當す。君視。臣は、君は常に臣を用ひて其の萬機を統ぶるは、正位の平等界より一切の差別界を顯現するが如し、故に正中偏に配す。君臣道合

眞宗と曰ふ。從上の先德、此の一位を推して最妙最玄なり。當に詳審に辯明すべし。君を正位と爲し、臣を偏位と爲す。臣、君に向ふは是れ偏中正、君、臣を視るは是れ正中偏、君臣道合は是れ兼帶の語なり。僧問ふ、「如何なるか是れ君。」師曰く、「妙德。寰宇に尊く、高明太虚に朗かなり。」云く、「如何なるか是れ臣。」師曰く、「靈機聖道を弘め、眞智群生を利す。」云く、「如何なるか是れ君、君に向ふ。」師曰く、「諸の異趣に墮せず、情を凝して、聖容を望む。」云く、「如何なるか是れ君、臣を視る。」師曰く、「妙容動せずと雖も、光燭本偏無し。」云く、「如何なるか是れ君臣道合。」師曰く、「混然として内外なく、和融して上下平かなり。」師又曰く、「君臣偏正を以て言ふことは、中を犯すことを欲

は、君臣の兩者相契合して始めて天下太平に治まるは、正偏の二位即ち平等界と差別界と相圓融して、平等は差別を離れず、差別は平等を離れず、不即不離同互圓轉自由無碍の境界をなすが如し、故に兼中に配す。
⑤ 虛玄の大道。虚通玄妙にして言説、思量を超越する無限の大道と云ふこと。
⑥ 無著の眞宗。性相有無、迷悟凡聖等の一方に執着することなき佛祖正傳の宗旨と云ふこと。
⑦ 寰宇。天子の畿内を寰といひ、天地四方を宇といふ。
⑧ 靈機。靈妙なる機用の義、自由自在の働きをいふ。
⑨ 群生。含類、含靈、群類等に同じ、衆生のこと。
⑩ 異趣。趣は趣向の義にして衆生の業力に依りて生を受けて

趣く處をいふ、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上之を六趣といふ、異とは自己以外を指す。
⑪ 聖容。聖は聖主、容は容貌、又は風容の意。
⑫ 中。中道の義。
⑬ 偈。又頌といふ、佛家の詩詞を特稱す。
⑭ 眞際。具には眞如實際と云ふ、眞如は虚空なり、虚妄ならず、實際は究竟の義にして、人法物我の相を混したる平等一如の理を云ふ。
⑮ 頑空。頑は「かたくな」と訓み、固陋の意、頑空は有に對する空をいふ。
⑯ 潛行。潛は魚などの水に潜みて表面に見えぬ義、潛行密用といふて外に神異奇行の相を現さず、内に深沈穩密の行を持ちて、他より窺測すること能はざるをいふ。

せず。故に臣は君と稱して敢て斥して言はざる是れなり、是れ吾が法の寶要なり。乃ち偈を作つて曰く、
「學者先づ須らく自宗を識るべし。眞際を將つて、頑空に雜ふること莫れ。妙明體盡きて傷觸を知る。力めて縁に逢ふに在つて中を借らす。語を出すことは直に燒不著ならしむ。潛行は須らく古人と同じかるべし。無身有事は岐路を超え、無事無身は始終に落つ。」
復た五相を作る。

○偈に曰く、

「白衣須らく相に拜せらるべし。此の事奇と爲すにあらず。積代簪纓の者、言ふことを休めよ。落魄の時と。」

○偈に曰く、

「子の時正位に當る。正を明すことは君臣に在り。未だ兜率界を離れず。鳥雞雪上に行く。」

○偈に曰く、

「箴寒寒氷結び、楊花九月飛ぶ。泥牛水面に吼え、木馬風を逐ふて嘶

① 白衣。白色の衣服のこと、支那にては在家俗人の位官なきものは白衣を著し、位官あるものは彩衣を著したるより、白衣は匹夫の意に用ひらる。
② 簪纓。簪は冠を髪に連ぬるもの、纓は冠のひも、即ち朝廷に立つ人と云ふこと。
③ 落魄。志行衰悪の貌。
④ 兜率界。欲界六天の第四、須彌山の頂上にあり、妙足、止足、知足と譯す。佛地論に「喜足と名く、即ち後身の菩薩中に於て教化し、多く喜足を修する故に」とあり、大藏法數に「梵語兜率、華に知足と言ふ、其の五欲の境に於て、止足を知ると云ふ、故に此の王、空に依つて居す」とあり。
⑤ 鳥雞(鳥の名)の如き黒きものに例へし語、即ち黒きものと云ふこと。

⑥ 楊花。楊は枝の垂れざる柳、

く。

○偈に曰く、

「王宮初めて降る日、玉兔離るゝこと能はず。未だ無功の旨を得ず。人天何ぞ太だ遅しとせんや。」

偈に曰く、

「渾然として理事を藏す。朕兆卒に明め難し。威音王未だ曉さず。彌勒豈に惺惺ならんや。」

師、行脚の時、烏石觀禪師に問ふ、「如何なるか是れ 毘盧の師、法身の主。」烏石曰く、「我れ若し爾に向つて道は即ち別に有るなり。師、洞山に舉似す。洞山曰く、「好箇の語頭、祇進語を缺く、何ぞ問はざる、甚麼としてか道はざる。師、卻つて去り前語を進む。烏石曰く、「若

俗にいふ川やなぎのこと。
① 玉兔。月の異稱、梁の元帝の墓前に曰く、「月中に形あり、兔の如し、故に月を玉兔と云ふ」と。

② 朕兆は物の生ぜんとする「きざし」なり。

③ 威音王。威音如来の略、太古の佛名なり。法華經常不轉品に、「乃ち往昔無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぎて佛あり、威音王如来と名づく。劫を離哀と名づけ、國を大成と號す云々」とあり。

④ 彌勒。無能勝と譯す、南天竺の婆羅門にして兜率天に上生し、此の土に出現し釋尊に代つて衆生を濟度すと云ふ、之を彌勒下生と云ふ、故に補處の菩薩と名づく。

⑤ 惺々。心の明かなる貌。

⑥ 烏石觀禪師。福州烏石山靈觀禪師、黃髮希運の法嗣。

るものに對し、又別に自己の見識を以て答を付するをいふ。
① 関工夫。工夫はほれをりといふことにて、無益の事の意なり。
② 相見。對面すること、拜顔、拜眉などといふに同じ。
③ 禪狀。坐禪する場處。
④ 主事。知事といふに同じ、各自其の役に就きて其の事を主する意にて、此の名あり、禪門古來六知事あり。
⑤ 那邊。這邊に對す、那箇と同じく「あちら」といふこと。
⑥ 體悉。體は體得、悉は悉知と熟語する字にて、即ち自己の身心に徹して明了に領悟するをいふ。
⑦ 金峯の志。撫州金峯支明大師從志禪師、曹山本寂の法嗣。
⑧ 和尚。梵語に烏波陀耶といふ、又和闍、和闍、和上等に

六

し我れ不道と言はゞ、即ち我が口を瘖卻す。若し我れ道ふと言はゞ、即ち我が舌を塞卻す。師、歸つて洞山に舉似す。洞山深く之を肯ふ。

① 雲門問ふ、「如何なるか是れ沙門の行。」師曰く、「常住の 苗稼を喫する者は是。」雲門云く、「便ち 恁麼にし去る時如何。」師曰く、「爾還つて畜ひ得るや。」雲門云く、「畜ひ得。」師曰く、「爾作麼生か畜ふ。」雲門云く、「著衣喫飯甚麼の難きことか有る。」師曰く、「何ぞ 被毛戴角と道はざる。」雲門便ち禮拜す。

師、衆に示して曰く、「諸方 盡く格則を把る。何ぞ他のために 一轉語を道つて、他をして不疑にし去らしめざる。」雲門、衆に在り、出でて問ふ、「密密の處、甚麼としてか有ることを知ら

要を提示す、天下の龍象風を望んで至る、稱して雲門宗となす、宋の太祖の乾徳四年示寂す、嗣法者二十有五人、遺著に「廣録」あり。
① 苗稼。稻の苗。
② 恁麼。宋代の俗語にして、「斯の如し」等の意。
③ 作麼生。生は助字、作麼は「何」に同じ、支那の俗語。
④ 被毛戴角。毛を被り角を戴く者といふことにて、牛馬の如き畜生の類をいふ。
⑤ 一轉語。進退難れ谷まりたる處に至つて、自由に身を轉廻するの一語、又は一語にて他をして轉迷開悟せしむることを得るの一語を云ふ。
⑥ 雪竇。支那浙江省明州慶元府資聖寺明覺大師重顯禪師、智門光祚の法嗣。
⑦ 別して曰く。通常別語といふ。他の問答商量して答へた

ざる。師曰く、「只だ密密なるが爲の所以に有ることを知らず。」(雪竇別して曰く、「達磨來や。」) 雲門云く、「此の人如何が親近せん。」師曰く、「密密の處に向つて親近すること莫れ。」雲門云く、「密密の處に向はざる時如何。」師曰く、「始めて親近することを解す。」雲門云く、「諾諾。」(妙喜云く、「濁油更に黒燈心を著く。」)

雲門問ふ、「改易せざる底の人來らんに、師還つて接せんや否や。」師曰く、「曹山に恁麼の閑工夫なし。」

師因に米和尚至る、未だ相見せざるに、米遂に禪牀を坐卻す。師、更に出でず、米便ち去る。主事遂に問ふ、「和尚の禪床、什麼としてか別人に坐卻せらる。」師曰く、「後卻つて還り來らん。」米果して回り、師と相見す。

智炬到り參じ、師に問うて云く、「古人那邊の人を提持す、學人如何が體悉せん。」師曰く、「退歩して己に就かば萬に一を失せず。」炬、言下に於て頓に玄解を忘す。

師、金峯の志に問うて曰く、「甚麼を作し來る。」金峯云く、「屋を蓋ひ來

る。師曰く、「了するや未だしや。」金峯云く、「這邊は則ち了す。」師曰く、「那邊の事作麼生。」金峯云く、「工を下す日を俟つて、和尚に白さん。」師曰く、「如是如是。」

僧清鏡問ふ、「某甲孤貧なり、請ふ師拯濟せよ。」師曰く、「鏡閣黎近前し來れ。」鏡近前す。師曰く、「泉州白家三盞の酒、喫して後猶ほ道ふ未だ唇を沾さすと。」(玄覺云く、「甚麼の處か是れ他に酒を與へて喫せしむ。」)

鏡清問ふ、「清虛の理、畢竟無身の時如何。」師曰く、「理即ち此の如し、事作麼生。」鏡清云く、「理の如く事の如し。」師曰く、「曹山一人を認することは即ち得てん、諸聖の眼を爭奈せん。」鏡清云く、「若し諸聖の眼無くんば、争か箇の不恁麼を察得せん。」師曰く、「官には針をも容れず、私には車馬を通ず。」(大瀉の語曰く、「曹山然も切磋琢磨を善能すと雖も、其の鏡清を奈せん。玉本瑕無し、會せんと要するや、敏手を經されば終に廢器となる。」)

師、徳上座に問ふ、「菩薩、定にあつて香象の河を渡るを聞く、甚麼

作り、親教師、力生、近諦等と譯す。初め戒和尚と稱し授戒の師たる者の名なりしが、中古以來單に高祖の尊稱として用ふるに至れり。

① 傳記等未だ詳ならず、此の公案傳燈十七、會元十三、曹山章に出づ。

② 近前し來れ。前へ進み來れといふこと。

③ 泉州。前漢の地理志に曰く、「酒泉郡は武帝の大初元年に開く。」注に曰く、「城下に金泉あり、味、酒の如し、故に酒泉郡と名く」と。

④ 白家。又白屋といふ、白茅を以て屋を覆ふをいふ、即ち粗屋の稱。

⑤ 玄覺。永嘉無相大師玄覺禪師、六祖の法嗣。

⑥ 鏡清。鏡清道愆、青原下、支那温州永嘉の人、姓は陳、温州の開元寺に往いて出家を具

す、雪峯義存に隨侍すること數年、遂に印可を受く、後、越州鏡清寺に住し、雪峯の宗風を擧揚す、王命に依りて天龍寺に居し、龍舟寺を創建す、晋の高宗天福年中に示寂す、號を順德禪師と云ふ。

⑦ 諸聖。聖とは佛祖を指す。諸聖は三世歴代の佛祖をいふ。

⑧ 菩薩。具には菩提薩埵といひ、覺有情と譯す。覺智を求むる有情の義にして、諸佛の覺智を得んとして修行する大士に名づく、即ち上菩提を求め、下衆生を教化する悲智二顯を具し、自利利他の行を全うする修行人をいふ。

⑨ 定。三學の一、六度の一、定は靜慮、靜意の義にて禪定のこと。禪定は觀想無餘といひ、心一處に住し、種々の妄想分別を起さず、不動著の境界をいふ。

の經にか出でたる」と。僧云く、「**①**涅槃經に出づ」と。師曰く、「定前に聞くか定後に聞か」と。僧云く、「和尚流れぬ」と。師曰く、「道ふことは也た太殺だ道ふ、始めて一半を道ひ得たり」と。僧云く、「和尚如何」と。師曰く、「灘下に接取せよ。」

紙衣道者來り參す。師問ふ、「是れ紙衣道者なること莫しや否や。」云く、「不取。」師曰く、「如何なるか是れ紙衣下の事。」道者云く、「一裘纔かに體に掛けて、萬法悉く皆如なり。」師曰く、「如何なるか是れ紙衣下の用。」道者、近前應諾して便ち立脱す。師曰く、「汝祇恁麼に去ることを解す、何ぞ恁麼に來ることを解せざる。」道者、忽ち眼を開いて問うて云く、「一靈の眞性胞胎を假らざる時如何。」師曰く、「未だ是れ妙ならず。」道者云く、「如何なるか是れ妙。」師曰く、「不借借。」道者、珍重して便ち化す。師、頰を示して曰く、

「覺相圓明無相の身、知見を將つて妄に疎親すること莫れ。念異なれば便ち立體に味し。心差へば道と隣を爲さず。情萬法に分てば前境に沈み、識多端に鑿みば本眞を喪す。是の如き句中全く曉會せば、了然として曰く、

て無事なり昔時の人。」

僧云く、「陸巨大夫。南泉に問ふ、「姓は甚麼ぞ。」南泉曰く、「姓は王。」巨云く、「王還つて。眷屬有りや也た無しや。」南泉曰く、「四臣味さず。」巨曰く、「王何の位にか居す。」南泉曰く、「玉殿普を生す」といふを擧して師に問ふ、「玉殿普生する意旨如何。」師曰く、「正位に居らす。」僧云く、「八方來朝の時如何。」師曰く、「他禮を受けず。」僧云く、「何ぞ朝することを用ふ。」師曰く、「違ふ時は則ち斬る。」僧云く、「違ふは是れ臣分上。」未審し君位如何。」師曰く、「樞密も旨を得ず。」僧云く、「恁麼ならば則ち變理の功全く臣相に歸す。」師曰く、「備還つて君位を知るや。」僧云く、「外方には敢て論量せず。」師曰く、「如是如是。」

僧問ふ、「學人、通身是れ病、請ふ師醫せよ。」師曰く、「醫せず。」僧云く、「甚麼と爲てか醫せざる。」師曰く、「汝をして生を求むるに得ず、死を求むるに得ざらしむ。」

①涅槃經。詳しくは大般涅槃經と云ふ、四十卷、曇無讖の譯、大乘の涅槃經にして、釋尊入滅の際、大乘に向つて、最後に説かれたる大乘の教義なり、同二十一高貴德王菩薩品に曰く、譬へば河あり、第一の香象能く底を得る、則ち名けて大となすが如し。聲聞緣覺より十住の菩薩に至るまで佛性を見ず、名けて涅槃となすも大涅槃には非ず、若し能く了了に佛性を見れば、名けて大涅槃となす、是の大涅槃は唯だ大香象のみ能く其の底を盡す。大香象とは諸佛を謂ふ」と。
②不取。俗に「いえ、どう致しまして」といふ程の意。
③一裘。裘は皮衣なり、今は只だ一衣といふことの意。
④立脱。立脱といふに同じ、立ちながら死するなり、坐禪儀に「坐脱立亡も此の力に一任す」とあり。
⑤一靈の眞性。虛靈不昧の眞如法性のこと、即ち自己本具の心性をいふ。
⑥珍重。人の相別るゝに臨んで互にいふ語にして、俗に「御機嫌よう」といふが如し。
⑦陸巨大夫。宣州の刺史、南泉普願に嗣法す、傳燈十、會元四に見ゆ。
⑧南泉。南泉普願、南嶽下、支那鄧州新郷の人、俗姓は王氏、大隴山大慧に就いて得度、性相の學を究めたるも、後馬祖道一の室を叩きて茶語を忘するに至る、貞元十一年池陽の南泉に禪院を構へ、山を下らざること三十年、機鋒峻烈、太和八年十二月二十五日寂す、壽八十七。
⑨眷屬。眷は顧なり、屬は續なり、恩愛相連續するをいふ。

衆生還つて此の病ありや也た無しや。師曰く、人人盡く有り。僧云く、和尚還つて此の病有りや也た無しや。師曰く、正に起處を覓むるに得ず。僧云く、一切衆生甚麼と爲てか病まざる。師曰く、一切衆生若し病まば即ち衆生に非ず。僧云く、未審し諸佛還つて此の病有りや也た無しや。師曰く、有り。僧云く、既に有り、甚麼としてか病まざる。師曰く、伊が惺惺なるが爲なり。

僧問ふ、沙門は豈に是れ大慈悲を具する底の人に非ずや。師曰く、是。僧云く、忽ち六賊の來るに遇ふ時如何。師曰く、亦須らく大慈悲を具すべし。僧云く、如何が大慈悲を具せん。師曰く、一劍揮盡す。僧云く、盡して後如何。師曰く、始めて和同を得。

僧師に問ふ、眉と目と還つて相識るや也た無しや。師曰く、相識らず。僧云く、甚麼としてか相識ざる。師曰く、同じく一處に在るが爲なり。僧云く、慙慙ならば則ち分たす。師曰く、眉は且つ是れ目にあらず、目は且つ是れ眉にあらず。僧云く、如何なるか是れ目。師曰く、端的にし去る。僧云く、如何なるか是れ眉。師曰く、曹山卻つて疑ふ。僧云く、和

尚什麼としてか卻つて疑ふ。師曰く、若し疑はざれば即ち端的にし去らん。僧問ふ、五位 賓に對する時如何。師曰く、汝即今那箇の位をか問ふ。僧云く、某甲偏位中より來る、請ふ師、正位中に向つて接せよ。師曰く、接せず。僧云く、甚麼と爲てか接せざる。師曰く、恐らくは偏位中に落ち去らん。師卻つて僧に問ふ、祇接せざるといふが如き、是れ賓に對するか、是れ賓に對せざるか。僧云く、早く是れ賓に對して了れり。師曰く、如是如是。

僧問ふ、萬法何より生ずるや。師曰く、顛倒より生ず。僧云く、顛倒せざる時、萬法何にか在る。師曰く、在り。僧云く、甚麼の處にか在る。師曰く、顛倒して作麼かせん。

①四臣。十八史略卷の一に曰く、齊の威王の曰く、十二諸侯皆來朝す。檀子といふものあり、南城を守らしむ。黔子といふものあり、高唐を守らしむ。黔夫といふ者あり、徐州を守らしむ。種首といふものあり、盜賊に備へしむ。此の四臣は將に千里を照す。禮記禮運篇の注に曰く、左輔右弼と前疑と後丞とを四輔となす。

②玉殿普生。杜詩集註卷の第三橋陵の詩に曰く、石門雷霹白く、玉殿毒普青し。

③東朝。朝は「あつまる」と訓じ、臣の君前に出仕するをいふ。

④未審。「未だ審かにせず」と訓み、疑ひ且つ問ふときの語なり。

⑤極密。宋代には天下の武事を執掌せし最高官なり。五代に

は宰相の職。②變理。とものへ、やはらぐ、即ち天下をよく治むること。③古人。江西馬祖の法嗣、澧州茗谿の道行禪師を指す。傳燈六に曰く、師、有る時曰く、我に大病有り、世の醫する所に非ず」と。會元三に出づ。

④撒篋。撒は棄なり、篋は篋に作る、藁も亦棄、群りあつまること。⑤惺惺。了慧の貌。⑥慈悲。能く他に樂を與ふるを悲といひ、能く他の苦を救くを慈といふ。

⑦六賊。色聲等の六塵。眼等の六根を賊として功能の法財を劫掠するが故に喩へいふなり。

⑧端的。端は正、的は明白の義、故に正確分明の義なり。⑨五位。洞山良价の作、正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼

中到、正は平正の意にて平等一如の本體界をいひ、偏は偏頗の意にて、生滅變遷極りなき現象差別界をいふ、正偏同向の妙旨をあらはせるもの、即ち五位となす。

⑩賓。來機即ち學人のこと。⑪顛倒より生ず。淨名經六觀衆生品に曰く、又問ふ、善不善は孰れか本となるや。答へて曰く、身を本となす。又問ふ、身は孰れか本となすや。答へて曰く、貪欲を本となす。又問ふ、貪欲孰れか本となす。答へて曰く、分別虛妄を本となす。又問ふ、分別虛妄孰れか本となす。答へて曰く、顛倒の想を本となす云云。

⑫香象。印度に住む象の一種にして、此の象の牙は、雷鳴の時には美はしき花を生ずると云ふ。

僧問ふ、「不萌の草甚麼としてか能く 香象を藏するや。」師曰く、「閻黎幸に是れ 作家、又曹山に問うて作麼かせん。」

僧問ふ、「三界 擾々、六趣 昏々、如何が色を辨せん。」師曰く、「色を辨せざれ。」僧云く、「甚麼としてか色を辨せざる。」師曰く、「若し色を辨せば即ち昏し。」

師、鐘聲を聞く、乃ち曰く、「阿耶阿耶。」僧問ふ、「和尚甚麼をか作す。」師曰く、「我が心を打著す。」僧無對。(五祖の戒 代つて云く、「賊と作る人、心虚なり。」)

師 維那に問ふ、「甚麼の處よりか來る。」云く、「醋槽を牽いて去り來る。」師曰く、「或は險處に到らば又作麼生か牽かん。」維那無對。(雲居代つて云く、「正に好し力を著くるに。」疎山代

つて云く、「切に須く放卻して始めて得べし。」

師、一日 僧堂に入つて火に向ふ。僧有り云く、「今日好寒。」師曰く、「須らく知るべし不寒の者有ることを。」僧云く、「誰れか是れ不寒の者。」

師、火を 笑んで之を示す。僧云く、「人無しと道ふこと莫くんば好し。」師、火を抛下す。僧云く、「某甲 這裏に到つて卻つて 不會。」師曰く、「日寒潭を照して明更に明なり。」

僧問ふ、「萬法と侶たらざる者は是れ甚麼人ぞ。」師曰く、「汝道へ 洪州城裏如許多の人、甚麼の處にか去る。」

僧問ふ、「如何なるか是れ無刃の劍。」師曰く、「淬鍊して成す所に非ず。」僧云く、「用ふる者如何。」師曰く、「逢ふ者は皆喪す。」僧云く、「逢はざる者如何。」師曰く、「亦須らく頭落つべし。」僧

作家。唐宋時代は詩文盛にして、詩文を巧に作る者を作家と稱して尊びたり、轉じて伶俐の人を稱するに至れり。

三界。一切衆生の生死輪廻する處にして、欲界、色界、無色界なり、又佛界、衆生界、心界をも云ふ、今は前者の謂なり。

擾々。騒ぎ亂るゝ貌。

趣は趣向の義にして、衆生の業力に依りて生を受けて趣く處を云ふ、又六道とも云ふ、即ち天上、人間、畜生、修羅、餓鬼、地獄これなり。

昏々。不明の貌。

阿耶。阿は發聲の助語、古語に事の甚だ切なる皆阿耶と稱すと。

代つて曰く、之を代語といふ、古則公案を擧し、古人無語の處に至つて自ら代つて語を下すをいふ。

維那。維は綱維の義にして、僧衆を統ぶるを云ふ、那は梵語、羯磨陀那の略、知事、授事と譯す、僧衆の雜事を司り、及び之を指授する義にて梵漢兼擧の名なり。

醋槽。醬油類を入るる木舟なり。

雲居。雲居道膺、曹洞宗、支那幽州玉田の人、姓は王氏、幼にして范陽の延壽寺に於て出家す、二十五歳にして諸國に遊歴し、洞山に行き、真淨禪師に謁す、後三峯庵に住す、時に洞山の激發に依りて大悟す、後雲居山に住するや、四衆至り參じ、洞山の宗風大いに振ふ、唐の昭宗皇帝天復二年正月三日寂す、諡して弘覺禪師と號す。

僧堂。具に聖僧堂と云ふ、又雲堂、禪堂、選佛堂とも稱す、大衆の常に起臥し坐禪遊道する所となす、無相無願を相となす、是の相は、生なく滅なく、染なく淨なく、法界寂靜にして、猶ほ虚空の依止する所なきが如し。

托子。又藥子に作る、茶碗を受ける臺なり、俗に云ふ茶托のこと、チヤツ。

幻本何れか。眞云々。圓覺經普賢菩薩章に、「佛の言く、一切衆生種々の幻化は皆如來圓覺妙心より生ず、猶ほ虚空の空に隨つて有るが如し、幻華滅すと雖も空性は壞せず、衆生の幻心は隨つて幻に依つて滅す、諸幻盡く滅し覺心は不動、幻に依つて覺と説くも亦名けて幻となす。」

法眼。法眼文益禪師、法眼宗の祖、羅漢桂琛の法嗣。

即心即佛。心佛一體にして差別なきの意、即心是佛、是心即佛と云ふも同じ、公案、五

る所を云ふ。

癡。擧なり。

這裏。這は「此」と同じ、這裏は「このうち」又は「こゝ」といふ程の意なり。

不會。會得せずの意、俗に「わかりません」といふ程の意。

洪州城。支那江西省にあり。

淬鍊。淬は火を滅するの器なりといひ、火と水と合するをいふといふ。案するに淬は燒いて水中に入れ、以て之を堅くするの謂なり。鍊は五金を鑠合するなりといひ、又金を治するなりといふ。

色相の意、青黃、美醜等の一切の色をいふ。形相の意、高低長短等の形を云ふ。

即相即眞。「相に即して即ち眞」と訓む、般若經十三顯示世間品に、「諸天子各々佛に白して言さく、云何ぞ相となす。佛の言く、諸法は空を以

云く、「逢ふ者皆喪することは固より是、逢はざる者甚麼としてか頭落つ。」
師曰く、「道ふことを見ずや、能く一切を盡す」と。僧云く、「盡して後如何。」師曰く、「方に此の劍有ることを知る。」

僧問ふ、「相に於て何れか真なる。」師曰く、「即相即真。」僧云く、「當に何が顯示すべき。」師、托子を提起す。

僧問ふ、「幻本何れか真なる。」師曰く、「幻本元真なり。」法眼別して云く、「幻本真ならず。」僧云く、「幻に當つて何れをか顯さん。」師曰く、「即幻即顯。」法眼別して云く、「幻即ち當るなし。」僧云く、「恁麼ならば則ち始終幻を離れざるや。」師曰く、「幻相を覓むるに不可得なり。」

僧問ふ、「即心即佛は即ち問はず、如何なるか是れ非心非佛。」師曰く、「兔角無きことを用ひす、牛角有ることを用ひす。」

問ふ、「如何なるか是れ常在底の人。」師曰く、「恰も曹山が暫く出づるに遇へり。」云く、「如何なるか是れ常在不在底の人。」師曰く、「得難し。」

僧問ふ、「擬せば豈に是れ類せざらんや。」師曰く、「直に是れ擬せざるも亦是れ類す。」僧云く、「如何なるか是れ異。」師曰く、「痛痒を知らざることを知る。」

なし。」

人あり問ふ、「古人曰く、『人々悉く有り』と、弟子塵蒙にあり、還つて有りや也た無しや。」師曰く、「手を過し來れ。乃ち指を點じて曰く、『一二三四五足れり。』」

僧問ふ、「魯祖面壁す、用つて何事をか表はす。」師手を以て耳を掩ふ。

僧問ふ、「右に言へること有り、未だ一人も地に倒れて地に因つて起きさすといふこと有らず。」如何なるか是れ倒。師曰く、「首は即ち是なり。」

僧云く、「如何なるか是れ起。」師曰く、「起なり。」

僧問ふ、「子歸つて父に就いて、甚麼としてか父全く顧みざる。」師曰く、「理合に是の如くなるべし。」僧云く、「父子の恩何れにかある。」師曰く、「始めて父子の恩を成す。」僧云く、「如何なるか是れ父子の恩。」師曰く、「刀斧斫れども開けず。」

問ふ、「靈衣掛けざる時如何。」師曰く、「曹山、孝滿。」云く、「孝滿の後如何。」師曰く、「曹山は好し顛酒するも。」

問ふ、「承る、教に言へることあり、『大海は死屍を宿めず』と、如何なるか是れ。」

燈會元、馬祖章に、僧問ふ、和尚甚麼としてか即心即佛と説く。師曰く、小兒の啼を止むるがためなり。曰く、啼き止む時如何。師曰く、非心非佛。曰く、此の二種を除く人來るとき如何か指示せん。師曰く、伊に向つて不是物と道はん」とあり。

免角無きこと云々。古尊宿語錄十二、南泉曰く、先祖即心即佛と説くと雖も、是れ一時の問語にして空擊黃葉啼を止むるの説、若し即心即佛といはば、免馬に角あるが如く、若し非心非佛といはば牛羊に角なきに似たり。

古人。仰山慧寂禪師を指す。類聚日月門に云く、長沙景岑禪師、一日仰山と月を散ぶの次、仰山曰く、人々盡く這箇の事なり、祇だ是れ用ひ得ず云々。」

蒙塵。蒙は被ること、塵埃を被りて身を汚染せらるること云ふ。又天子が宮闈を出でて困難せらるることをも云ふ。

魯祖面壁。魯祖は寶雲禪師のこと、馬祖道一の法嗣。從容錄第二十三則、魯祖凡そ僧の來るを見れば、便ち面壁す、南泉聞いて云く、我れ尋常に他に向つて空劫以前に承當せよ、佛未だ出世せざるときに、會取せよと道ふすら尙ほ一箇半箇を得ず、他恁麼ならば驢年にし去らん」とあり。

古に言へること有り云々。傳燈一第四祖優婆塞多尊者の傳に曰く、「覺正法を害せん」とす、璣珞を持し之を尊者の頸に懸く、尊者乃ち人狗蛇三屍を取り、化して華鬘となして覺を慰諭して云く、乃至偈を説いて曰く、若し地に因つて

るか是れ海。師云く、「萬有を包含す。」僧云く、「什麼と爲てか死屍を宿めざる。師曰く、「氣を絶する者を著けす。」僧云く、「既に是れ萬有を包含す、甚麼と爲てか氣を絶する者を著けざる。」師曰く、「萬有は其の功に非ず、氣を絶すれば其の徳有り。」僧云く、「向上に還つて事有りや也た無しや。」師云く、「有と道ひ無と道ふは即ち得たり、龍王の劍を按することを爭奈何せん。」問ふ、「何の知解を具してか善能く衆に對して問難せん。」師曰く、「句を呈せざれ。」僧云く、「箇の甚麼をか問難せん。」師曰く、「刀斧斫れども入らず。」僧云く、「能く恁麼に問難す、還つて更に肯はざる者有りや也た無しや。」師曰く、「有り。」僧云く、「是れ什麼人ぞ。」師曰く、「曹山。」

僧問ふ、「世間甚麼物か最も貴き。」師曰く、「死猫兒頭最も貴し。」僧云く、「甚麼としてか死猫兒頭最も貴きや。」師曰く、「人の價を著くる無し。」

僧問ふ、「無言如何か顯さん。」師曰く、「這裏に向つて顯すこと莫れ。」僧云く、「甚麼の處に向つてか顯さん。」師曰く、「昨夜 牀頭に三文錢を失卻す。」

僧問ふ、「日未だ出でざる時如何。」師曰く、「曹山也た曾て恁麼にし來る。」

僧云く、「日出で、後如何。」師曰く、「猶ほ曹山が半月程に較れり。」

倒るれば還つて地に因つて起つ、地を離れて起を求めば遂に其の理無けん」と云云。

⑤ 靈衣。喪服のこと、即ち自己の喪中にあるときに著する衣なり。

⑥ 孝滿。父母の喪に際しては三年間、喪服を着けて身を慎む、之を孝子といふ、孝滿は其の喪の畢りたるをいふ、俗に「いみわけ」のことなり。

⑦ 教に言へることあり云々。涅槃經に云く、「譬へば大海の八不思議あるが如し、何をか八となす、一には漸々に轉た深し。二には深うして底を得ること難し。三には同一鹹味。四には潮限を過ぎず。五には種種の寶藏あり。六には大身の衆生中に在つて居住す。七には死屍を宿さず。八には一切萬流大雨之に投ずれども増さず減せず。」

師、僧に問ふ、「甚麼をか作す。」僧云く、「掃地す。」師曰く、「佛前に掃するや、佛後に掃するや。」僧云く、「前後一時に掃す。」師曰く、「曹山が與に鞞鞋を過し來れ。」(五祖の戒、僧の語に代つて云く、「和尚是れ何の心行ぞ。」)

僧問ふ、「璞を抱いて師に投ず、請ふ師 雕琢せよ。」師曰く、「雕琢せず。」僧云く、「甚麼としてか雕琢せざる。」師曰く、「須らく知るべし、曹山 好手なることを。」

僧問ふ、「如何なるか是れ曹山の眷屬。」師曰く、「白髮連頭に戴く、頂上一枝の花。」

僧問ふ、「古徳道く、「盡大地惟だ此の人のみにあり」と、未審し是れ甚麼人ぞ。」師曰く、「第二月あるべからず。」僧云く、「如何なるか是れ第二月。」師曰く、「也た老兄の 定當せんことを要す。」僧云く、「作麼生か是れ第一月。」師曰く、「險。」

僧問ふ、「學人十二時中如何か 保任せん。」師曰く、「蠱毒の郷を經るとき、水一滴を沾著し得ざるが如くせよ。」

① 龍王。龍は靈物なるが故に、尊んで王と稱す、唯陀龍王等八大龍王の如きをいふ。

② 知解。知見解會の意。

③ 死猫兒頭。死んだ猫の頭骸を云ふことにて、何等價値なきもの、意。此處には價を著くる能はざる貴重の義にとるべし。

④ 牀頭。頭は助字、牀は禪床のこと。

⑤ 掃地。地を拂ふて清潔ならしむること。

⑥ 鞞鞋。説文に「鞞は小兒の履なり」とあり。輟脚録第十八に云く、「西浙の人草を以て鞋となす、而して跟なきを名けて鞞鞋となす」と、即ち草履のことなり。

⑦ 心行。心やりといふこと、俗に「了簡」といふ程の意。

⑧ 璞。未だ磨かざる玉、未發の佛性に喩ふ。

僧問ふ、「如何なるか是れ。法身の主。」師曰く、「秦に人無しと謂へり。僧云く、「這箇使ち是なること莫しや否や。」師曰く、「斬。」

僧問ふ、「何れの道伴に親んでか常に未聞を聞くことを得ん。」師曰く、「同じく一被蓋を共にす。」僧云く、「此れは猶ほ是れ和尚聞くことを得、如何なるか是れ常に未聞を聞かん。」師曰く、「木石に同じからず。」僧云く、「何者か先に在り、何者か後に在る。」師曰く、「道ふことを見ずや、常に未聞を聞くことを。」

僧問ふ、「國內劍を按する者は是れ誰ぞ。」師曰く、「曹山。」(法燈別して云く、「汝は是れ恁麼の人にあらす。」)僧云く、「何の人をか殺さんと擬す。」師曰く、「但だ一切總に殺すこと有り。」僧云く、「忽ち本の父母に逢はゞ又作麼生。」師曰く、「甚麼をか揀ばん。」僧云く、「自己を争奈何せん。」師曰く、「誰か我れを奈何せん。」僧云く、「什麼としてか殺さざる。」師曰く、「手を下す處無し。」

僧問ふ、「家貧しうして。劫に遭ふ時如何。」師曰く、「底を盡し去る能はず。」僧云く、「甚麼としてか底を盡し去る能はざる。」師曰く、「賊は是れ

家親。」

問ふ、「一牛水を飲んで五馬嘶かざる時如何。」師曰く、「曹山口を忌むことを解す。」又別に曰く、「曹山孝滿。」

僧問ふ、「常に生死海中に在つて沉没する者は是れ甚麼人ぞ。」師曰く、「第二月。」僧云く、「還つて出離を求むるや也た無しや。」師曰く、「也た出離を求む、只だ是れ路無し。」僧云く、「出離せば什麼人か伊を接待せん。」師曰く、「鐵枷を擔ふ者。」

僧問ふ、「雪、千山を覆ふ、甚麼としてか。孤峰不白なる。」師曰く、「須らく知るべし、異中の異有ることを。」僧云く、「如何なるか是れ異中の異。」師曰く、「諸山の色に墮せず。」

僧舉す、「藥山僧に問ふ、「年多少ぞ。」云く、「七十二。」山曰く、「是れ七十二なりや。」云く、「是。」山使ち打つと。此の意如何。」師曰く、「前箭は可なるに似たり、後箭は人を射ること深し。」僧云く、「如何が此の棒を免れ得ん。」師曰く、「王勅既に行はれ、諸侯道を避く。」

僧 香嚴に問ふ、「如何なるか是れ道。」香嚴曰く、「枯木裏の龍吟。」僧

① 離球。影は刻なり、玉を磨く、之を球といふ。

② 好手。上手の意にて、巧妙なる手段を用ひて事に當るをいふ。

③ 古德道く云々。此の公案、禪林類聚日月門に出づ、古德は何人なるや、未だ詳かならず。

④ 定當。承當に同じ、肯定會得の義なり。

⑤ 保任。保護任持の義。

⑥ 蠱毒。本草に時珍が曰く、「蠱毒を造るは百蟲を以て皿裏の中に置き相啖食せしむ、年を経て之を開げば、必ず一蟲盡く諸蟲を食ふ有り、之を名けて蠱毒といふ」と、極めて烈しき毒藥なり。

⑦ 法身。三身は法身、報身、應身これなり。

⑧ 秦に人なし云々。左氏傳、文公十三年秦の大夫驍朝士會に

謂つて曰く、于秦に人なしと謂ふことなし云々。

⑨ 同じく一被蓋云々。後漢書列傳四十三、姜肱字は伯淮、兄弟同被にして寢ぬ云々。

⑩ 劫は「おびやかす」と訓む、公にして自ら取るを劫といふと。又曰く、劫は強取なりと。

⑪ 一牛。一牛は心王に喩ひ、五馬は五根に喩ふ。

⑫ 常に生死海中に在つて云々。涅槃經三十二、師子吼品に云く、「善男子生死大海亦復た是の如し、七種の人あり、乃至一闍提は斷善根と名く、斷善根の故に生死河に没し、出づること能はず、何を以ての故に、信力無きが故に云々。」

⑬ 鐵枷。枷は手かせ、足かせのこと、鐵枷は鐵にて作れるものなり、即ち煩惱妄想は善人の心を束縛して自由を得せし

云く、「如何なるか是れ道中の人。」香嚴曰く、「獨體裏の眼睛。」僧、領せず、乃ち石霜に問ふ、「如何なるか是れ枯木裏の龍吟。」石霜曰く、「猶ほ喜を帯ぶること有り。」僧云く、「如何なるか是れ獨體裏の眼睛。」石霜曰く、「猶ほ識を帯ぶること有り。」又領せず、乃ち師に舉似す。師曰く、「石霜老聲聞、這箇の見解を作す。」因つて頰を示して曰く、

「枯木龍吟眞の見道、獨體識無うして眼初めて明かなり。喜識盡くる時消息盡く。當人那ぞ辨せん濁中の清。」

僧、遂に又師に問ふ、「如何なるか是れ枯木裏の龍吟。」^①「血脈不斷。」云く、「如何なるか是れ獨體裏の眼睛。」師曰く、「乾不盡。」云く、「未審し還つて聞くことを得る者有りや。」師曰く、「盡大地の人、一人も聞かざるものあらず。」云く、「未審し枯木裏の龍吟、是れ何の章句ぞ。」師曰く、「是れ何の章句といふことを知らず、聞く者は皆喪す。」

問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」師曰く、「溝に填ち壑に塞る。」
僧問ふ、「如何なるか是れ師子。」師曰く、「衆獸近づくことを得ず。」僧云く、「如何なるか是れ師子兒。」師曰く、「能く父母を呑む。」僧云く、「既に是れ衆

① 孤峰は山の重疊せる處に特に一段と高く聳ゆる峰を云ふ。
② 葉山は支那湖南省澧州洞庭湖畔にあり、こゝは葉山惟嚴禪師、曹原行思の法嗣。
③ 香嚴。香嚴智閑、鴻仰宗、支那青州の人、幼にして世を厭ひ、百丈懷海に投ず、百丈遷化の後、鴻山靈祐禪師に従うて參究し、後鴻山を辭して南陽の武當山に入り、慧忠國師の遺跡に菴居し、一日庭を掃除する次で、瓦礫の竹に當りて音を作すを聞いて忽然として大悟し、遂に鴻山の法を嗣ぐ、後香嚴山に住し、鴻山の宗風を擧揚す、鶻燈大師と諡す、偈頌二百餘篇あり。

④ 枯木裏の龍吟。枯木は死に喩へ、龍吟は活に喩ふ、死中に大活現成せる有様を云ふ、龍吟は枯木に風の吹いて鳴る聲

獸近づくことを得ず、甚麼としてか卻つて兒に呑まる。師曰く、「豈ぞ道ふことを見ずや、子若し哮吼せば、祖父俱に盡さん」と。僧云く、「盡きて後如何。」師曰く、「全身父に歸す。」僧云く、「未審し祖、盡くる時、父何れの所にか歸す。」師曰く、「所も亦盡く。」僧云く、「前來甚としか道ふ、全身父に歸す」と。師曰く、「譬へば王子の能く一國の事を成すが如し。」又曰く、「閑黎、此の事孤滯することを得ざれ、直に須らく枯木上に更に些子の花を撒すべし。」
問ふ、「纔かに是非あれば、紛然として心を失する時如何。」師曰く、「斬斬。」
師、^⑤杜順と^⑥傅大士との作る所の法身偈を讀んで乃ち曰く、「我が意は與麼に道ふことを欲せず。」門弟子別に之を作らんことを請ふ。既に

を云ふ、情識滅盡の妙用、靜中の動、死中の活に喩ふ、獨體裏の眼睛又同意。
⑤ 石霜楚圓。臨濟宗支那全州李氏の子、年二十二にして湘山隱靜寺に依つて出家し、汾陽善昭の道望を聞き、行きて謁す、汾陽、一見して之を器とす、而も二年未だ入室を許さず見る毎に罵詈し、訓ふる所は皆流俗の鄙事のみ、師一夕之を訴ふるに切なり、汾陽熟視して罵倒し杖を擧げて之を逐ふ、師聲を放ちて、救を伸べんと欲す、汾陽其の口を掩ふ、此に於て忽然大悟す。爾後諸方を游歴し潭州石霜に遷り、更に南嶽の莊嚴、潭州の興化等に歴住す、仁宗康定元年正月五日寂す、年五十四、慈明禪師と諡す。
⑥ 血脈不斷。血統相承くるないふ。

⑦ 乾不盡。乾は、「かわく」と訓み、乾き切らずの意。
⑧ 道ふことを見ずや云々。類聚獅象門に曰く、「若し哮吼すれば祖父父母俱に盡く。曰く、只だ祖父母の如きは還つて盡くるや也た無や。師曰く盡く。」
⑨ 些子。些少と同意にて、「少し」又は「多少」の意。
⑩ 纔かに是非あれば云々。三祖僧璨大師信心銘の語、云く、「二見に住せず、慣んで追尋することなけれ、纔かに是非あれば、紛然として心を失す。」
⑪ 杜順。唐の法順、姓は杜氏、萬年の人、十八にして出家、聖僧道珍に依つて定法を受け、神驗を現す、正觀十四年坐亡、法界觀門一卷、妄盡還源觀一卷を著す、以て華嚴宗の鼻祖となす。一説に文殊の化身なりといへり。類聚祖偈門に

偈を作り、又之を註釋す。其の詞に曰く、

「渠本是れ我れにあらす、(我れに非ず。)

は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず。」

渠。法身を指す。

空王。佛の異名、法を空法といひ、佛を空王といふ。一切の邪執を空無するを涅槃城に入る要門とすればなり。

何ぞ雁を假つて云々。前漢書蘇武傳に云く、匈奴詭りて武死すといふ、後漢使至る、單子に謂つて言く、天子上林に射、中に雁を得、足に帛書の係るあり、武等其の澤中に在りと云ふ云々。

白雲。巴歌、共に楚の俗歌なり。楚宋玉、楚王に對へて云く、客鄢中に歌ふ者あり、其の始めを下俚巴人と曰ふ、國中屬して和するもの數千人、其の陽歌蕩露をなす、國中和するもの數百人、其の白雪陽春をなす、國中屬して和するもの數十人のみ、乃至是を以

出づ。法身の偈に云く、「懷州の牛禾を喫ひ、益州の馬腹脹る、天下に醫人を覓めて、猪の左膊の上に灸す。」

傳大士。支那東陽烏傷縣の人、蕭齊建武四年五月八日に生る、名は龔、字は支風、姓は傳、別に善慧大士と號し、世に傳大士、雙林大士、東陽大士とも稱す、十六にして劉氏の女妙光を娶りて普建、普成の二子を生む、二十四にして松山に隠れて修道し、山下に雙林寺を建て又佛經を寫す、陳の大建元年四月二十四日卒す、年七十三、遺著に善慧大士錄一卷、心王銘あり、就中心王銘は四言の韻文にして禪門偶頌の妙を盡せるもの、盛に世に行はる。一説に彌勒の化身なりといふ。一偈を説いて曰く、空手鋤頭を把り、歩行して水牛に騎る、人

承當。自ら會得領悟すること云ふ。

諱當。諱は「あきらか」と調す、的當といふも同じ。

奴兒婢子邊。奴兒は下男のこと、婢子は下女、即ち下賤なる地位、今は向下に譬ふ。

帥。主なり、率なり、統なり、凡そ兵者を主るものないふ。

致。招致の義。

鄂。春秋戰國時代の楚の都の名。

苦。懇切の義。

大梅。明州大梅山法常禪師、馬祖道一の法嗣。傳燈七に云く、驢官僧をして去つて請じ出さしめんとす。師偈あり、曰く、摧殘せる枯木、乃至道尋することなし。

四禁。次の四、莫行、不掛、何須、切忌の否定禁止の語を以てせるが故にいふ。

心處。思慮下度の意。

是れ 塔下の漢。僧云く、「請ふ、師上塔に接せよ。」師曰く、「月落ちて後來れ、相見せん。」

師、垂語して曰く、「一人有り萬丈の崖頭に向つて騰つて身を直下す。此れは是れ甚麼人ぞ。」衆無對、道延出でて云く、「存せず。」師曰く、「箇の甚麼をか存せざる。」延云く、「始めて 撲

不碎なることを得たり。」師深く之を肯ふ。

僧、「西園一日自ら浴を焼く次、僧問ふ、「何ぞ 沙彌を使はざる。」西園掌を撫すること三下

す」といふを舉し、師に問ふ。師曰く、「一等に是れ拍手撫掌、中に就いて西園奇怪なり。俱胝

一指頭の禪、蓋し 承當の處 諦當ならずと爲す。」僧卻つて師に問ふ、「西園掌を撫す、豈

に是れ 奴兒婢子邊の事にあらざらんや。」師曰く、「是。」云く、「向上更に事有りや也た無しや。」

て唱彌々高ければ其の和する彌々寡し。」

塔下の漢。塔は階に同じ、きだはしの下に居て、未だ堂に上らざるもの。未だ道に入らざるものに喩ふ。

道延。瑯州洞山道延禪師、曹山本寂の法嗣。

撲。うつと調す。

西園。南嶽西園寺曇藏禪師、馬祖道一の法嗣。傳燈卷八に云く、「師一日自ら浴を開く、乃至撫掌三下。」

沙彌。梵語室羅末尼羅、音譯の訛、沙門、桑門にも作る、勤策男、息慈と譯す、始めて落髮して佛法に入れる男のこと、世俗の染情を息めて群生を濟度せんが爲に慈心を起すをもつて息慈と譯す。

俱胝一指頭禪。俱胝和尚凡そ所問有れば、只だ一指を豎つ、俱胝は天龍和尚の法嗣。

師曰く、「有り。」云く、「如何なるか是れ向上の事。」師、叱して曰く、「この奴兒婢子。」

南州の 帥南平の鍾王、雅より師の有道を聞いて禮を盡して之を 致せども赴かず。但だ偈を書して使者に付して曰く、

「摧殘せる枯木寒林に倚る。幾度か春に逢ふて心を變せず。樵客之を見て猶ほ採らず。 郢人何事ぞ 苦に追尋することを」と。(鍾氏請すれども起たず、但だ 大梅の山居の頌を寫し、之に答ふ。)

師 四禁の偈を作る。曰く、「心處の路を行くこと莫れ。 本來の衣を掛けざれ。何ぞ須ひん 正恁麼。切に忌む 未生の時。」

學人に示す偈に曰く、「縁に従つて薦得すれば相應疾し。體に就いて消停すれば力を得ること遅し。警起すれば本來處所なし。 吾が師暫く不思議と説く。」

衆に示して曰く、「僧家此等の衣線下に在り、理、須らく向上の事に會通すべし。等間と作すこと莫れ。若し也た承當の處分明かならば、即ち他の諸聖を轉じて自己の背後に向はしめて、方に自由を得べし。若し也た轉不

● 本來の衣。本來は本分又は本地といふも同じ。衣は善人本具の心性に喻へたるなり。

● 正恁麼。正は「まさに」と訓み、恁麼は支那の宋代の俗語にて如是の意。今は法身住著を指す。

● 未生の時。一念不生の時の意。

● 吾が師暫く云々。吾が師は佛を指す。大般若經五百七十八第十理聚分會に云く、「一切法は不可得なり、其の性を推尋するに得べからず、故に一切法は不思議なり云々。」

● 十成。十分成就の意なり。

● 又手。もと支那の俗禮にして合掌(印度の禮)に次ぐとも、又は印度の禮なりともいふ。

● 手を相錯ふることにて、其の錯ふるに左手の親指を中に入れて拳を作り、高き胸の邊に置き、右手の五指を以て覆ふ

得ならば、直饒ひ學び得て 十成なるも、卻つて須らく他の背後に向つて

又手すべし。甚麼の大話をか説かん。若し自己を轉得するるときんば、則ち一切 巖重の境來るも、皆 主宰と作り得てん。假如ひ 泥裏に倒地するも亦主宰と作り得ん。 僧有り、藥山に問ふが如し。曰く『三乘教中

に還つて祖意有りや也た無しや。』答へて曰く、「有り。僧云く、『既に有り、達磨又來つて作麼かせん。』藥山曰く、『只だ有るが爲の所以に來る。』豈に

主宰と作り得て轉得し、自己に歸するにあらざらんや。 經に云ふが如し、『大通智勝佛、十劫道場に坐し、佛法現前せず。佛道を成ずることを得ず』

と。劫と言ふは滯なり。之を十成と謂ひ、亦 斷滲漏と云ふ。只だ是れ十道頭絶す。大果を忘れず、故に云ふ、『守住耽著す』と。名づけて 取

次承當と爲す。我れ常に見る 叢林好んで一般兩般を論ずることを。還つて能く事を成立し得てんや。此等は但だ是れ 向去の事を説いて露布す。

汝見すや、南泉曰く、『饒如ひ十成なるも、猶ほ王老師が一線道に較れり』

と。也た大難事此に到つて、直に須らく仔細にして始めて明白自在なることを得べし。天堂、地獄、餓鬼、畜生を論せず、但だ是れ一切處移易せず、

● 巖重。大般若經三百九十三成熟有情品に曰く、「若しくは生命を害し、若しくは與へざるに取れ、若しくは邪行を欲するは身の巖重、若しくは虚誑の語、若しくは斷間語、若しくは惡惡語と雜穢語、是れ口の巖重云々。」

● 主宰。宰は主なり、制なり、自在制斷の義。

● 泥裏。泥聚耶に作り、無喜樂又は無去處と譯す。或は捺落迦に作り、不可樂と譯す。

● 僧あり。藥山に問ふ云々、傳燈十四、藥山惟嚴禪師章に出づ。

● 三乘教。一は聲聞乘教、二は緣覺乘教、三は菩薩乘教なり、此等三種の機類が迷界を出づるに、各自の適する教法に乗るが故に三乘教と云ふ。

● 經にいふが如し云々。注華經

元是れ舊時の人、只だ是れ舊時の路を行かす。若し忻心あらば、還つて滯著と成る。若し脱得せば、甚麼をか揀ばん。古徳曰く、「只だ恐らくは、輪廻を得ず、汝道へ作麼生」と。只だ今の人の如きは箇の淨潔の處を説き、愛して向去の事を説く。此の病最も治し難し。若し是れ世間蠱重の事は卻つて是れ輕し。淨潔の病は重しと爲す。只だ佛味祖味の如きは盡く滯著を爲す。先師曰く、「心を擬すれば是れ犯戒、若し也た味を得るは是れ破齋」と。且く什麼を喚んでか味と作さん。只だ是れ佛味祖味、纔かに忻心有れば便ち是れ犯戒。若し也た今の破齋破戒を説くが如きは、今三羯磨の時早く了れり。若し是れ蠱重の貪噴癡は斷じ難しと雖も、卻つて是れ輕し。若し也た無爲無事の淨潔は此れ

化城喻品に出づ、大通智勝佛は過去無量時に出現し其の壽命は五百四千萬劫なりと云ふ、此の佛の神通は三世十方に通徹せざるとなきを以て大通と云ひ、而して此の佛の智は一切を覺了して三惑を淨盡し、三乘の人の智に勝れたるが故に智勝と云ふ。此の佛は十劫の間、道場に坐して佛道を成じ、法華經を十六王子に聽かして後、入定すること八萬四千劫なりといふ。
① 斷滲漏。滲漏は煩惱のこと、斷滲漏は二乘の斷見をいふ。
② 守住耽著。時に已到住著の意にも解せらるゝも、多くは單に一偏を嚴守して中道の正見なきを云ふ。
③ 取次承當。取は十二因縁の一、取支とも云ふ、衆生生れて廿歳以後、愛欲の念熾に起り、之を取求する故に、取次

承當となす。
④ 叢林。和合衆の安居同學する處に名づく、即ち大樹の叢生して林となれるが如く、僧侶の衆合せる意なり。
⑤ 向去の事。向上と同じ。
⑥ 南泉。南泉普願禪師の俗姓は王氏なりしを以て、常に自ら王老師と稱せり、故に後人亦南泉を王老師と呼ぶに至る。
⑦ 忻心。忻はよろこぶ、たのしむ。
⑧ 古徳。古代の有徳家の義。即ち古の道人のこと、何人なるや未だ詳ならず。
⑨ 輪廻。輪轉と同じく六趣四生の間を出生入死して絶りなきこと、恰も車輪の廻轉して窮りなきが如きに喩ふ。
⑩ 佛味祖味。佛祖に耽著するをいふ。
⑪ 先師。洞山禪師を指す。
⑫ 三羯磨。受戒する時、羯磨師

乃ち重きと以て加ふること無し。祖師の出世も亦只だ這箇の爲なり。亦獨り汝が爲にあらず、今時等閑と爲すこと莫れ。鷲奴白牯の修行卻つて快し。是れ禪有り道有るにあらず。汝種々に馳走して佛を覓め、祖乃至菩提涅槃及以善惡因果を知らず、幾時か休歇成辨せんや。皆是れ生滅の心なり。所以に鷲奴白牯の兀々無知にして佛を知らず、祖乃至菩提涅槃及以善惡因果を知らず、但だ餓來れば草を喫し、渴來れば水を飲むに如かず。若し能く慙慙ならば成辨せざることを愁へず。道ふことを見ずや、計較し成さず、是れを以て有ることを知る、乃ち能く披毛戴角し、犁を牽き耒を拽いて此の便宜を得て、始めて些子に較れり」と。見すや、彌勒、阿閼及び諸の妙喜等の世界を。他の向上の人

より羯磨の文を唱へ教ふるを、受戒者之に答へて教の如く三度唱ふるを云ふ。
① 無爲。有爲に對す、生滅なく、造作に涉らざるをいふ。
② 鷲奴白牯。鷲奴は猫のこと、牯は牛のこと、寶鏡三昧に、「下劣あるを以て賣几珍御、鷲異あるを以て鷲奴白牯」とあり、無爲無作の境界をいふ。
③ 菩提。梵語、智、道、覺等と譯す、佛陀正覺の智慧即ち佛果のこと。
④ 涅槃。又泥洹ともいふ、滅度、圓寂、寂滅等と譯す、一切の迷妄を脱却して寂靜無爲の安樂を得ることをいふ、即ち佛の悟りなり。
⑤ 兀々。不動の貌。
⑥ 計較。はかりくらぶることにて、思慮分別のこと。
⑦ 耒。耒は田を耕す具、すきのこと、耒は同じく耕作

に用ふる曲木の農具。
① 阿閼。佛名、梵語又阿閼婆、阿閼鞞耶に作る、無動、不動、無怒と譯す、此の佛は過去久遠劫の昔、大日如來の感化に依り、發願修行成佛して東方に善快といへる淨土を立て、現に其の土にありて說法度生すといふ。
② 變易生死。分段生死に對す、見思の惑を斷絶するも塵沙無明の惑あるを以て此の生死あるなり。變易とは前の形を變じて異なる形を取ることにて、三國土(凡聖同居土、方便土、十方土)の中に於て同居土の依身變じて、方便土の空の依身に變り、方便土の空の依身變じて、實報土の中道の依身に易る如きいふ。
③ 三塗。塗は塗炭に苦しむの意、地獄を火塗道、餓鬼を刀塗道、畜生を血塗道を云ふ。

に喚んで無慚愧懈怠菩薩と作し、亦是變易生死と曰はるゝことを。尙ほ恐らくは是れ小懈怠ならん。本分の事に在つて合に作廢生なるべき。大いに須らく仔細にして始めて得べし。一人一坐具の地有り、佛出世すとも他を侵すことを得ず。恣麼に體會して修行し、快利趁ふこと莫れ。此の事を知らんと欲せば、饒令ひ成佛成祖し去るも、也た只だ這れ是れ。便ち三塗地獄六道に墮し去るも、也た只だ這れ是れ。然も用處没しと雖も、要且つ他を離れ得ず。他の與に主宰と作つて始めて得べし。若し主宰と作り得ば、即ち是れ變易にあらず。若し主宰と作り得ざれば、便ち是れ變易なり。見すや永嘉云く、「莽々蕩々として殃禍を招く」と。問ふ、「如何なるか是れ莽々蕩々として殃禍を招

①六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。
②永嘉。永嘉玄覺、永嘉眞覺禪師と云ふ、姓は戴氏、幼にして出家し、初めは徧く三藏を探り、天台止觀の學を研究す、後、左溪玄朗の激勵を受けて遂に六祖慧能禪師に參じ、僅かに一夜にして印可を受く、故に世に之を一宿覺と云ふ、翌日山を下りて温州に回リ、祖風を宣揚す、唐玄宗皇帝先天二年十月十六日安坐して滅を示す、無相大師と謚す、著に證道歌、永嘉集あり、この語傳燈三十證道歌の文なり。

ますを以て、障又は蓋とも稱し、又この煩惱は主我の精神より出づるが故に漏とも稱す。
③無明。明に對す、眞理に關きこと、即ち吾人の煩惱妄想は般若の智慧を味まずが故に、眞理を明むること能はず、されば煩惱妄想の根本を無明といふ。
④天復辛酉。天復は唐の昭宗の曆號、辛酉は同元年（四月改元）に當り、本朝嗣聖帝の延喜元年、西紀九〇一年に當る。
⑤知事。主事に同じ、前已に註す。
⑥行脚。善友良師を尋ねて諸國を遊行し、山川を跋渉するをいふ、今は遷化の義なり。
⑦祇管。只管に同じ、「ひたすら」と訓み、「一向に」の意。
⑧辰の時。又五つ時ともいふ、

く。曰く、「只だ這箇總に是。」問ふて云く、「如何ぞ免れ得ん。」曰く、「有ること知らば即ち得ん。免るゝことを用ひて作廢かせん。但だ是れ菩提涅槃煩惱無明等、總に是れ免るゝことを要せず、乃至世間麤重の事は、但だ有ることを知つて便ち得ん。免るゝことを要せざれば、免るれば即ち變易し去るに同じ。乃至成佛成祖菩提涅槃、此等の殃禍小ならずと爲す。甚變に因つてか此の如くなる、只だ變易するが爲なり。若し變易せずんば、直に須らく觸處自由にして始めて得べし。」

今の午前八時に當る。
②宴坐。燕坐に同じ、身心靜寂にして坐禪すること。
③臘。法臘の略、又戒臘、夏臘、坐夏ともいひ、出家人得度したる後、安居を経たる年をいふ。

師、天復辛酉の夏に於て、夜知事に問うて曰く、「今日は幾何日月ぞ。」對へて云く、「六月十五日。」師云く、「曹山平生行脚するに、到る處祇管に九十日を一夏と爲す。明日辰の時吾れ行脚し去らん。」時に及んで香を焚き、宴坐して化す。閱世六十二。臘三十七。全身を山の西阿に葬る。元證禪師と謚し、塔を福圓と曰ふ。

國譯撫州曹山本寂禪師語錄卷上終

師に問ふ、「國師三たび侍者を喚ぶ意作麼生。」師曰く、「侍者第二遍回り來つて、某甲、和尚を喚ぶことを信せずと云はん。」

南泉曰く、「未だ胞胎を具せざる時、還つて語有りや也た無しや。」人有り舉して雪峯に問ふ、峯曰く、「有と曰ひ無と曰ふも、則ち三十棒を喫せしめん。」又招慶に問ふ、慶曰く、「從他あれ自ら道ふことを。」又舉して師に問ふ。師曰く、「有り。」云く、「請ふ和尚の傍警。」師曰く、「什麼物を將てか聞かん。」云く、「聾者還つて聞かんや也た無しや。」師曰く、「聾者若し聞くことを得ば則ち耳目を具す。」云く、「什麼人が聞くことを得ん。」師曰く、「未だ胞胎を具せざる者。」

僧問ふ、「教に曰く、『一句能く百千萬の義を吞む』と。如何なるか是れ一句。」師曰く、「針割不入。」

一座主あり、南泉を辭す。泉問ふ、「什麼の處にか去る。」對へて云く、「山下に去る。」泉曰く、「第一に王老師を誘ふことを得ざれ。」對へて云く、「爭か敢て和尚を誘せん。」泉、水を噴いて曰く、「多少ぞ。」座主使ち出で去る。師曰く、「頼也。」

法に喩へたるなり、即ち達磨大師單傳の宗義を宗乘といふ。

①新豐老人玄示す云々。洞山良价禪師曾て新豐山にあり、故に人呼んで新豐老人と云ふ、今の玄示云々は、鳥道、玄路、展手の三路をいふが如し。

②忠國師。南陽慧忠、支那越州諸賢の人、姓は冉氏、六祖慧能に就いて心印を傳ふ、性潯然として自ら天真を樂む、常に南嶽慧思を慕ひ、衡嶽武當山に太一延昌寺を建て、香嚴長壽寺を創立し、大曆十年十二月九日黨子谷(南陽の白崖山)に寂す、大燈禪師と諡す。

③侍者。師長の左右に常侍して、其の命に順ふて給仕輔佐する役の名、此れに五種あり、呼んで五侍者といふ。

④尊負。尊は孤に通ず、「そむく」の意。

①瀉山、一日院主を喚ぶ。院主來る。山曰く、「我れ院主を喚ぶ、汝來つて什麼をか作す。」院主無對。師代つて曰く、「也た知る、和尚某甲を喚ばざることを。」又侍者をして第一座を喚ばしむ。第一座來る。山曰く、「我れ第一座を喚ぶ、汝來つて什麼をか作さん。」師代つて曰く、「若し侍者をして喚ばしめば、恐らくは來らざらん。」

②僧有り、藥山を辭して郷に歸り去る。藥山問ふ、「一人有り、遍身紅爛、臥して荆棘の中に在り。」僧云く、「恁麼ならば則ち學人歸り去らず。」藥山曰く、「但だ歸り去ることを知れ、偏に休糧の方を與へん。」問ふ、「如何なるか是れ休糧の方。」山曰く、「毎日堂に上つて一粒の米を咬破せざれ。」師曰く、「只だ古徳の遍身紅爛底の人

③百丈。百丈懷海、支那福州長樂の人、姓は王氏、二十歳、西山慧照に就いて落髮し、南嶽の法朝律師に從つて受具し、廬江に往いて大藏經を閲し、後馬祖に參じて印可を得、四方歸依の道俗洪州新興界の大雄山に一大伽藍を建立し、師を請じて開山となす、百丈山大智壽聖禪寺これなり、師は禪林清規の開創者なり、其の著百丈古清規は既に湮滅して只其の序のみ存す、唐元和九年正月十七日寂す、年九十五、大智禪師と諡す。

④趙州。從諗、南嶽下、支那山東省、曹州鄆郡の人、姓は郝氏。池陽南泉に參じ、師の提撕に依りて契悟す、衆の請に依りて趙州觀音院に住す、早く北方に南嶽の支風を振ふもの、禪師實に其の著しきものとす、時に傳へて趙州の門風といひ、聞くもの信伏せざるものなしと云ふ、乾寧四年十一月寂す、年百二十、眞際大師と諡す。

⑤招慶。泉州招慶院道匡禪師、長慶慧稜の法嗣。

⑥傍警。傍邊一警の義。

⑦教に曰く云々。無量義經十功德品に曰く、佛の言はく譬へば一種子より百千萬を生じ、百千萬中より一々又百千萬を生じ、展轉して無量に至るが故——此の經典も亦是の如し、一法より百千の義を生じ、百千の義中より一々又百千萬の義を生じ、展轉して無量無邊の義に至る。」

⑧針割不入。割は針を以て刺すこと、針を以て割す可き隙間さへなきを云ふ、即ち思慮分別の及ばざる意。

⑨一座主あり云々。一座の主といふ意にて、學識高き教室の

と云ふこと有るが如き、祇だ是れ醜陋底の人。一切の人近づくことを得ず、拈掇の處無し。更に道ふ、臥して荆棘の中に在りと、只だ道へ如今日用に在りと。亦拈掇の處護持保任邊の事と作すこと無れ。時に僧有り、師に問ふ、遍身紅爛の時如何。師曰く、「荷負せよ。」云く、「什麼の人をか荷負せん。師曰く、「紅爛をして闇黎に到らしむこと勿れ。」又問ふ、「醜陋の人と滿身紅爛底の人と、阿那箇か是れ重き。師曰く、「大いに醜陋底の人重し。師又舉して僧に問ふ、「大保任底の人、個の什麼をか保任す。」自ら代つて曰く、「終日背後に在つて曾て、觀著せず。」

俱胝和尚、凡そ詰問あれば唯だ一指を擧す。後に童子有り、因に外人問ふ、「和尚何の法要をか説く。」童子亦一指を擧起す。胝聞いて遂に及

を以て其の指を斷つ。童子負痛號哭して去る。胝復た童子を召す。童子首を回す。胝卻つて指を擧起す。童子忽然として領悟す。胝將に順世せんとす。衆に謂つて曰く、「吾れ、天龍一指頭の禪を得て一生用不盡」と云ひ訖つて寂す。師曰く、「俱胝承當の處、莽鹵なり、只だ一機一境を認め得たり。」

洞山上堂、「道は無心にして人に合ひ、人は無心にして道に合ふ。箇の中の意を識らんと欲せば、一老一不老」と。後に僧舉して師に問ふ、「如何なるか是れ一老。」師曰く、「扶持せず。」云く、「如何なるか是れ一不老。」師曰く、「枯木。」僧師に問ふ、「維摩默然、文殊善しと讚す、未審し還つて維摩の意を稱得すや。」師曰く、「爾還つて虚空を縛得するや。」僧云く、「恁麼ならば

僧をいふ。此の公案傳燈八、南泉傳中に載す。鴻山。鴻山靈祐、鴻仰宗、支那福州長壽の人、姓は趙氏、唐の代宗皇帝大曆六年に生る、十五にして出家し初め建善寺法常律師に従ひ、又杭州龍興寺に於て大小乗の教を研究し、二十三にして百丈懷海禪師に參じ遂に入室して其の法を嗣ぐ、後百丈の命に依り鴻山を開創して化門を張る、唐の宣宗皇帝大中七年正月九日示寂す、年八十三、大圓禪師と説す。院主。寺主又は院宰ともいふ、寺院の事務を主宰する者の意。第一座。法筵又は饗禮の第一筵を云ふ、今は首座のこと、僧堂の前板に於て第一位に坐するが故に第一座と云ふ。藥山。支那湖南省澧州洞庭湖畔にあり、唐の中世に惟嚴禪師此の山に住して、大いに化門を張り、曹原の宗風を擧揚せり。休糧の方。糧は糧に同じ、かてのこと、或は曰く、「遠行して水火不便、或は修行人、縁を省き糧を休せんと欲せば、黃著赤石脂龍骨各々三錢、防風半錢、烏頭一錢を用つて、炮つて石臼内に於て搗くこと一千杵、煉密丸きこと彈子の大きの如くす、遠路に行き喫飯に飽かんとせば、一頓一丸を服せば、五百里を行くべく、二九一千里を行くべし。拈掇。拈は「つまむ」と訓み、掇は拾ひ取る、故に取らるることを云ふ。如今。即今といふが如く、現在の意、「いま」と訓す。阿那箇。阿は助字、那箇は「何

れ、又は、どちら」の意。觀者。著は語を強むる助字、觀は狙と同じく伺ひ見るのこと。俱胝和尚。南嶽下、俗姓を詳かにせず、支那婺州金華の人、初め住菴の時、實際と名づくる一尼來りて問ふ、師答ふること能はず、發憤し庵を棄て、諸方に遊歴して大事を明めんとす、會々山神の夢告に接し、天龍和尚に參す、龍一指を擧て之に示す、師忽然と大悟す、是れより問者あれば必ず只だ一指頭を擧起す、由つて世人俱胝の一指、又は一指頭の禪と稱す。順世。遷化のことをいふ。天龍。大梅法常の法嗣。莽鹵。精密ならざるをいふ。維摩默然云々。此の因縁は維摩詰所説經不二法門品に出づ、曰く、「是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、我等各自説き已んぬ、仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩入不二の法門。時に維摩默然として言なし。文殊師利嘆じて曰く、善哉善哉——文字語言あるなき、是れ眞に入不二の法門。」維摩は維摩經詰又は維摩詰ともいひ、淨名又は無垢稱と譯す、釋尊と同時代の人、印度毗舍離國の長者にして、在家の身を以て菩薩行を修したる人、故に維摩居士ともいふ。二公。維摩、文殊の兩人を指す。維摩の病。維摩經問疾品に曰く、「痲より愛ある時は我が病生ず、是の故に我れ病めり、若し一切衆生病まざることを得れば、我が病滅す、所以は何ん、菩薩衆生の爲の故に生死に入る、生死あれば病あり、若し衆生病を離るること

則ち維摩の意に稱はず。師曰く、「他又争か肯せん。」僧云く、「畢竟何の所歸か有る。」師曰く、「若し所歸有らば則ち彼の二公に同じ。」僧云く、「和尚又作麼生。」師曰く、「爾が維摩の病を思ふるを待つて始めて得ん。」

洞山 棹樹に到る、棹問うて曰く、「來つて什麼をか作す。」山云く、「和尚に親近す。」棹曰く、「若し是れ親近せば、兩片皮を動かすことを用ひて作麼生。」山無對。師曰く、「一子親しみ得たり。」僧、洞山に問ふ、「三身の中阿那身か衆數に墮せざる。」山曰く、「吾れ常に此に于いて切なり。」僧、師に問ふ、「先師道く、吾れ常に此に于いて切なりと、意作麼生。」師曰く、「頭を要せば便ち斫り去れ。」

洞山將に圓寂せんとす。衆に謂つて曰く、「吾れに問名の世に在る有り、誰人か吾が爲に除き得ん。」衆皆無對。時に沙彌出で、「曰く、「請ふ和尚の法號。」山曰く、「吾が問名已に謝す。」師曰く、「古より今に至つて人の辨得する無し。」

無着喫茶の次、文殊玻璃盞を拈起して問ふ、「南方に還つて這箇有りや。」著曰く、「無。」文殊曰く、「尋常什麼を將つてか茶を喫す。」著無對。師代

を得ば、菩薩復た病なし。」
⑦ 棹樹。宣州棹樹慧名禪師、藥山惟儼の法嗣、傳燈十四に出づ。

⑧ 三身。法、報、應の三身。法身とは眞如の理體にして、即ち如來自證の妙理なり。報身とは眞如の理を證悟する所の相好圓滿の色身なり。應身とは衆生の根機に應じて種々の身を現じて教化を施す化身を云ふ。

⑨ 圓寂。圓滿なる寂滅の意。小乘にては涅槃を單に滅無の義に解するより、轉じて僧侶の死を圓寂といふに至れり。

⑩ 問名。「むだ」の意。
⑪ 無着。祖庭事苑卷二に曰く、「延廣が清涼傳に云く、釋の無着、姓は董氏、金輪牛頭山の忠禪師に詣り、心を參受す、後大曆三年の夏五月、台山の嶺下に至る云々。」

つて曰く、「久しく承る、大士劍を按すと、什麼と爲てか一塵に處在す。」

師曰く、「然燈前と謂ふに二種有り、一には未だ有ることを知らず、類血の乳に同じ。一には有ることを知るも猶ほ意の未だ萌さざる時本物を得るが如し。此を名づけて然燈前といふ。一種有ることを知るも、往來、言語、聲色、是非も亦正照の用に屬せず、亦得記せず。類血の乳に同じきはれ漏失邊の事なり。此を然燈後と名づく。直に是れ三際の事盡き、表裏の情忘じて間斷無きことを得、此を始めて正然燈と名づくることを得。乃ち得記と云ふ。」

解釋洞山五位顯訣

(夫れ先師の明す所の 偏正と兼帶とは、等しく先師の本意を用ふ。功の進修の位と、教句に涉るとを明すが爲にあらす。直に是れ 格外の玄談要絶の妙旨なり。祇だ從上の物體現前することを明し、冥に古聖の道に叶ふ。今諸學士の先師の意度を詮揀するを見るに、誤あつて彰なるに似たり。聊か爲に其の差を叙することを免れず。當に媿づべし、其の功を混せざるに在ることを。中に於て、或は位を借つて功を明し、功

⑫ 文殊。文殊師利の略、妙吉祥又は妙德等と譯し、智慧第一と稱せらる。釋尊の右側の蓮座に坐し、頭に五鬘を結び右手に智劍を持し、左手に青蓮華を持す、又獅子に坐するあり。過去無量阿僧祇劫に龍種上尊王佛といひ、又未來に成佛して善現如來といひ、或は現在、北方の常喜世界にありて、歡喜藏摩尼寶積佛と名づくと云ひ、又支那五台山にありて一萬の菩薩と俱なりともいふ。

⑬ 然燈前。曹山三然燈の一、佛本行集經第一品に、「我往昔を念ふに、轉輪聖王の身となり、八億の諸佛に值ふ、皆同一に就して然燈と號す。然は燃と同じ、人々木具の心性を燈明に喩へて云ふ、一に然燈前、二に然燈後、三に正然燈なり。」

を借つて位を明すあり。縁緒多端なり。功時に臨むに在り、語の來勢を見て、來機に負かざれ。妙は佳致に在らんのみ。

正位卻つて偏、偏に就いて辨得すれば是れ兩意を圓にす。

(正位卻つて偏とは、物に對せざるが爲なり。物に對せずと雖も卻つて具す。○正中、用なきを偏と爲し、用を全うするを圓と爲す。是れ兩意なり。問ふ、「如何なるか是れ全。」云く、「顧みざる者得る底の人なり。」此の正位は明より來らず。若しくは佛の出世も也た慈廢、若しくは佛の不出世も也た慈廢。所以に千聖萬聖皆正位に歸して承當す。○正中偏卻つて此の一位に具す、第一に動著することを得ざれ。○學士の物外に獨脱して、衆聖の前に起つと云ふことを、揀して、是れを正位卻つて圓なりといふが如きは、其れ實に正位を屈するなり。此の例語は是れ古人の過跡尚ほ存すと道ふすら、猶ほ未だ語中に語なきことを得ざれ。此れ復た呼んで非正位と爲す。語中に語有るが爲の故に、此れを呼んで病有る兼帶と爲すべし。呼んで相兼帶し來ると爲すことを得ざるのみ。)

偏位偏なりと雖も、亦兩意を圓にす。縁中に辨得すれば、是れ有語中の

無語。

(用處に的を立てずと爲す。的を立てざる時は則ち眞に常用にあらざるなり。○偏位偏なりと雖も亦圓にすとは、用中に物無くして觸れず、是れ兩意なり。用中に就いて明すと雖も、語中傷つかざるが爲に、此れ乃ち竟日道ふて、道はざるが如し。一般に又曰く、「偏位卻つて圓にす」とは、亦縁中に具して觸れざるなり。)

或は正位中より來る者有り、是れ無語中の有語。

(正位中より來るとは縁を兼ねざるなり。藥山曰く、「我れに一句子有り、未だ嘗て人に向つて説かず。」道吾曰く、「相隨ひ來るや」と云ふが如し。此れは是れ他妙に會得す。湖南の觀察使の語の如き此の例甚だ多し。事は須らく合出して尊卑を混することを得ざるべし。呼んで無語中の有語と爲す。又我れに一句子有り、未だ嘗て人に向つて説かず、此れ問答家須らく出すに就いて、乖觸することを得ざれ。乖觸するは則ち有ることとを知らざるが故なり。○句句無語にして尊貴を立てず、左右に落ちざるが故に正中來といふ。正位來とは、正位の縁に涉らざることを明す。又語の例を引けば、「黑豆未だ芽を生ぜざる時作

- ① 三際。三世に同じ、過去を前際、現在を中際、未來を後際と云ふ。
- ② 偏正。五位中前四位を總じていふなり。
- ③ 兼帶。第五位兼中對をいふ。
- ④ 格外の支談。格外の玄旨と云ふも同じ、格外は尋常を超越する意、玄旨は幽玄微妙なる趣きといふこと、要絶の妙旨又殆んど同意。
- ⑤ 揀。言を揀んで解論するなり、即ち事理を評論するをいふ。
- ⑥ 縁緒。俗にいふ「つながり」なり。
- ⑦ 用。作用又は功用、はたらきのこと。
- ⑧ 揀。評論の義。
- ⑨ 無語。有語に對し、言語に定相なきをいふ。
- ⑩ 竟日。終日に同じ。
- ⑪ 藥山云く云々。傳燈十四道古

- の圓智禪師章に曰く、「藥山上堂、曰く、我に一句子あり、未だ嘗て人の爲に説かず、道者出でて曰く、相隨來也、一句子の字は助字。
- ⑫ 湖南の觀察使。傳燈錄十四鄧州柏巖明哲傳に云く、「洞山密師伯と列る、巖問ふ、甚處より來る、巖云く、觀察使姓は甚麼ぞ、山云く、姓を得ず云云。」
- ⑬ 乖觸。乖は「そむく」と訓ず、觸犯といふも同じ。
- ⑭ 黑豆未だ芽を云々。傳燈十四に曰く、「漳州三平の義中禪師、因に人あり、問ふ、黑豆未だ芽を生ぜざる時如何、師曰く、諸佛も亦知らず。」

「廢生」といふが如し。又「一人有りて出入の息なし」と曰ひ、又「未だ胞胎を具せざる時、還つて言句有りや也た無しや」といふが如きは、十方の諸佛の出身處なり。此の例を呼んで無語中の有語となす。○又事を借ること有り。正位の中より來るとは、此の一位は答家は須らく偏位の中に向つて其の體物を明すべし。正位に入つて明すことを得ざれ。此の一句、知らんと要せば、先師新羅の僧に問ふ、「未だ海を過ぎざる時什麼の處にか在る。」無對。自ら代つて曰く、「祇だ今海を過ぐ、也た什麼の處にか在る」といふが如し。又先師の 慎微長老、拄杖を出す語に代つて曰く、「如今出す、也た人の辨得する有りや」といふが如き、此の例縁中に認得すと雖も向去に同じからず。辨不得ならば恐らくは後人收めて功勳に落ち、將つて向上の事と爲さんことを。○諸學士の祖師意を問はば、「特牛兒を生ずるを待つて則ち汝に向つて道はん」と答ふるを揀して、「此れは是れ正位の中より來るといふが如き、此の一例語は、切に呼んで正位の中より來ると爲すことを得ざれ。玄學路中の問答といふべくんば俱に然なり。別には是れ一路あり、又呼んで相兼帶すと爲すことを得ざれ。又顯明と爲すが故に、縦ひ賓主回互するも、

① 又一人有りて出入の云々。傳燈十四に云く、道者の眞智石霜語に問うて曰く、一人あり出入の息なし、速かに還ひ將ち來れ、霜曰く、還はす、吾曰く、何に因つてか道はざる云々。
② 又未だ胞胎を云々。南泉普願禪師の語、前に已に出づ。
③ 先師新羅の僧に云々。洞山縁に云く、師、新羅の僧に問ふ、未だ海を過ぎざる時什麼の處にか在る、無對、自ら代つて曰く、祇だ今海を過る、也た什麼の處にか在る。
④ 洞山縁に曰く、慎微長老手に拄杖を把る、一僧指して云く、無箇の拄杖何の處より出づ、微云く、雲地より出づ、

祇だ呼んで病ある兼帶と爲すことを得。或は偏位中より來る者あり、是れ有語中の無語。

(偏位中より來るとは、則ち縁を兼ぬ。① 即今底呼んで什麼と作してか即ち得んや。無對。先師自ら代つて曰く、「不得不得」といふが如き、此の例亦多し。喚んで有語中の無語となすなり。○語は 四大聲色 中より來つて是非する所に立處せず、故に曰く、「縁中辨得すれば是れ偏位中より來るなり」と。語例を引かば、「什麼物か恁麼にし來る」と。亦「光境俱に忘す、復た是れ何物ぞ」と曰ひ、亦「定慧等しく學んで明かに佛性を見る」と曰ふが如き、此の例亦多し。喚んで有語中の無語となす。○偏位中より來るとは、物に就いて體を明す、「什麼物か恁麼にし來る」といふが如し。又「光境俱に忘す、復た是れ何物ぞ」と。此の一例の語は、功に寄つて位を明す。亦是れ余舊例を擧す。「什麼物か恁麼にし來る」と。此の一例の語、縁中に認得すと雖も、向去に同じからず。又「定慧等しく學んで明かに佛性を見る、此の理如何」と。此の一例の語、亦余は初め例語を擧す。又「光境俱に忘す」と云ふが如き、此れ

師首にす、自ら代つて曰く、如今出づ、也た人の辨得するありや。
① 特牛兒を生ず云々。傳燈錄第十四卷藥山の章に、師一夜燈燭なし、衆に示して曰く、我れに一句子あり、特牛の兒を生ぜんを待つて、即ち汝に向つて還はん、時に僧有り、出でて曰く、特牛兒を生ぜり、自らはれ和尙道はず、師曰く、把燈來、其の僧便ち衆に催すことあり。
② 即今底呼んで云々。洞山縁に曰く、又曰く、人の珠を弄することを知するが如き、手に觸れず地に落ちず、即今往來底喚んで什麼と作してか即ち得ん、無對、師自ら代つて曰く、不得不得。
③ 四大とは地、水、火、風をいふ、此の四は萬物に周遍して至らざる所なく、一切萬物の大原

を教中の則となす。⑤玄學に同せざれば、只だ他の教則に於て宗門中を出でんことを要す。玄學外の事なり。○祇だ、出息衆縁に依らず、入息の縁界に居せずして住するが如し。此の語全く是れ功、縁中に認得するに同せざれば、亦是れ予舊例を擧す「主家抽いて正位に入る、一人あり、出入の息無し」と云つて、渠をして正位あることを知らしむ。更に功を扱む極則淨潔の位有り。亦呼んで偏位中より來ると爲すことを得。此れ辨じ難し。須らく揀得し出すべし。○學士、僧の先師に問ふを揀するが如き、「如何なるか是れ玄旨。」師曰く、「死人の舌の如し」と。又問ふ、「十二時中何を將つてか奉獻せん。」曰く、「無物」と。是を偏位中來と曰ふ。此の二例の語、呼んで偏位中來

素なるが故に大といふ。
① 什麼物か云々。傳燈五、南嶽懷讓禪師直に曹溪に至つて六祖に參ず、祖問ふ、什麼物の恁麼にし來る、曰く、說假一物即不中。
② 亦光境云々。傳燈第七に曰く、盤山上堂、夾心月孤圓にして光萬象を吞む、光境を照すに非ず、境も亦存するに非ず、光境俱に亡ず、復た是れ何物ぞ。
③ 光境。光は能緣の心、境は所緣の境、物を緣する心も、緣せらる、境も、俱も忘じ盡して一切何物も存在せざる解脱の境界をいふ。
④ 又定慧等しく云々。北本涅槃經第三の文、南泉此の語を以て黃檗に問ふこと傳燈第八南泉傳中に見ゆ。定慧は禪定と智慧の併稱。
⑤ 功。功勳五位の一位にして、

功とは奉順の功に由りて天子の君父と相見し、毫も其の間に隔歴を生ぜざるが如く、人始めて主人公に相見し、一切の妄見を邊脱せるを云ふ、即ち本然自性を徹見せし位なり。
⑥ 玄學。幽玄奧妙の學、即ち佛道の深奥なる處と云ふこと。
⑦ 出息衆縁に云々。第二十七祖東印度般若多羅尊者、因みに東印度國王、尊者を請じて齊するの次、國王乃ち問ふ、「諸人盡く經を轉ず、唯だ尊者其として轉ぜざる。」祖曰く、「貧道出息衆縁に涉らず、入息衆縁に居せず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷、但だ一卷兩卷に非ず。」
⑧ 縁界。五蘊十八界なり。
⑨ 僧の先師に問ふ云々。洞山録に曰く、「僧問ふ、如何なるが是れ玄中又玄、師曰く、死人

と爲すことを得ざれば、須らく各揀すべし。若し是れ玄旨一例の語ならば、功勳に同す可し。也た此の二例の語并に呼んで偏位及び兼帶と爲すことを得ざれば、前に已に明かに破し了れり。是れ功を借つて位を明し、位を借つて功を明す、此に同じ。

或は相兼帶し來る者有り、這裏有語無語と説かず、這裏直に須らく正面にして去る可し。這裏圓轉せざることを得ざれば、事須らく圓轉すべし。

(相兼帶し來るとは、語勢偏にあらず正にあらず、有にあらず無にあらず、全きが如くにして全きにあらず、虧くるに似て虧くるにあらずとなす。唯だ正面にして去ることを得、也た去るときんば的を立せざれば、立せざるときんば至妙の言なり。境圓かならざるは常情の事なり。先師の文殊喫茶の語に代るが如し、曰く、「這箇を借取して看得てんや」と。亦翠微の「毎日什麼をか庵ふ」と曰ふが如し。)

然れども途に在るの語は、總て是れ病、夫れ當に人、先づ須らく語句を辨得して正面にして去る可し。有語是れ恁麼に來り、無語是れ恁麼に去る。作家中、言語無きにあらず、有語無語涉らず、這箇喚んで兼帶の語と作す。

の舌の如し。
① 又問ふ十二時中云々。洞山録に云く、「問如何なるが是れ善知識眼、師曰く、紙擦油なし、問ふ、十二時中何を將てか奉獻せん、師曰く、無物、問ふ、身命聖切の處如何、師曰く、雜種すること莫れ云々。」
② 圓轉。回互圓轉といふ、圓轉は自在の義、正偏相互に交參滲入して、一方に執着することなく、自在の用をなすをいふ。
③ 先師の文殊喫茶云々。洞山録に曰く、「擊、文殊大士無著と來を喫するの次、乃ち破境を拈起して無著に問うて曰く、南方還つて這箇ありや、著曰く、無、文殊曰く、尋常甚麼を將てか喫茶す、著無對、師代つて手を展べて曰く、有無は且く置く、這箇を

兼帶の語は全く的無し。

(相兼帶し來ると云ふは、有語無語に落ちず、
藥山帶刀の語の如きは、即ち此れは是れ兼
帶の語。時に臨んで此の語の來勢を看る。或
は當頭正面にして去り、或は異中虛し、此
れ若し妙會ならざる時は、則ち千里萬里なり。
○相兼帶し來るの語の例を引かば、文珠喫茶
の語及び「這箇の人今什麼の處にか去る」と
云ふが如し。雲巖曰く「作麼作麼」と又曰く、
「即今作麼生」と。此の例甚だ多し。○亦
功勳中の兼帶あり、向上の事に似たり。時
に臨んで辨取せよ。淨妙の處に落つるが如
し。則ち須らく事の在り有ることを知るべし。
去らんと要すれば則ち去り、止らんと要すれ
ば則ち止る。千萬宛轉、莽鹵なることを得ざ

借取して看ん、得てんや否
や。

○亦翠微の毎日云々。洞山錄に
云く、「雲居到り參ず、師問
ふ、其の處より來る。居云く、
翠微より來る。師云く、翠微
何の言句あつて從に示す。居
云く、翠微を供養す。某甲
問ふ、翠微を供養す。翠微還
つて來るや否や。微云く、懶
毎日箇の甚樂をか嗜ふ。師曰
く、實に此の語ありや否や。
云く、有り。師曰く、虚りに作
家に參見し來らざる。翠微は支
那陝西省翠微山無學禪師、丹
霞天然の法嗣。

上の事を明めんと欲せば、須
らく此の意を體して始めて得
べし。

○當頭正面。當頭といふも正面
といふも同じ。當下、又は直
下の意なり。

○這箇の人今云云。洞山錄に曰
く、雲岩師と共に蓋地を鶴く
次、岩先德の事に就いて師問
ふ、此の人什麼の處にか去
る。岩良久して云く、作麼、
作麼、師曰く、太遲生。雲岩は
青原下、支那鐘陵建昌の人、
姓は王氏、幼にして石門に至
りて出家し、百丈懷海に従つ
て參究す。こと二十年、因緣
契はすして去つて藥山惟鏡に
投じ、遂に一大事を了得しそ
の法を嗣ぐ。後潭州雲巖山に
住し、大いに宗風を振る。門
下に洞山眞价を出ず、唐武宗
皇帝會昌元年十月二十七日に
示寂す。勅して無住大師と號

れ。夫れ問答兩家の語勢は相報い、皆五位を
出でず。但だ語に麤細有り答に淺深有り、所
以に先師非言句中に於て強ひて言を以てす。
皆縁に對するが爲に、而も斯の要を設くるの
み。大無明底の人の如きは、全體となす、
○關提に同じからず。關提は則ち事有ること
を知つて卻つて。執。執すと雖も、卻つて孝
養を成す。執とは祖佛及び自己自分の父母を
存せざるなり。○紅爛底の人は、全く擔荷に
歸せず、至尊を立てざるが爲に、大。保任底
の人は、脚を刺し泥裡に入ると爲す、小小の護
持にあらず。○夫れ相兼帶し來るとは、直に
須らく文珠喫茶の語、及び先師、雲巖に答ふ
る。鉏耨の語、并に。安和尚法堂の語、及び
藥山の淳。布衲洗佛の語に似るべし。中に

○即今作麼生。洞山雲居に問
ふ、佛未だ出でず、祖未だ傳
へざる時如何、云く、即今作麼
生。

○保任。保任任持して失はざる
をいふ。

○向上の事。向上の一大事の時
にして、佛祖所説の一大事、
宇宙の眞理を指していふ。

○鉏耨の語。鉏は鋤に同じ、前
に已に出づ、見よ。

○關提。洞山錄に曰く、師雲居
に問ふ、大關提の人、父を殺
し母を害し、佛身血を出し、
和合僧を成る、是の如き種々
の孝養何にかある。居云く、
始めて孝養を得たり、爾るよ
り洞山許して室中の領袖とな
す。

○藥山の淳布衲洗佛の語。會元
五藥山惟鏡禪師章に曰く、題
布衲洗佛す、山問ふて曰く、
這箇汝が浴するに從す、這箇
を浴し得んや、護曰く、那箇
を把り將ち來れ、山乃ち休
す。

於て最も妙に兼帯することは、薬山の道吾に答ふる帶刀の語、及び百丈下堂、大衆散せんと欲して未散のとき、問うて曰く、「是れ什麼ぞ。」薬山遙かに此の語を聞いて、「此に在り」と云ふに過ぎたること無し。便ち暗頭の兼帯と道ふ。功を借つて物を明し、物を借つて功を明し、過を借つて功を明し、功を借つて過を明す等、來ること是の若し。薬山と新豐と并に前の諸徳出所、超過して正位に入る。是れ玄談奇特の句のみ。次に小自得力の者に到つては、則ち抽いて正位に入る。此の例の語、常用なり。吾れ住持多緒なるに縁つて子細に及ばず、略ぼ少分許りを明す。汝等諸人須らく容易に輕慢すべからず。若し更に凝滯あらば、旋かに當に決了すべし。直に須らく勵め力め修行して、未來際をして此の事を斷せざらしむべし。慢洩することを得ざれば、或は純朴の者に値つては是れ奇器なり。亦隱す可らざるのみ。他の智上座遷化の時に臨んで、人に向つて道ふ、「雲巖有ること知らず、我れ悔らくは、當時伊に向つて説かざることを。然も此の如くなりと雖も、且つ薬山の蔡子に違はず。」看よ、他の智上座、合に作麼生

●布衲。布衣の衲僧の義、比丘の通稱。
●道吾。支那湖南省漳州道吾山の圓智禪師、薬山惟嚴の法嗣、但し一本に雲巖に作る、而して帶刀の語は已に洞山録にも「薬山雲巖先師と遊山す云々」として擧げられたれば、これ或は眞ならん。
●百丈下堂云々。薬山、雲巖に問うて曰く、海見（百丈懷海）更に什麼の言句ある、岩曰く、師（百丈を指す）上堂大集方に集る、拄杖を以て一時に打趁す、大衆下堂、師驚口大衆と呼ぶ、大衆、首を回す、師曰く、是れ什麼ぞ云々、山曰く、此に在り。
●智上座。道吾を指す、道吾名は圓智なり。
●遷化。化度を他方世界に遷すの義にて、僧の死をいふ、雲巖遷化は燈元に依るに、唐の武

か老婆なる。南泉曰く、「異類中に行け」と。且つ 密闍黎有ることを知らずと。

註釋 洞山五位頌

正中偏。○暗裏點頭。○三更。○初夜月明の前。○黑白未だ交らざるを辨取せよ。○萌芽未生の時。○只だ今是れ什麼の時ぞ。○此の中日月無し、前後を説き去らざれば、怪しむこと莫れ相逢ふて相識らざることを。（忘卻なり。○就くなり。又作麼の劫中にか違背し來る。恁麼ならば則ち俱に手を拱いて去らん。○隱として猶ほ懐ふ舊日の嫌を。（此の兩句一意なり、終に相似す。○又曰く、圓なり。○又今日什麼をか重んせん。○又恁麼ならば自ら欺くことを得ず。）
偏中正。（縁中に會ふなり。）○失曉の老婆古鏡

宗會昌元年なり。然れば道吾の遷化唐の文宗大和九年乙卯に後ること正に七年なり。雲巖有ることを知らず云々。道吾雲巖と共に薬山に在りし時、吾先づ方丈に入り黒處に侍立す、次いで雲巖薬山に問ふ、南泉言へることあり、喚んで如々となす、早く是れ變なり、須らく異類中に向つて行くべしと、如何が是れ異類中行、山曰く、今日勞倦す汝に向つて説くこと能はず、且去つて明日來れ、此の時道吾先づ出で來る、後に雲巖出で來る。道吾問ふ、適來什麼の事をか問ふ、岩具に道吾に擧示す、吾曰く、和尙什麼とぞ、道吾曰く、我がために説いて、吾當時齒を咬んで便ち休す、道吾の雲巖有ること知らずといふ所以なり、有ること知らざるは只だ是れ異類中行なり。道ふことなれば、宗門上の事有ること知らずと、故に薬山の蔡子に違はざるなり。
●蔡子。嫡子なり。
●異類中に行く。異類即ち畜生の中に行くの義、發願利生の大乘の菩薩が成佛得脱の後、涅槃の本城に安住せず、生死の迷界に却來して六道に輪廻し、機に應じ感に應じて、一切の有情を濟度するをいふ。
●密闍黎。神山僧密のこと、通例密師伯として知られたる人。雲月録に曰く、道吾病に罹る、雲巖密師伯を遣して病を問はしむ、因つて此の事に及ぶ。師伯曰く、知らず知らずと、便ち回りに去れり。
●暗裏點頭。暗裏は闇の中なり、點頭はうなづくこと。
●三更。午後の十二時、俗にいふ、夜なかりなり。

に逢ふ。(露なり。○適來又記得す、又是れ什麼の模様ぞ。○恁麼ならば別に色を呈せず。)分明 靚面更に眞なし。(即今會ふあり。○只だ這箇は便ち是なり。○失なり。又恁麼ならば、則ち未だ眞に有らざる時、些子に較れり。)争奈せん 頭に迷ふて還つて影を認むることを。(是れ本來の頭にあらす、又影を認むること莫くんば即ち是。又終に記得せず。又恁麼ならば改むること得ざれ。)

正中來。(過なり。)無中に路有り、塵埃を出づ。(無句中句あり。○相隨つて來るなり。又從來の事作麼生、作麼ならば相借らす。)但だ能く當今の諱に觸れずんば、(這箇に傍す。○早く是れ傍なり。○自らはれ一般の人。○恁麼ならば盡大地第二人なし。)也た 前朝斷舌の才に勝らん。(黙にあらす。○更に這箇を切にす、又終に齒を切らざれ。○恁麼ならば叮嚀にして得ざる者。)

兼中至。(有句中より來る。)兩刃鋒を交へて避くることを須ひす。(主客相觸れす。○彼彼傷らす、箭箭相挂へ脈脈斷せず。○相敵せざる者、又恁麼ならば卻つて相管せず。) 好手は猶ほ 火裏の蓮の如し。(壞することを得ず。○誰か是れ便りを得ん。○阿誰にか弱らん。又恁麼ならば終に第二人と作さす。) 宛然として自ら 衝天の氣あり。(人に従ひ得るにあらず、又恁麼ならば借らす。○本有にあらす、又恁麼ならば已も亦存せず。○己有るにあらす。)

兼中到。(妙挾。)有無に落ちず誰か敢て和せん。(當頭にあらす。○他は是れ作家。○正に好し 商量するに、什麼を喚んでか商量となす。道ひ將ち來れ、云く、問へ。) 人人盡く 時流を出でんと欲す。(皆類を出でんと欲す。○什麼の出頭之處か有る、又動すれば死。又恁麼ならば處に隨つて快活せん。) 折合して還り歸つて炭裏に坐す。(一なり、即ち知るべし、將に知る合に作麼生。○他を認ずることを得ざれ。又恁麼ならば頼に是れ某甲を得たり。○此れは位中の事總て正位に就いて主と爲す。若し是れ正位中ならば兼て言説無し、亦實に對する底の道理なし。若し是れ實に對せば、偏位極則の處呼んで實に對すと爲す、若し是れ兼帶等ならば、總て是れ時に臨んで索む、喚んで同じからず、或時は對し、或時は對せず。亦呼んで有語中の無語、無語中の有語と爲す、廣は偏正位

●初夜、午後八時頃までをいふ。
①劫中、「とき」といふ程のこと。
②隱々、明かならざる貌。兼、一に研に作る。
③失曉、破曉と同じ、よあけのこと。
④記得、俗に「覚えて居る」といふ程のこと。
⑤模様、「なりふり、かたち」といふ程のこと。
⑥靚面、猶ほ規見といふが如し。
⑦些子に較れり。些子は此少の意にて、「少し」又は「多少」の意。
⑧頭に迷ふ。首楞嚴經四に曰く「室羅城中の演若達多、忽ち晨朝に於て鏡を以て面を照し、鏡中の頭の眉目見るべきを愛するに、已が頭面目を見ざるを瞋責して以て、慧慧と

して狀へ無く狂走す。」
⑨過、止まらざる意。
⑩當今、今上階下のこと、正位に驗ふ。
⑪前朝斷舌の才。人をして舌を結ばしめて、一語を發せざらしむる才能のこと、即ち極めて辯才に富めることをいふ。
⑫昔し、隋の時に辯士有り、李智章と名づく、辯論ある毎に衆皆舌を結ぶ、故に時人之を稱して斷舌の才となす。
⑬好手。上手といふことにて、巧妙なる手段のこと。
⑭火裏の蓮。希有なるをいふ。
⑮大經五、如来性品に曰く、解脱を希有と名く、水中に蓮華を生ずるは、希有となすに非ず、火中生ずるは希有なり。
⑯宛然。さながらといふこと、恰の意。
⑰衝天。冲天といふも同じ。
⑱當頭。又正面につきあたる

の中に明す所の如し。更に偏位の^①位子に入らざる語あり、方に人の爲にし難かるべし。須らく是れ明眼底の人にして初めて得べし。東を指して西を劃することを受けされ。

③ 三等の墮

夫れ沙門の食を取るに三等の墮あり。水牯牛と作るは是れ沙門の墮、不受食は是れ尊貴の墮、不斷聲色は是れ隨類墮。只だ墮し去る是れ甚麼人の分上の事ぞ。

(知らんと欲せば、是れ異類中に入つて沙門邊の事を認めされ。所以に古人權に水牯牛を借つて異類と爲す、祇だ是れ事上の異類言語中の異類にあらず。)

若し是れ言語中の異類ならば、則ち是れ往來の言語盡く是れ類。所以に南泉道く、「智不到の處、切に忌む道著することを。道著すれば則ち頭角生す。喚んで、如如と作すも早く是れ變せり、直に須らく異類中に向つて行くべし。」如今須らく異中に向つて異中の事を道取すべし。夫れ語中無語にして始めて是の如きことを得ん。南泉病める時、人有り問ふ、「和尚百年の

① 商量。問答の意、商買の量度して中平を失せず、以て各々其の意を得るをいふ。
② 時流。一本に常流に作る。
③ 折合。折は物の輕重多少を判斷すること、合は之を較べることに、即ち最後の決定をなすことにて落着と云ふほどの意、又は畢竟の意。
④ 位子。下は助字。
⑤ 明眼底の人。心地開明して大千を照破する底の眼を具する人ないふ。
⑥ 三等の墮。三種の墮に同じ、前に已に註す。
⑦ 沙門。梵語舍羅摩拏の訛、又兔門、沙門那に作る、勸息、上心、止息、出家人等と譯す、出家して佛道を修するものの總稱。
⑧ 水牯牛。佛燈九に云く、鴻山禪師、案に示して曰く、「老僧

後、甚麼の處に向つてか去る。」泉曰く、「我れ山下檀越の家に向つて、一頭の水牯牛と作り去らん。」云く、「某甲、和尚に隨つて去らんと擬す、還つて得てんや。」泉曰く、「若し我れに隨はば一葦草を含み來れ」と。

(這箇は是れ沙門轉身の語なり。所以に汝近づかんと擬せば、一葦草を含み來れと道ふて、渠に親近せしむ。是を呼んで無漏を以て始めて渠を供養するに堪へたりと爲す。)

又曰く、「隨類墮と云ふは、祇だ今一切聲色の物物上に於て、轉身し去つて階級に隨はざるを喚んで隨類墮と作す。又曰く、「尊貴墮と云ふは、法身法性は是れ尊貴邊の事なり。亦須らく轉卻すべし。是れ尊貴墮なり。祇だ露地の白牛の如きは是れ法身極則なり、亦須らく轉卻して他の一色無辨の處に坐することを免るべし。並に是れ供養邊の事を斷すと稱す。供養を須ひんと欲せば須らく此の食を得べし。所以に無味の味と云ふ。亦無漏是れ供養するに堪へたりと曰ふ。並に餘は觸汚の食、無漏解脱の食にあらざるなり。」人有り、百丈に問ふ、「何を以てか食と爲さん。」曰く、「無漏を以て食とせよ」と。雲巖曰く、「將に味を以て供養を爲さんとする莫

百年の後、山下檀越家に向つて、一頭の水牯牛と作り、右脇下に五字を著すの公案あり。
① 沙門墮。被毛戴角、即ち沙門邊の事及び諸聖位に執せざるをいふ。
② 隨類墮。不斷聲色、六塵に執せず、墮して味さず、之に任じて礙無し。
③ 如也。不變不異の義。
④ 檀越。施主と譯す。六度の中の布施を行ふ人のこと、又檀家ともいふ。
⑤ 轉身。轉は轉回の義、參禪學道運み進みて窮極の處に至り、更に身を轉じて自在なるをいふ。
⑥ 無漏。有漏に對す、こもるゝことなし」と訓じ、一切の煩惱妄想の鎖縛を盡して、少しも縛ることなきをいふ、又無爲の義にも用ふ。

れ。道吾曰く、「有ることを知つて保任するの處、盡く是れ供養なり」と。
 夫れ 正命食を取らん者は、須らく三種の墮を具すべし。時に僧有り、
 問ふ、「被毛戴角は是れ甚麼の墮ぞ、不斷聲色は是れ甚麼の墮ぞ、不受食は
 是れ甚麼の墮ぞ」。余曰く、「被毛戴角は是れ沙門墮、不斷聲色は是れ隨類
 墮、不受食は是れ尊貴墮なり」と。不受食尊貴墮と云ふは、是れ本分の事、
 有ることを知つて取らず、故に曰ふ尊貴墮と。被毛戴角沙門墮と云ふは、
 沙門邊の事、及び諸聖の報位を執らざるなり。不斷聲色隨類墮と云ふは、初
 心に自己本分の事有ることを知るが爲に、^① 回光の時は、諸の色聲香味觸
 の法を擯出して、寧謐を得、則ち功を成して後、^② 六塵を執らず、墮して而
 も味さず、之に任じて無礙なり。故に曰く、「外道六師は是れ汝が師、彼
 の師墮する所、汝も亦隨つて墮し以て食す可し」と。食とは則ち是れ正命
 食なり、亦本事なり。祇だ是れ六根門頭の見聞覺知に就いて、染汚せられ
 ざるを呼んで墮と爲す。向前の^③ 怕に同じからず。本分の事すら猶ほ取ら
 ず、況んや其餘をや。
 (沙門の食を取るに、三種の墮あり。水牯牛と作るは是れ甚麼の墮ぞ。

① 法身。法性共に諸法の體性威
 は善人具有の理性を指す語な
 り、一は性に約し、一は身に
 約するの義あるのみ。
 ② 露地の白牛。法華譬喻品に出
 づ、佛果に喩ふ。
 ③ 一色無別。差別の相を泯した
 る平等の境界を云ふ、法身邊
 といふも同じ。
 ④ 人あり百丈に問ふ云々。傳燈
 六に問ふ。
 ⑤ 雲巖云々。傳燈四藥山惟嚴草
 にはく、「僧問ふ、何を以てが
 供養せん、師曰く、無物のも
 の。」
 ⑥ 正命食。邪命食に對す、沙門
 は慧命を相續するために行乞
 して得て食するをいふ。
 ⑦ 回光。自己を反省して自己の
 本面目を求むること、凡夫顯
 倒して、擧りに聲色等の境を
 逐ふて狂走し、外に向つて物
 を求むるなり、故に聲色を見

代つて曰く、「正位に處せず、其の身を揀ばず、始めて沙門の墮と作す。」
 「不斷聲色は是れ甚麼の墮ぞ。」代つて曰く、「凡情盡くことを得て聖量
 も亦忘す、聲色塵中更に斷す可からず、乃ち食を取る可し、是れ隨類
 墮と爲す。」又曰く、「彼の師の墮する所、汝も亦隨つて墮せん、乃ち食を
 取る可し。沙門墮と云ふは亦其の行無きにあらず、亦其の間無きにあら
 ず、其の間有りと雖も、常に其の間無し、其の行有りと雖も、常に其の行
 無し。其の中此の事切に須らく時節を知つて東西すること莫かるべし。」
 問ふ、「如何なるか是れ彼の師の墮する所。」曰く、「田舎の翁、^① 聚落に入
 つて眼耳鼻舌身意俱に失卻す。」云く、「如何なるか是れ隨類墮。」曰く、「不斷
 聲色。」又曰く、「香味を失せず。」云く、「如何なるか是れ彼の師。」曰く、
 「六處。」云く、「如何なるか是れ汝亦隨つて墮す。」曰く、「存す。」云く、「箇
 の甚麼をか存す。」曰く、「動著することを得ざれ、又聲色を離れざれ。」
 問ふ、「不受食は甚麼の墮ぞ。」曰く、「^② 正因を了達して、^③ 勝解を存せず。
 故に尊貴墮と曰ふ。」

又鴻山曰く、「我れ百年の後一頭の水牯牛と作つて、左の脇上に鴻山僧某

聞し、思量分別する所の者は是
 れ何物ぞと、内に反求するこ
 とをいふ。
 ① 寧謐。寧靜に同じ、靜なる
 こと、太平無事なること。
 ② 六塵。色聲香味觸法の六境
 は、吾人の心を染汚するを以
 て塵と云ふ。
 ③ 外道六師は云々。維摩詰經弟
 子品の文、六師とは釋尊在世
 の時に婆羅門教の教團中に於
 て、最も勢力の優勢なりし六
 人の教祖をいふ、即ち、一、
 富蘭那加葉、二、末伽梨瞿俱
 舍子、三、刪闍耶毘羅胝子、
 四、阿耆多翅舍飲婆羅、五、
 迦羅鳩迦迦旃延、六、尼乾陀
 若提子。
 ④ 怕。「おそる」と訓ず、今は六
 塵に染汚せらるゝを怕るゝな
 り。
 ⑤ 聚落。落は居なり、郷より小
 なるを聚落といふ。

甲一行の字を書せん。汝道へ、之を見る時に當つて喚んで甚麼とか作さん。」
無對。後に師代つて曰く、「喚んで水牯牛と作さん」と。

問ふ、「未審し此の水牯牛還つて耕稼を解するや否や。」曰く、「^①灼然。」
云く、「是れ甚麼の類ぞ。」曰く、「披毛戴角の者。」云く、「四時何の水草をか食む。」曰く、「口より入らざるもの。」云く、「如何なるか是れ水牯牛。」曰く、「證聖せず。」云く、「如何なるか是れ一莖草を含む。」曰く、「毛羽相似去る。」

問ふ、「是れ聖を超ゆるか、是れ類を超ゆるか。」曰く、「是れ超聖。」

問ふ、「如何なるか是れ水牯牛。」曰く、「冥冥 朦朦。」云く、「如何なるか是れ一莖草を含む來る。」曰く、「古人道ひ了るなり、毛羽相似去る」と。又曰く、「一草と云ふは、祇だ是れ不變異を明し得たり。」

余曰く、「祖佛有ることを知らず、狸奴白牯卻つて有ることを知る。」云く、「什麼としてか狸奴白牯卻つて有ることを知る。」曰く、「祇だ是れ百く所解なし。」云く、「祇だ祖佛の如きは、甚麼として有ることを知らざる。」曰く、「祖は執印たり、佛は相似たり。」云く、「祇だ狸奴白牯の如きは、箇の甚麼をか有ることを知る。」曰く、「祇だ狸奴白牯有ることを知る。」云く、「如何なるか是れ狸奴白牯有ることを知る底の事。」曰く、「東西より來らず、三十二相に従はず。」

問ふ、「如何なるか是れ祖。」曰く、「上有。」云く、「如何なるか是れ佛。」曰く、「相似去。」

④ 四種異類

一には 往來異類と云ふは、今一切の聲言語階級地位捨父逃逝するが如き、盡く皆卻つて向上の祖、又異類と爲すことを得たり。又天堂・地獄・餓鬼・畜生・修羅等も皆是れ異類。二には 菩薩同異類と云ふは、先づ自己を明めて然して後卻つて生死異類の中に入つて他を攝す。已に涅槃の果を證し、生死の類を捨てず。自利自他にして、一切衆生皆成佛せしめ、末後より成佛せんと願ふ。大權の菩薩若し衆生を化さずんば、己の事、成辨することを得るに由無き所以なり。故に 南泉曰く、「先づ那邊を過ぎて有ることを知り、遮邊に卻來して行李す」と。菩薩は 六度萬行を具す。教に云く、「若し一衆生も未だ度せざる者あらば、吾れ終に正覺を成せず」と。誓願無邊なれば衆生も無邊なり。是の如く行持する故に、

① 六處。處は六根六境の通稱、根境は識を生ずる依處なるが故に處といふ。
② 正因。正因佛性のこと、これ諸法實相の理體にして、此の理體は正しく佛果の因となるが故に正因といふ、今正因を了達すとは、佛果を得るといふことなり。
③ 勝解。勝は「すぐる」と訓す、勝れたる解會の意、已到住著をいふ。
④ 耕稼。稼は苗稼と熟字し、田如のこと、耕稼は田畑を耕すこと。
⑤ 灼然。分明なる貌。
⑥ 冥々。昏蔽なり。
⑦ 朦朦。明かならざること。
⑧ 四種異類。此の四種の自在を有せざる者は、自分の衲僧と稱することを不得ず、四種とは、菩薩同異類、沙門異類、

宗門異類、往來異類。
① 往來異類。學者が、一切の聲言語より自己の地位階級、父母をも盡く放捨して只だ道を求めて、天堂地獄餓鬼等の異類に往きて問答往來するをいふ。
② 菩薩同異類。先づ自己の心地を明め、而して後却つて他の異類中に行つて衆生を教化して他をして涅槃を證せしむる菩薩利他の行をいふなり。
③ 大權。權は方便の義、種々の方便を以て衆生を接化するをいふ、大は尊稱。
④ 成辨。成就といふほどの意なり。
⑤ 南泉曰く云々。此れ佛燈には見えす、宏智録第一に出づ。
⑥ 遮邊。遮は道に通ず。「此方」の義。
⑦ 行李。李は履に通ず、行李は往來の意。